

千葉県八千代市

向 境 遺 跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ



2004

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会



獸脚・二彩



黒書土器「三宝・寺」



燃糸文土器



無文土器



捺痕土器 (表)



捺痕土器 (裏)



擦痕土器 2 (表)



擦痕土器 2 (裏)



擦痕土器 3 (表)



擦痕土器 3 (裏)

序 文

八千代市は下総台地の北西部に位置し、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、おもに住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代中ばからは次々と団地の建設が行われ、それに伴う人口の増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を変えております。しかし八千代市はかつての印旛沼と新川等の豊かな水を背景とした豊かな自然も残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も自然を多く残した住宅都市として発展していくことと思われまます。

一方、この住宅都市としての発展にともなう宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そしてこの緑豊かな大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできていたことが、近年の調査によって分かってまいりました。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは、数多くの墨書土器が出土し、八千代市は全国でも墨書土器の出土では有数の地となっております。

このようななかで、八千代市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に『(仮称)八千代カルチャータウン』の開発が計画されたのは昭和40年代とのことでした。この開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られており、ここに所在する埋蔵文化財の保護について関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により昭和63年3月から開始され、平成11年3月に終了致しましたが、この期間に調査を行った遺跡は9遺跡34地点に及び、旧石器時代から近代に至る貴重な調査成果をえることができました。そして平成12年4月より順次、整理作業を進めておるところです。本報告書はこの9遺跡のうち、向境遺跡の調査の成果をまとめたものです。向境遺跡では縄文～奈良・平安時代のムラの跡が検出されており、それに伴う遺物も数多く出土しております。

本書が学術資料としてはもとより、広く教育機関や地域の歴史に関心をもたれる方々、また、文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、ご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関、関係諸氏に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査および整理作業に従事された方々にも深く感謝いたします。

平成16年12月

八千代市遺跡調査会
会 長 三浦 幸子

例 言

1. 本書は、『千葉県八千代市向境遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』である。
2. 向境遺跡は、千葉県八千代市神野字向境1155外に所在する。
3. 向境遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
5. 発掘調査の実施期間、調査面積等については、第1章に記載した。
6. 整理作業及び報告書刊行作業は、宮澤久史・朝比奈竹男が担当し、平成15年9月1日～平成16年5月31日までの期間実施した。
7. 本書の執筆・編集は宮澤久史が行った。縄文土器の観察および考察等については一部中野修秀氏の協力を得た。
8. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
9. 発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
10. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
11. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
12. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
13. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。
14. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）
館山市立博物館・千葉県教育庁文化財課・（財）千葉県文化財センター・（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター・南山大学人類学博物館・明治大学考古学博物館・八千代市教育委員会・八千代市郷土博物館
阿部芳郎・井上賢・大塚達朗・小久貴隆史・小笠原永隆・菊池慎太郎・鳥田和高・田形孝一・原田昌幸・平川南・深谷昇・藤岡孝司・峰村篤

凡 例

1. 遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通し番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通し番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1 国土地理院発行 1/25,000地形図 「小林」「佐倉」「白井」「習志野」(平成12年発行)

図2 大成建設株式会社発行 1/4,000 Y. K, プロジェクト 空中写真測量図(昭和63年発行)

3. 本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 掘立柱建物 1/80 土坑 1/50 溝 1/50 炉穴 1/50 その他の遺構 1/80

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図臨に表示した凡例を参照されたい。



(6) 竈のある住居跡にあつては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図臨に示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/2 1/3 石器・石製品 2/3 1/2 1/3 1/4
鉄器・鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4



(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗り、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は線取りを行った。なお、推定復元部分は破線で示した。



6. 本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

(1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。

7. 墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、一部コンピュータによって画像処理を行い、読みやすくしたものがある。

8. 本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「匱（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。

9. 鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
表目次

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	6
第4節 遺跡の概要	9
第2章 遺構と遺物	10
第1節 縄文時代	10
(1) 炉穴	13
(2) 遺構	18
(3) 包含層遺物	33
1 土 器	35
早期	35
前期	50
前期末～中期前半	53
中期後半～後期初頭	57
後期前半	59
後期中葉～後葉・晩期前半	61
2 石 器	64
第2節 弥生時代	66
(1) 堅穴住居跡	66
(2) 遺構外出土遺物	68
第3節 古墳時代	69
(1) 堅穴住居跡	70
(2) 土坑及び遺構外出土遺物	84
第4節 奈良・平安時代	86
(1) 第1群の遺構と遺物	87
(2) 第2群の遺構と遺物	131
(3) 第3群の遺構と遺物	191
(4) 第4群の遺構と遺物	257

(5) 遺構外出土遺物	275
1 土 器	275
2 土製品・石製品	279
3 鉄製品	280
第3章 考 察	283
第1節 縄文時代	283
第1項 早期	283
第2項 前期	290
第3項 前期末葉～中期初頭	291
第4項 中期	292
第5項 後期	293
第6項 晩期	294
第2節 弥生時代	296
栗谷遺跡、役山東遺跡との比較検討	296
第3節 古墳時代	300
向境遺跡における古墳時代期の諸問題	301
第4節 奈良・平安時代	303
第1項 第1群の遺構と遺物	303
第2項 第2群の遺構と遺物	305
第3項 第3群の遺構と遺物	312
第4項 第4群の遺構と遺物	314

写真図版
報告書抄録

插图目次

图 1-2-1	向境遺跡周辺地形図	2	图 2-1-36	包含層遺物 条痕文(2)	48
图 1-2-2	向境遺跡調査区域図	3	图 2-1-37	包含層遺物 前期	50
图 1-2-3	向境遺跡本調査地区剖面図	4	图 2-1-38	包含層遺物 前期末~中期前半	53
图 1-3-1	向境遺跡位置図(1/50,000)明治15年迅速図	6	图 2-1-39	包含層遺物 中期~後期前半	57
图 1-3-2	向境遺跡位置図(1/50,000)	7	图 2-1-40	包含層遺物 後期前半	59
图 1-4-1	向境遺跡基本土層図	9	图 2-1-41	包含層遺物 後期中葉~後葉、晚期前半	61
图 2-1-1	向境遺跡縄文時代遺構配置図	10	图 2-1-42	包含層遺物 石器	64
图 2-1-2	向境遺跡遺構配置図	12	图 2-2-1	向境遺跡弥生時代遺構配置図	66
图 2-1-3	F001	13	图 2-2-2	A001	66
图 2-1-4	F002	13	图 2-2-3	A001(2)	67
图 2-1-5	F003	14	图 2-2-4	遺構外出土遺物	68
图 2-1-6	F004	14	图 2-3-1	向境遺跡古墳時代遺構配置図	69
图 2-1-7	F005	15	图 2-3-2	向境遺跡古墳時代遺構配置図(2)	69
图 2-1-8	F006	15	图 2-3-3	向境遺跡古墳時代遺構配置図(3)	69
图 2-1-9	F007	16	图 2-3-4	向境遺跡古墳時代遺構配置図(4)	70
图 2-1-10	F008・F009	16	图 2-3-5	A002	70
图 2-1-11	I001	18	图 2-3-6	A002(2)	71
图 2-1-12	I002	19	图 2-3-7	A003	72
图 2-1-13	I003	20	图 2-3-8	A004	74
图 2-1-14	I003(2)	21	图 2-3-9	A004(2)	75
图 2-1-15	I004	23	图 2-3-10	A005	76
图 2-1-16	I005	23	图 2-3-11	A005(2)	77
图 2-1-17	I006	25	图 2-3-12	A006	79
图 2-1-18	I006(2)	26	图 2-3-13	A006(2)	80
图 2-1-19	I007	27	图 2-3-14	A007	82
图 2-1-20	I007(2)	28	图 2-3-15	D001	84
图 2-1-21	I008	29	图 2-3-16	遺構外出土遺物	84
图 2-1-22	I009	31	图 2-4-1	向境遺跡奈良・平安時代遺構配置図	86
图 2-1-23	向境遺跡包含層遺物分布図	33	图 2-4-2	向境遺跡奈良・平安時代第1群 遺構配置図	87
图 2-1-24	遺物包含層図 早期	35	图 2-4-3	A008	88
图 2-1-25	遺物包含層図 摺糸文	36	图 2-4-4	A009	89
图 2-1-26	包含層遺物 摺糸文	36	图 2-4-5	A010	91
图 2-1-27	包含層遺物 摺糸文(2)	37	图 2-4-6	A010(2)	92
图 2-1-28	包含層遺物 摺糸文(3)	39	图 2-4-7	A011	93
图 2-1-29	包含層遺物 摺糸文(4)	40	图 2-4-8	A011(2)	94
图 2-1-30	遺物包含層図 無文	41	图 2-4-9	A012	96
图 2-1-31	包含層遺物 無文	42	图 2-4-10	A012(2)	97
图 2-1-32	包含層遺物 無文(2)	43	图 2-4-11	A012(3)	98
图 2-1-33	包含層遺物 無文(3)	45	图 2-4-12	A013	101
图 2-1-34	遺物包含層図 条痕文	46	图 2-4-13	A013(2)	102
图 2-1-35	包含層遺物 条痕文	47			

図 2-4-14	A014	105	図 2-4-57	A035	160
図 2-4-15	A014(2)	106	図 2-4-58	A036	162
図 2-4-16	A014(3)	107	図 2-4-59	A037	163
図 2-4-17	A015	110	図 2-4-60	A039	164
図 2-4-18	A016	111	図 2-4-61	A039(2)	165
図 2-4-19	A017	112	図 2-4-62	A040	166
図 2-4-20	A018	114	図 2-4-63	A041	167
図 2-4-21	A018(2)	115	図 2-4-64	A042	169
図 2-4-22	A019	115	図 2-4-65	A043	171
図 2-4-23	A019(2)	116	図 2-4-66	A044	172
図 2-4-24	A020	117	図 2-4-67	B001	176
図 2-4-25	A020(2)	118	図 2-4-68	B002	177
図 2-4-26	A021	119	図 2-4-69	B003	178
図 2-4-27	A022	121	図 2-4-70	B004	179
図 2-4-28	A023	122	図 2-4-71	B005	180
図 2-4-29	D002	125	図 2-4-72	B022	181
図 2-4-30	D003・D004	126	図 2-4-73	B023	182
図 2-4-31	D005	127	図 2-4-74	D011・D012	184
図 2-4-32	D006	128	図 2-4-75	D011	185
図 2-4-33	D007	129	図 2-4-76	D012	186
図 2-4-34	D008・D009・D010	130	図 2-4-77	D013	188
図 2-4-35	奈良・平安時代第 2 群遺構配置図	131	図 2-4-78	D014	190
図 2-4-36	A024a	132	図 2-4-79	奈良・平安時代第 3 群遺構配置図	191
図 2-4-37	A024b	133	図 2-4-80	A045	192
図 2-4-38	A025	135	図 2-4-81	A046	194
図 2-4-39	A025(2)	136	図 2-4-82	A046(2)	195
図 2-4-40	A026	138	図 2-4-83	A047	196
図 2-4-41	A027	140	図 2-4-84	A047(2)	197
図 2-4-42	A028	141	図 2-4-85	A048	198
図 2-4-43	A028(2)	142	図 2-4-86	A048(2)	199
図 2-4-44	A029	143	図 2-4-87	A049	200
図 2-4-45	A029(2)	144	図 2-4-88	A049(2)	201
図 2-4-46	A030a	145	図 2-4-89	A050	203
図 2-4-47	A030a(2)	146	図 2-4-90	A050(2)	204
図 2-4-48	A030b	147	図 2-4-91	A051	206
図 2-4-49	A030b(2)	148	図 2-4-92	A052ab	207
図 2-4-50	A030c	148	図 2-4-93	A052ab(2)	208
図 2-4-51	A030遺物出土状況図	149	図 2-4-94	A052ab(3)	209
図 2-4-52	A031	152	図 2-4-95	A053	212
図 2-4-53	A032	153	図 2-4-96	A053(2)	213
図 2-4-54	A032(2)	154	図 2-4-97	A054	214
図 2-4-55	A033	156	図 2-4-98	A054(2)	215
図 2-4-56	A034	159	図 2-4-99	A055	216

図 2-4-100	A055(2)	217	図 2-4-143	A064(2)	270
図 2-4-101	A056	219	図 2-4-144	B026	273
図 2-4-102	A056(2)	220	図 2-4-145	B027	274
図 2-4-103	A056(3)	221	図 2-4-146	遺構外出土遺物	275
図 2-4-104	A057	224	図 2-4-147	遺構外出土遺物 墨書・刻書	277
図 2-4-105	A058	225	図 2-4-148	遺構外出土遺物 土製品・石製品	279
図 2-4-106	A058(2)	226	図 2-4-149	遺構外出土遺物 鉄製品	280
図 2-4-107	A058(3)	227	図 3-1-1	向境遺跡出土弥生土器	284
図 2-4-108	A038	230	図 3-1-2	花輪台式土器の分布図	285
図 2-4-109	A038(2)	231	図 3-1-3	向境遺跡出土 無文・捺痕土器	286
図 2-4-110	A038(3)	232	図 3-1-4	向境遺跡無文・捺痕土器分布図	287
図 2-4-111	B006	236	図 3-1-5	向境遺跡条痕土器	288
図 2-4-112	B007・B008全体図	236	図 3-1-6	向境遺跡の中期の幕開けを告げる土器	292
図 2-4-113	B007	237	図 3-2-1	向境遺跡周辺の弥生後期土器変遷図	297
図 2-4-114	B008	238	図 3-2-2	向境・江原台123号住・ 役山東・上谷出土遺物図	299
図 2-4-115	B010・B011全体図	238	図 3-3-1	古墳時代の遺構と遺物の変遷図	300
図 2-4-116	B009	239	図 3-3-2	古墳時代の遺構と遺物の変遷図(2)	301
図 2-4-117	B010	240	図 3-3-3	千葉県文化財センター「向境遺跡」	302
図 2-4-118	B011	241	図 3-4-1	第1群の住居跡と出土遺物	304
図 2-4-119	B012	242	図 3-4-2	奈良・平安時代竪穴住居跡主軸方位と 規模 第1群	304
図 2-4-120	B013	243	図 3-4-3	第2群の住居跡と出土遺物	305
図 2-4-121	B014	244	図 3-4-4	奈良・平安時代竪穴住居跡主軸方位と 規模 第2群	305
図 2-4-122	B015	245	図 3-4-5	土器変遷と集落展開	307
図 2-4-123	B015・B016全体図	245	図 3-4-6	奈良・平安時代掘立柱建物跡主軸方位と 規模 第2群	309
図 2-4-124	B016	246	図 3-4-7	第2群掘立柱建物跡	309
図 2-4-125	B017	247	図 3-4-8	第3群の住居跡と出土遺物	312
図 2-4-126	B018	247	図 3-4-9	奈良・平安時代竪穴住居跡主軸方位と 規模 第3群	312
図 2-4-127	B018(2)	248	図 3-4-10	第3群掘立柱建物跡と出土遺物	313
図 2-4-128	B019	249	図 3-4-11	奈良・平安時代掘立柱建物跡主軸方位と 規模 第3群	313
図 2-4-129	B020	250	図 3-4-12	第4群住居跡と出土遺物	314
図 2-4-130	B021	251	図 3-4-13	奈良・平安時代竪穴住居跡主軸方位と 規模 第4群	314
図 2-4-131	B024	252	図 3-4-14	第4群掘立柱建物跡	314
図 2-4-132	B025	253	図 3-4-15	奈良・平安時代掘立柱建物跡主軸方位と 規模 第4群	314
図 2-4-133	I010	256			
図 2-4-134	奈良・平安時代第4群遺構配置図	257			
図 2-4-135	A059	258			
図 2-4-136	A060	259			
図 2-4-137	A061	261			
図 2-4-138	A062	263			
図 2-4-139	A062(2)	264			
図 2-4-140	A063	266			
図 2-4-141	A063(2)	267			
図 2-4-142	A064	269			

表 目 次

表 1-1-1	向境遺跡調查一覽表	1	表 2-4-9	A017遺物觀察表	113
表 1-2-2	向境遺跡遺構番号新旧対照表	4	表 2-4-10	A018遺物觀察表	115
表 2-1-1	縄文時代炉穴一覽表	17	表 2-4-11	A019遺物觀察表	116
表 2-1-2	I001遺物觀察表	18	表 2-4-12	A020遺物觀察表	118
表 2-1-3	I002遺物觀察表	19	表 2-4-13	A021遺物觀察表	119
表 2-1-4	I003遺物觀察表	22	表 2-4-14	A022遺物觀察表	121
表 2-1-5	I004遺物觀察表	23	表 2-4-15	A023遺物觀察表	122
表 2-1-6	I005遺物觀察表	24	表 2-4-16	奈良・平安時代堅穴住居跡第1群一覽表	123
表 2-1-7	I006遺物觀察表	26	表 2-4-17	D005遺物觀察表	128
表 2-1-8	I007遺物觀察表	28	表 2-4-18	D006遺物觀察表	129
表 2-1-9	I008遺物觀察表	30	表 2-4-19	A024遺物觀察表	134
表 2-1-10	I009遺物觀察表	31	表 2-4-20	A025遺物觀察表	136
表 2-1-11	縄文時代遺構一覽表	32	表 2-4-21	A026遺物觀察表	139
表 2-1-12	包含層遺物觀察表(縄文前期)	51	表 2-4-22	A027遺物觀察表	141
表 2-1-13	包含層遺物觀察表(前期末~中期前半)	54	表 2-4-23	A028遺物觀察表	142
表 2-1-14	包含層遺物觀察表(中期~後期前半)	57	表 2-4-24	A029遺物觀察表	144
表 2-1-15	包含層遺物觀察表(後期前半)	59	表 2-4-25	A030遺物觀察表	149
表 2-1-16	包含層遺物觀察表 (後期中葉・後葉~晚期前半)	62	表 2-4-26	A031遺物觀察表	152
表 2-1-17	包含層遺物觀察表(石器)	65	表 2-4-27	A032遺物觀察表	155
表 2-2-1	A001遺物觀察表	67	表 2-4-28	A033遺物觀察表	157
表 2-2-2	弥生時代堅穴住居跡一覽表	68	表 2-4-29	A034遺物觀察表	160
表 2-2-3	弥生時代遺構外出土遺物觀察表	68	表 2-4-30	A035遺物觀察表	161
表 2-3-1	A002遺物觀察表	70	表 2-4-31	A036遺物觀察表	162
表 2-3-2	A003遺物觀察表	73	表 2-4-32	A037遺物觀察表	163
表 2-3-3	A004遺物觀察表	75	表 2-4-33	A039遺物觀察表	165
表 2-3-4	A005遺物觀察表	77	表 2-4-34	A040遺物觀察表	166
表 2-3-5	A006遺物觀察表	80	表 2-4-35	A041遺物觀察表	168
表 2-3-6	A007遺物觀察表	83	表 2-4-36	A042遺物觀察表	170
表 2-3-7	D001遺物觀察表	84	表 2-4-37	A043遺物觀察表	171
表 2-3-8	古墳時代遺構外出土遺物觀察表	84	表 2-4-38	A044遺物觀察表	172
表 2-3-9	古墳時代堅穴住居跡一覽表	85	表 2-4-39	奈良・平安時代堅穴住居跡第2群一覽表	173
表 2-3-10	古墳時代土坑一覽表	85	表 2-4-40	B001遺物觀察表	176
表 2-4-1	A008遺物觀察表	88	表 2-4-41	B002遺物觀察表	177
表 2-4-2	A009遺物觀察表	90	表 2-4-42	B023遺物觀察表	182
表 2-4-3	A010遺物觀察表	92	表 2-4-43	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覽表	183
表 2-4-4	A011遺物觀察表	94	表 2-4-44	D011遺物觀察表	185
表 2-4-5	A012遺物觀察表	99	表 2-4-45	D012遺物觀察表	187
表 2-4-6	A013遺物觀察表	103	表 2-4-46	D013遺物觀察表	189
表 2-4-7	A014遺物觀察表	107	表 2-4-47	D014遺物觀察表	190
表 2-4-8	A015遺物觀察表	110	表 2-4-48	A045遺物觀察表	193
			表 2-4-49	A046遺物觀察表	195

表 2-4-50	A047遺物觀察表	197
表 2-4-51	A048遺物觀察表	199
表 2-4-52	A049遺物觀察表	201
表 2-4-53	A050遺物觀察表	204
表 2-4-54	A051遺物觀察表	206
表 2-4-55	A052遺物觀察表	210
表 2-4-56	A053遺物觀察表	213
表 2-4-57	A054遺物觀察表	215
表 2-4-58	A055遺物觀察表	217
表 2-4-59	A056遺物觀察表	221
表 2-4-60	A057遺物觀察表	224
表 2-4-61	A058遺物觀察表	228
表 2-4-62	A038遺物觀察表	232
表 2-4-63	奈良・平安時代竪穴住居跡第 3 群一覽表	234
表 2-4-64	B009遺物觀察表	239
表 2-4-65	B010遺物觀察表	240
表 2-4-66	B011遺物觀察表	241
表 2-4-67	B013遺物觀察表	243
表 2-4-68	B014遺物觀察表	244
表 2-4-69	B017遺物觀察表	247
表 2-4-70	B018遺物觀察表	247
表 2-4-71	B024遺物觀察表	252
表 2-4-72	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覽表	254
表 2-4-73	I010遺物觀察表	256
表 2-4-74	A059遺物觀察表	258
表 2-4-75	A060遺物觀察表	260
表 2-4-76	A061遺物觀察表	261
表 2-4-77	A062遺物觀察表	264
表 2-4-78	A063遺物觀察表	267
表 2-4-79	A064遺物觀察表	270
表 2-4-80	奈良・平安時代竪穴住居跡第 4 群一覽表	272
表 2-4-81	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覽表	274
表 2-4-82	遺構外出土遺物觀察表	275
表 2-4-83	遺構外出土遺物觀察表(墨書・刻書)	277
表 2-4-84	遺構外出土遺物觀察表(土製品・石製品)	279
表 2-4-85	遺構外出土遺物觀察表(鉄製品)	280
表 2-4-86	土坑一覽表	281
表 3-4-1	奈良・平安時代遺構構成一覽表	303
表 3-4-2	奈良・平安時代第 2 群の遺構と出土遺物	306
表 3-4-3	三彩陶器等出土遺物	311
表 3-4-4	出土文字遺物一覽表	315

第1章 序 説

例言にも記したとおり、本書は『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書』のシリーズ3にあたる。従って事業全体に係わる「経緯と経過」、「調査組織」及び「立地と歴史的環境」等については、既刊の『千葉県八千代市(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業埋蔵文化財調査報告書1 栗谷遺跡-第1分冊-』(以下、「栗谷遺跡」と略)を参照されたい。ここでは、向境遺跡に係わる調査経過、立地、概要等について触れておきたい。

第1節 調査に至る経緯と経過

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業は、大成建設株式会社により八千代市保品・神野・米本にわたる地区に計画された大学と住宅地のセット開発事業である。本事業地内には、本書の向境遺跡をはじめ、栗谷遺跡、上谷遺跡等の多くの遺跡が所在し、その取り扱いについて昭和62年12月から大成建設株式会社、八千代市教育委員会、千葉県教育委員会の3者間での協議が進められた。協議の結果、事業地内の一部を除き現状保存は困難の判断に達し、記録保存を前提とした発掘調査を実施する事が決定した。これにより、八千代市教育委員会、千葉県教育委員会の指導を受け、八千代市遺跡調査会が大成建設株式会社の委託を受け、昭和63年3月から当該開発事業地区内の埋蔵文化財発掘調査に着手した。

向境遺跡の発掘調査も(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査の一環として、平成2年9月から確認調査が開始された。以後、開発事業計画の進捗と調整を計りながら断続的に確認調査及び本調査を実施していった。最終的に平成8年3月に、第3次本調査を終了し事業地区内の向境遺跡の発掘調査を終えた。調査期間、面積、地区等の詳細は表1-1-1及び図1-1-1～1-2-3のとおりである。

表 1-1-1 向境遺跡調査一覧表

	調査名	調査期間	調査面積	調査区域	担当調査(◎主任調査員)
1	第一次確認調査	平成2年9月26日～ 平成2年12月14日	2,477㎡/ 19,300㎡	—	◎藤 茂美
2	第一次本調査	平成4年10月22日～ 平成5年5月27日	7,200㎡	1地区・2地区	◎藤 茂美 宮澤 久史
3	第二次確認調査	平成6年8月9日～ 平成6年10月28日	1,304㎡/ 24,000㎡	—	◎藤 茂美 武藤 健一
4	第二次本調査	平成6年11月14日～ 平成7年12月5日	14,500㎡	3地区・4地区 5地区・6地区	◎藤 茂美 武藤 健一
5	第三次本調査	平成8年2月5日～ 平成8年3月31日	1,060㎡	7地区	◎武藤 健一 藤 茂美

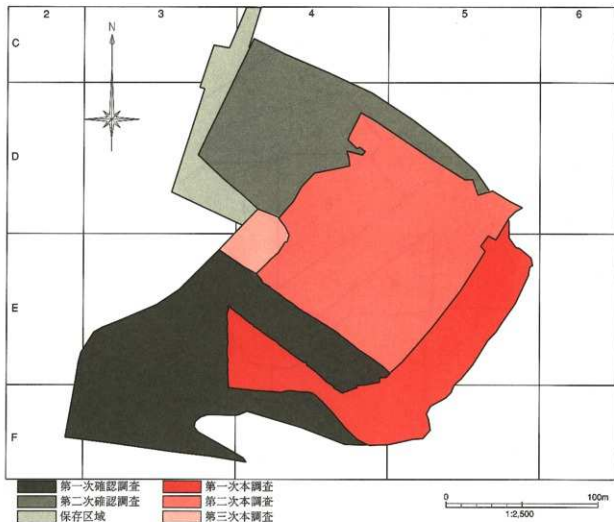


図 1-2-2 向境遺跡調査区域図

A 堅穴住居跡、B 堀立柱建物跡、C 方形周溝墓、D 土坑、E 溝、F 炉穴、I 遺構とする。

(但し向境遺跡では方形周溝墓は検出されなかった。)

表土除去及び遺構確認 確認調査においては、調査対象面積の10%を目安に表土除去を行い、包含層検出及び遺構検出に努めた。調査対象面積の1～2%程度を包含層検出を目的とした人力による表土除去を行い、その他の区域については、重機による表土除去作業を行った。表土除去後、それぞれに遺構、遺物確認作業を行った。本調査においては、確認調査によって得られた知見を基に、遺構及び遺物包含層が検出されなかった地区を、本調査対象地区から除外し、包含層が検出された地区においては、包含層検出面上面までを、それ以外の地区においては遺構検出面上面までをそれぞれ重機によって表土除去を実施し、その後、遺構、遺物確認作業を実施した。

遺構調査及び記録方法 検出された遺構については、土層観察用のベルトを残し(基本的には土坑については1本、堅穴住居跡については2本)覆土除去を行った。調査の進捗に合わせ適宜、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。撮影には確認調査時においては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用し、本調査においてはブローニー判モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを基本としながら35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用した。測量については通常の盛り方実測に加え、光波測距儀による測量、航空写真による測量を適宜用いて行った。

尚、野外調査時と整理時においては、遺構番号が変更される為、最後に遺構番号の新旧対照表を掲載し、本節を終わりにしたい。

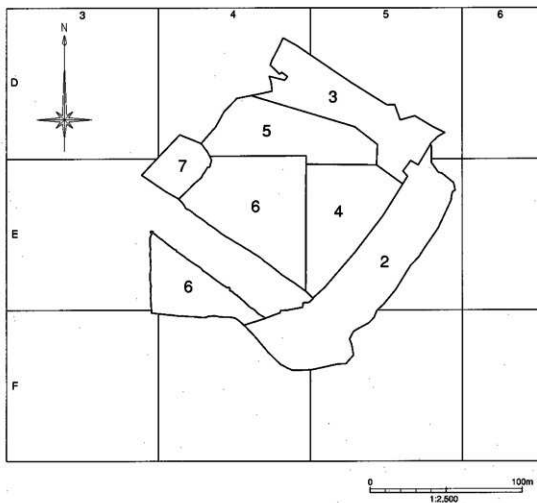


图 1-2-3 向境遺跡本調査地区剖面

表 1-2-2 向境遺跡遺構新旧番号対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
縄文時代				弥生時代		奈良・平安時代	
竪穴		遺構		竪穴住居跡		竪穴住居跡	
F001	2-020	I001	2-047	A001	2-042	A008	2-039
F002a・b	2-021	I002	2-046	古墳時代		A009	2-040
F003a・b	2-030	I003	2-050,54,56	竪穴住居跡		A010	2-016
F004	2-031	I004	4-018	A002	4-016	A011	2-013
F005	2-036	I005	E5-30G	A003	6-023	A012	2-017
F006	2-051		2-034	A004	6-014	A013	2-008
F007	2-055	I006	F5-12G	A005	4-015	A014	2-009
F008	2-055		2-035,48,49	A006	6-025	A015	2-011A
F009	2-058	I007	F4-91G	A007	7-001	A016	2-012
		I008	F4-81G,2-052	土坑		A017	2-014
		I009	2-037	D001	2-022	A018	2-015

第3節 遺跡と立地と歴史的環境



図1-3-1 向境遺跡位置図 (1/50,000) 明治15年迅速図

向境遺跡は千葉県東部の北西、八千代市神野字向境1155外に所在する。標高は約18m～24mで、旧水田面との比高は約10mである。地形的には下総台地の北西部に立地し印旛沼南岸に位置する。印旛沼周辺の台地は、印旛沼に注ぐ小河川と印旛沼の氾濫によって樹枝状に開析され、複雑な地形を形成している。印旛沼南岸に位置する八千代市の台地構造の一般的特徴として、南側は急斜面で、印旛沼に面する北側は緩斜面となり、しばしば段丘状の地形を形成する。このような印旛沼南岸の台地の縁辺部には、旧石器時代以来、多くの遺跡が形成されている。向境遺跡もそうした遺跡の一つで、八千代市域中央を流れる新川と佐倉市との市境を流れる小竹川に挟まれた段丘状の台地上に立地し、その上位段丘に所在している(註1)。台地南東方向と西方にそれぞれ比較的大きな谷津が入り込み、それらに区切られた台地向境遺跡は所在し、南東方向に入り込んだ谷津を南に望む形で台地縁辺から平坦部に展開している。また、遺跡の南北にそれぞれ小支谷が入り込み、更に遺跡を区切っている。

周辺遺跡を概観すると(註2)、遺跡の南東方向、谷津の対岸に縄文時代～奈良・平安時代の複合遺跡である栗谷遺跡、上谷遺跡が展開している。また、遺跡の西方の谷津を隔てた逆水地区に弥生時代を中心とした逆水遺跡が展開している。

開発事業範囲周辺では、事業範囲を超えた西側に、役山遺跡、平戸口遺跡、神野芝山遺跡が展開し、更には、縄文時代中期～後期にかけての汽水性の貝塚である神野貝塚が所在している。南側には、雷、雷南、下宿東遺跡等が展開し何れも縄文時代～奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。

向境遺跡と隣接する遺跡として南側の小支谷を隔て展開する役山東遺跡、北側の小支谷を隔て境堀遺跡が展開している。境堀遺跡の北方は一段低い下位段丘となり、奈良・平安時代の南台遺跡が所在する。向境遺跡から境堀遺跡にかけての一带には、中近世の神野群集塚が点在している。また、向境遺跡は、主たる時期が奈良・平安時代になり、奈良・平安時代に注目すれば、境堀遺跡と綿密な関係が遺構配置

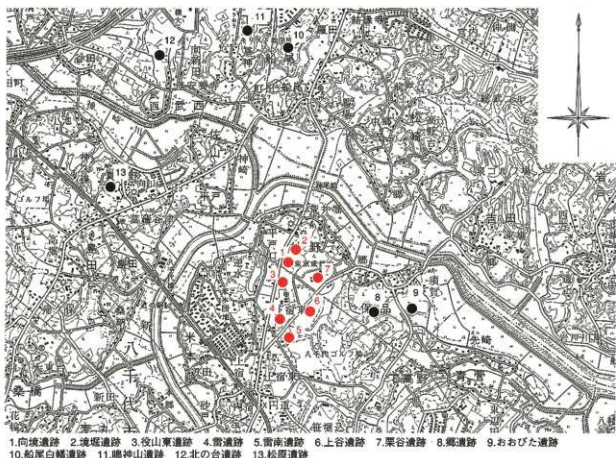


図1-3-2 向境遺跡位置図 (1/50,000)

から窺え本来同一の遺跡と考えることができる。

以上の様に、これらの遺跡は今回の開発事業範囲を超え、隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端部における遺跡群を形成し、時代も旧石器時代～中近世に及んでいる。向境遺跡はこうした遺跡群の中の1遺跡であり、奈良・平安時代を主たる時代とした縄文時代～中近世にわたる複合遺跡である。

向境遺跡の奈良・平安時代に次ぐ時代としては、縄文時代早期が挙げることができる。今回の調査においても早期の捻糸文土器群、それに相前後する無紋土器及び貝殻条痕文土器を比較的多く出土した。また、早期の炉穴も数基検出した。近隣の調査類型としては、印旛沼北岸にあたる印旛村の吉田馬々台遺跡が挙げられる。向境遺跡に見られる縄文時代早期と奈良・平安時代期及び弥生時代の複合のあり方は、周辺の遺跡に一般的に見られる傾向で、隣接する栗谷遺跡、上谷遺跡等でも顕著に見られる。本地域での遺跡立地と自然環境及び歴史的背景を考える上で示唆に富む。

さて、奈良・平安時代の遺跡に着目して更に視点を広げたい。奈良・平安時代の遺跡の分布を示した図1-3-2同時に参照されたい。八千代市内の遺跡では、向境遺跡の東方の保品地区に郷遺跡、おおびた遺跡等が所在し、西方には新川を超えた真木野地区に松原遺跡等が所在する。これらの遺跡もまた、奈良・平安時代の単独遺跡ではなく、縄文時代をはじめとするいくつかの時代に跨る複合遺跡である。また、印旛沼の北岸に位置することになるが、奈良・平安時代の遺跡として、北の台遺跡、鳴神山遺跡、船尾白幡遺跡等が展開している。向境遺跡を含め、これらの遺跡は、平安時代の『和妙類聚抄』に記載されている「下総國印旛郡」の群城に相当する地域で、何れも多量の墨書土器を出土している。向境遺跡を含め、これらの遺跡を一つ一つ解明し、関連づけてゆくことが本地域の奈良・平安期の在地社会の解明につながってゆくことであろう。

向境遺跡の近隣の近年の調査に目を向けると、谷津を隔てて対岸の栗谷遺跡・上谷遺跡の調査が挙げられる。栗谷遺跡は、弥生時代後期の集落として、92軒の堅穴住居跡が調査され、印旛沼南岸域で最大級の遺跡としても注目されるが、奈良・平安時代においても堅穴住居跡55軒及び堀立柱建物跡13棟が調査され、多くの墨書土器も出土している。また上谷遺跡においては、現在整理中ではあるが、栗谷遺跡を遙かに凌ぐ奈良・平安時代堅穴住居跡、堀立柱建物跡を検出し、多量の墨書土器が出土している。南側に展開する役山東遺跡においても調査されたのは遺跡の一部にすぎないが、奈良・平安時代の堅穴住居跡が調査され、集落の存在を示している。また、今回の調査範囲西側に位置する地点も千葉県文化財センターにより調査が行われ、古墳時代後期の堅穴住居跡その他を調査している。今回の調査範囲内で希薄であった古墳時代後期の堅穴住居跡が、僅かな調査面積にも係わらず検出されたことは、古墳時代後期の集落展開を考える上で注目される。

- 注(1) 八千代市全体として3つの段丘面に分かれ、標高25～30m、の下総上位面、標高20～25mの下総下位面、標高11～14mの千葉段丘面に分かれる。向境遺跡は下総下位面からそれに伴う緩斜面地に位置し、向境遺跡の北方の南台遺跡は千葉段丘面に位置する。詳細は、
八千代市教育委員会 【平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報】 1995 による。
- (2) 周辺遺跡については、以下の文献を参考にした。
- 八千代市教育委員会 【平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報】 1995
 八千代市教育委員会 【八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版】 1996
 八千代市教育委員会 【八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版】 1997
 八千代市教育委員会 【千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度】 1996
 八千代市教育委員会 【千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度】 1997
 八千代市教育委員会 【千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度】 2003
 八千代市教育委員会 【千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度】 2004
 八千代市遺跡調査会 【栗谷遺跡-第1分冊-】 2001
 八千代市遺跡調査会 【栗谷遺跡-第2分冊-】 2003
 八千代市遺跡調査会 【栗谷遺跡-第3分冊-】 2004
 印旛村教育委員会 【吉田馬々台遺跡】 1980
 財団法人千葉県文化財センター 【八千代市向境遺跡】 1998
 財団法人千葉県文化財センター 【千葉県北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書2-印西市鳴神山遺跡・白井谷遺跡】 1999
 房総考古資料刊行会 【千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書3】 1975

第4節 遺跡の概要

向境遺跡の立地及び歴史的環境は、前節までに述べたとおりであるが、今回の一連の調査で検出された遺構は次のとおりである。縄文時代については早期の炉穴11基、遺構9基。弥生時代については、後期の竪穴住居跡1軒。古墳時代については中期～後期を含めて竪穴住居跡6軒、土坑1基。奈良・平安時代については、竪穴住居跡62軒、堀立柱建物跡27棟、土坑14基である。また、縄文時代、特に早期を中心とした、遺物包含層1箇所を検出している。

遺跡の基本層序であるが、第1層が表土層、第2層が黒色土層、第3層が暗褐色土層、第4層がソフトローム漸移層、第5層がソフトローム層、第6層がハードローム層となる。遺構検出にあたっては、第4層下面あるいは第5層上面で行った。遺物包含層区域に関しては、第3層上面から掘削及び遺物検出作業を行った。

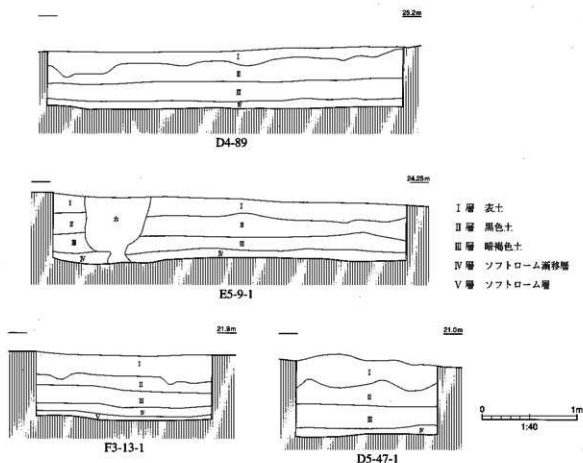


図1-4-1 向境遺跡基本土層図

第2章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

向境遺跡における縄文時代の概要は、早期の炉穴11基、遺構9基、早期を中心とした遺物包含層1箇所を検出している。遺構の中には、後期の埋没が2基検出されているが、住居跡があった可能性があるだろう。遺構の立地分布に関しては、台地の南側縁辺にその大部分が立地している。遺物包含層についても、これらの遺構配置に重なるように、台地南側縁辺の一角に広がっている。早期を中心とした包含層であるが、中でも捻糸文期末末期の花輪台の段階と早期後半の条痕文期（野島～縄ヶ島台期）の遺物が比較的まとまって出土した。

以下、個別の遺構についての報告に移る。計測値等の詳細については、適宜、一覧表等にまとめたので、併せて参照されたい。

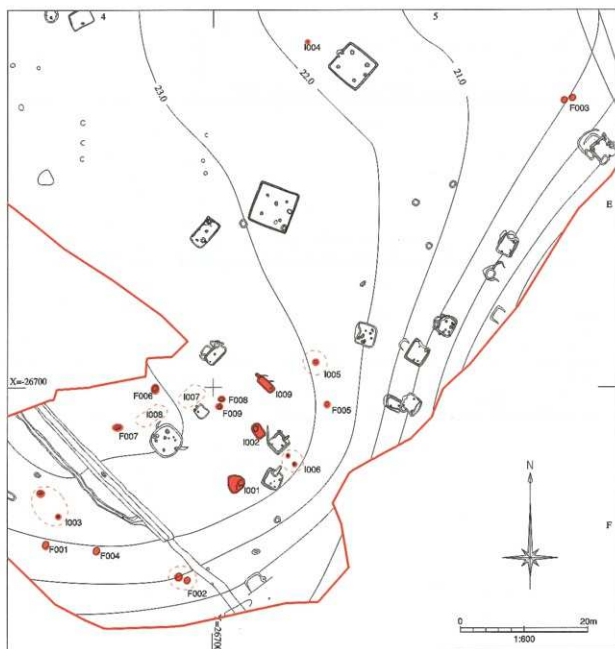


図 2-1-1 向境遺跡縄文時代遺構配置図

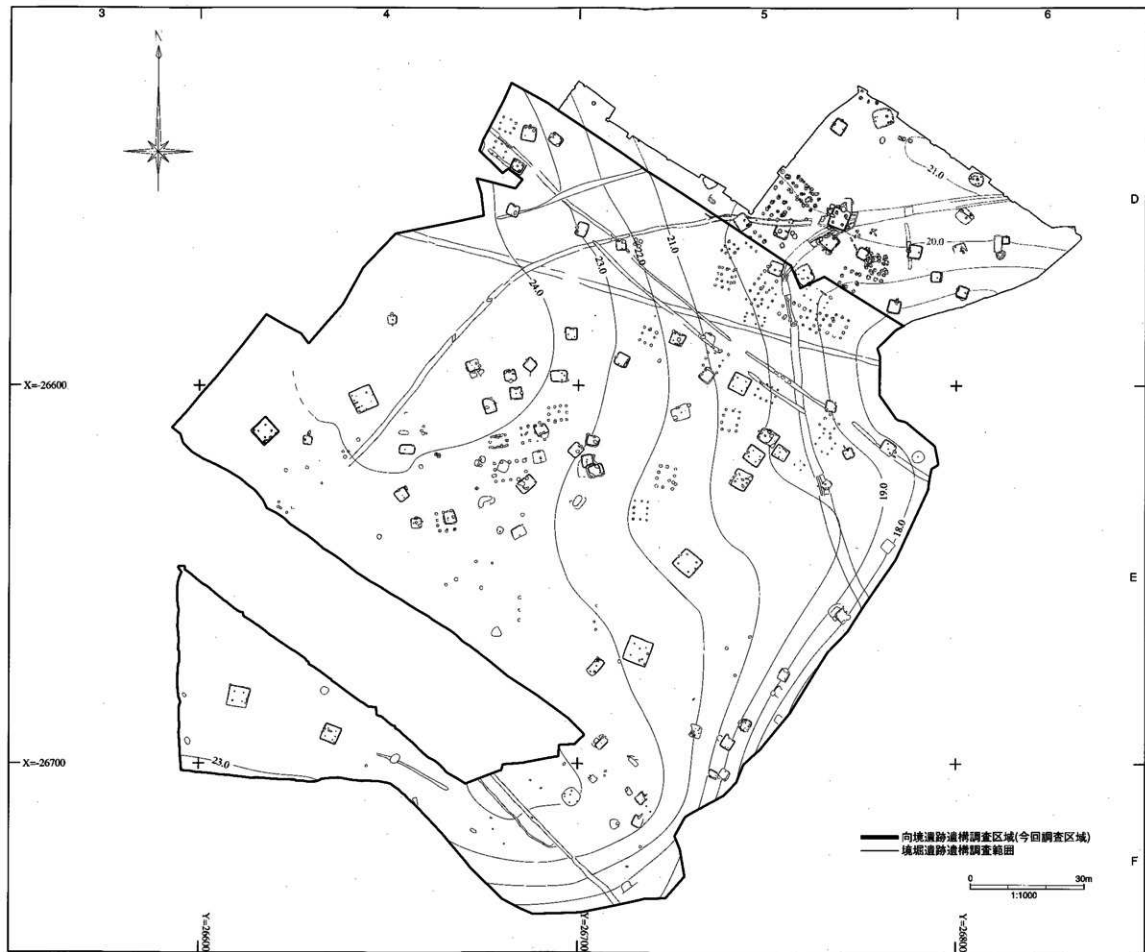


图 2-1-2 向坡道路调查配置图

(1) 炉穴

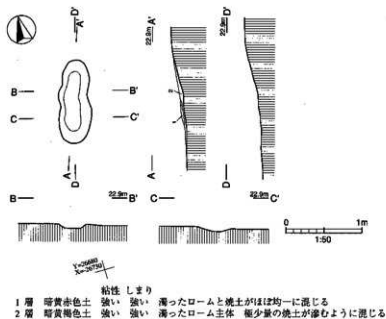


図2-1-3 F001

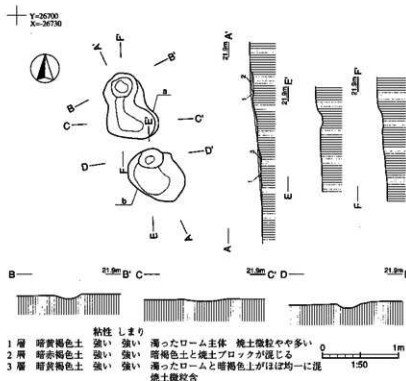


図2-1-4 F002

F001

検出地区 F4-73G。台地南側縁辺部、やや傾斜が始まっている地点に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F004・I003がある。

遺構 不整形円形の平面形で、浅く凹状の炉穴である。焼土は全体的にうっすらと滲むように検出され、火床は明瞭には検出されなかった。

覆土は色調を基本に2層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の観察等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。

F002

検出地区 F4-94G。台地南側縁辺部、やや傾斜が始まっている地点に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F004がある。

遺構 不整形の2基の炉穴で構成される。本来上層で重複関係を示していた1基の炉穴と思われる。2基とも焼土は全体的にうっすらと滲むように検出された。2基とも掘込みの浅い凹状の炉穴であるが、a 炉穴の方が若干しっかりと掘込みを持ち、明瞭な火床を有する。

覆土は色調を基本に3層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、形状、覆土の観察等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F003

検出地区 E5-66G。台地縁辺やや傾斜が始まっている地点に位置する。周辺の縄文時代遺構から離れ孤立している。

遺構 不整形の2基の炉穴で構成される。本来上層で重複関係を示していた1基の炉穴と思われる。

a 炉穴は、確認面で明瞭な焼土を検出し、比較的しっかりした掘込みを持ち、明瞭な火床を有する。

b 炉穴は、浅い凹状の断面形で焼土は全体的に僅かに滲むように検出された。明瞭な火床は検出されなかった。

また、a 炉穴とb 炉穴の間に僅かに滲むような焼土範囲を検出した。本炉穴群と何らかの関係があると思われる。

覆土は、色調を基本にa 炉穴は2層に、b 炉穴は1層に分層された。自然堆積と考えられるが、検出した土層は、埋没土と考えるよりも、使用時の焼土がそのまま残っていたと考えられる。

遺物 a 炉穴、b 炉穴ともに遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の観察から縄文時代早期の炉穴と判断した。

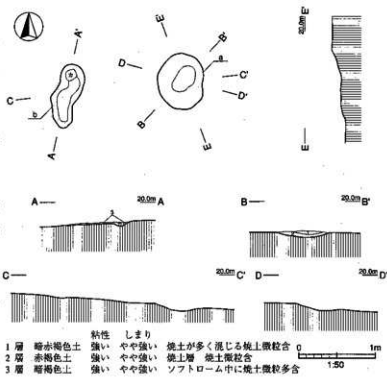


図2-1-5 F003

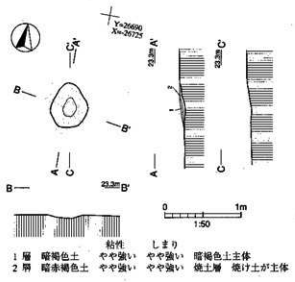


図2-1-6 F004

F004

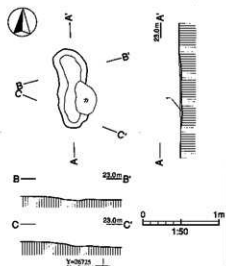
検出地区 F4-83G。台地南側縁辺部、やや傾斜が始まっている地点に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F001・1003がある。

遺構 不整形円形の平面形で、浅く凹状の炉穴である。確認面で良好な焼土が検出され、比較的に明瞭な火床も検出された。

覆土は色調を基本に2層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。検出した土層は、埋没土と考えるよりも、使用時の焼土がそのまま残っていたと考えられる。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の観察等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。



1層 暗黄色土 やや強い ややある
ソフトローム土中に焼土が少し滲むように混じる+

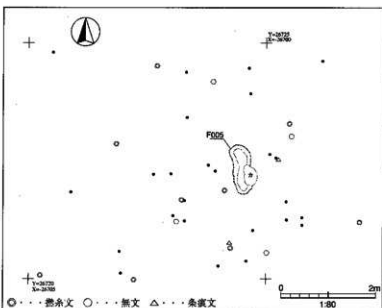
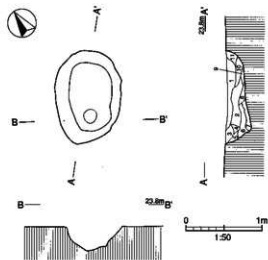


図 2-1-7 F005



層	土色	粘性	しまり	説明
1層	黒褐色土	普通	普通	黒褐色土主体 にふいロームブロック少
2層	暗褐色土	普通	普通	ローム較少 焼土較やや多
3層	暗褐色土	普通	普通	ローム較やや多
4層	暗黄褐色土	普通	普通	ロームブロック
5層	暗黄褐色土	普通	普通	ロームブロック主体
6層	明褐色土	普通	普通	にふいローム主体
7層	暗赤褐色土	普通	普通	焼土多
8層	褐色土	普通	普通	褐色土主体 焼土粒 焼土ブロック
9層	明褐色土	普通	普通	ローム
10層	明褐色土	普通	普通	ロームブロック多
11層	暗褐色土	普通	普通	にふいローム少 焼土粒極少

図 2-1-8 F006

遺構 不整楕円形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ炉穴である。底部は凹凸があり、壁は斜めに立ち上がっていく。底部南側によった地点で、極めて明瞭な火床を検出した。

覆土は色調を基本に11層に分層された。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、炉穴周囲が、遺構の形状、覆土の観察等から、早期、条痕文期の炉穴と判断した。

F005

検出地区 F5-21G。台地南側縁辺部、やや傾斜が始まっている地点に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、I005・I006がある。

遺構 不整楕円形の平面形で、浅く凹状の炉穴である。焼土は全体的にうっすらと滲むように検出され、火床はロームが僅かに赤化した状態のものが検出された。

覆土は色調を基本に1層に分層された。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、炉穴周囲が、縄文時代の遺物包含層区域と重なっており、早期熱糸文系土器を中心に、早期無紋土器、条痕文土器が比較的集中して出土している。以上の状況と遺構の形状、覆土の観察等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。

F006

検出地区 F4-91G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構としてI007・I008・F007がある。

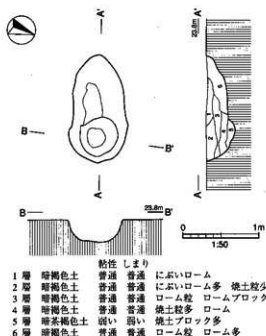


図 2-1-9 F007

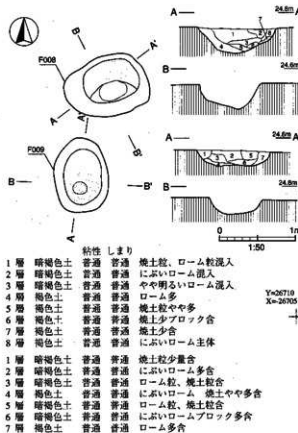


図 2-1-10 F008・F009

覆土は色調を基本に7層に分層された。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の観察等から、早期、条痕文期の炉穴と判断した。F008とは極めて近接しており、形状規模、覆土の堆積状況も近似しており、連続的に使用された炉穴群と考えられる。

F007

検出地区 F4-81G。台地南側縁部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F006・I007・I008がある。

遺構 不整楕円形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ炉穴である。底部は凹凸があり、底部東側によった地点で、さらに一段窪んでいる。壁は斜めに立ち上がっていく。一段窪んだ地点で極めて明瞭な火床を検出した。

覆土は色調を基本に6層に分層された。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが遺構の形状、覆土の観察等から早期、条痕文期の炉穴と判断した。

F008

検出地区 F5-1G。台地南側縁部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F009・I007がある。

遺構 不整円形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ炉穴である。底部は、ほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がっていく。底部付近で比較的、明瞭な火床を検出した。

覆土は色調を基本に8層に分層された。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の観察等から、早期、条痕文期の炉穴と判断した。

F009

検出地区 F5-1G。台地南側縁部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F008・I007がある。

遺構 不整楕円形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ炉穴である。底部は、ほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がっていく。底部南側で明瞭な火床を検出した。

表 2-1-1 縄文時代炉穴一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考
F001	F4-73G	不整形円形 1.1×0.4×0.05 N-16°-E	色調を基本に2層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴	出土遺物なし	
F002a	F4-94G	不整形 0.94×0.4×0.04 N-29°-W	色調を基本に2層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴	出土遺物なし	
F002b	F4-94G	不整形 0.77×0.62×0.05 N-55°-W	色調を基本に2層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴	出土遺物なし	
F003a	E5-66G	不整形円形 0.74×0.60×0.09 N-11°-W	色調を基本に2層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		比較的しっかりとした掘りこみを持ち 明瞭な火床をもつ	出土遺物なし	
F003b	E5-66G	不整形 0.84×0.3×0.02 N-10°-E	色調を基本に1層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴	出土遺物なし	
F004	F4-83G	不整形 0.6×0.5×0.06 N-11°-W	色調を基本に2層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴 比較的明瞭な火床を検出	出土遺物なし	
F005	F5-21G	不整形円形 1.04×0.36×0.02 N-2°-W	色調を基本に1層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		浅い凹状の炉穴 僅かな赤化した炉穴を検出	出土遺物なし	
F006	F4-91G	不整形円形 1.2×0.86×0.34 N-35°-E	色調を基本に1層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
		しっかりとした掘りこみを持ち 明瞭な火床を検出	出土遺物なし	
F007	F4-81G	不整形円形 1.44×0.74×0.4 N-110°-W	色調を基本に6層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
		しっかりとした掘りこみを持ち 明瞭な火床を検出	出土遺物なし	
F008	F5-1G	不整形円形 1.06×0.8×0.34 N-71°-E	色調を基本に8層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
		しっかりとした掘りこみを持ち 明瞭な火床を検出	出土遺物なし	
F009	F5-1G	不整形円形 0.96×0.7×0.2 N-40°-W	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
		しっかりとした掘りこみを持ち 明瞭な火床を検出	出土遺物なし	

(2) 遺構

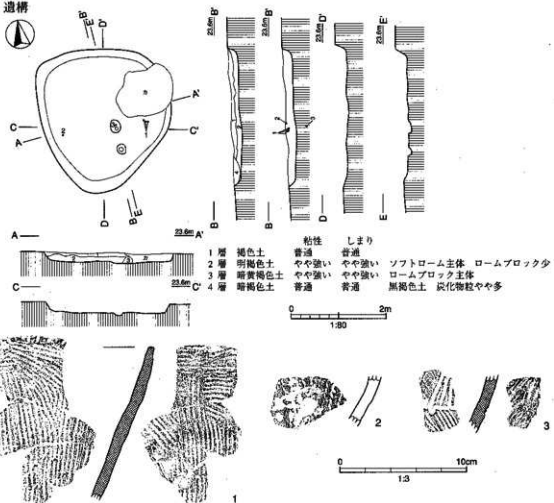


図 2-1-11 I001

表 2-1-2 I001遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口唇一割み 口縁一斜位 斜位の条痕文 内面は横位 縦位の条痕文		暗褐色 青	繊維	口縁片	
2	縄文 深鉢	熱糸文 器面の剥離著しく詳細不明		暗褐色 青	砂粒多	胴部片	花輪台か?
3	縄文 深鉢	胴部一沈線による幾何学文様区画接点に円形刺突 区画下は斜位の条痕文 内面一一条痕文		暗褐色 茶褐色 青	繊維	胴部片	

I001

検出地区 F5-2G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、I002・I006がある。

遺構 不整形の平面形で、比較的しっかりとした掘込みを持つ遺構である。底部は、ほぼ平坦で、ソフトロームの軟弱な底部であった。底部に小穴2基を検出しているが、覆土の観察等からは、本遺構に伴うものか疑義が残る。壁は斜めに立ち上がっていく。

覆土は色調を基本に4層に分層された。最下層の4層では炭化物粒が検出され、人為的な埋戻しが想定される。

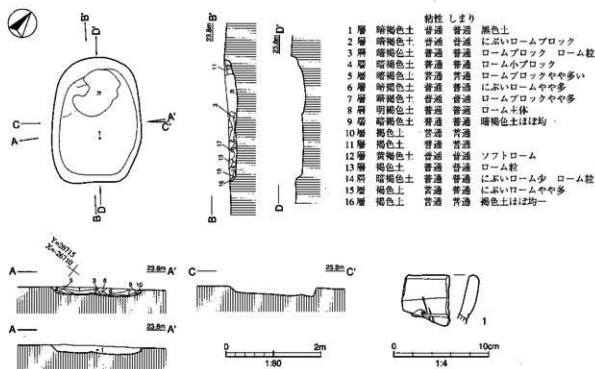


図 2-1-12 I002

表 2-1-3 I002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 口縁下に一条条痕 内面 ミガキ	良 ①茶褐色 ②橙褐色	細砂粒 長石類 スコリア	口縁片	称名寺式

遺物 底部直上から覆土上層にかけて、縄文時代早期の小破片を中心に少量(19点)出土している。
所見 時期決定できる底部直上の遺物が無いため詳細は不明であるが、全体の遺物出土状況、また、遺構周囲の遺物出土状況等から早期後半、条痕文期の遺構と判断した。

I002

検出地区 F5-2G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F008・F009・I001・I006がある。

遺構 不整形円形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ遺構である。底部は、ロームのはほぼ平坦で、遺構東壁付近が堅くなっていた。それ以外の部分は軟弱な底部であった。一部攪乱により破壊されていた。壁は斜めに立ち上がっていく。

覆土は色調を基本に16層に分層された。土層の観察等からは2基の遺構の重複とも考えられる。底部直上に一部極僅かな焼土範囲も検出している。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 底部直上から覆土上層にかけて縄文土器の小破片を中心に少量(8点)出土している。

所見 出土遺物から、縄文時代中期後半から後期初頭の遺構と判断したが、用途等詳細については不明である。

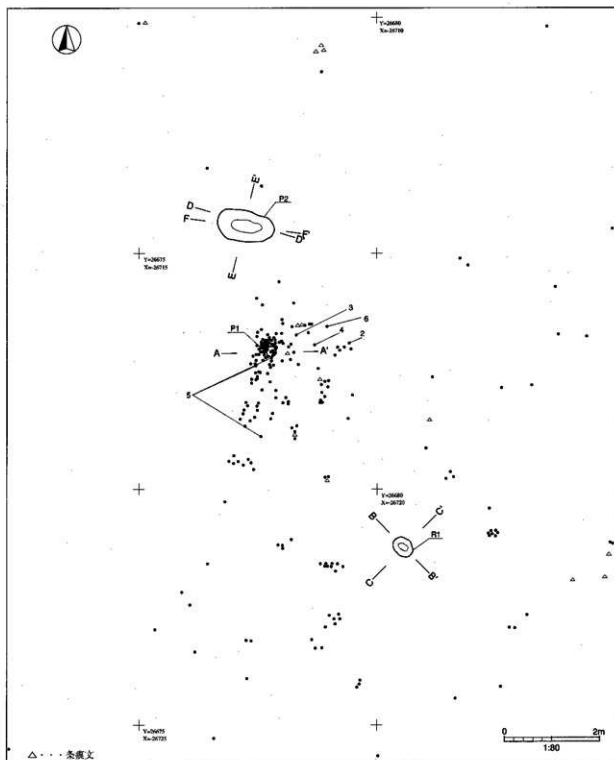
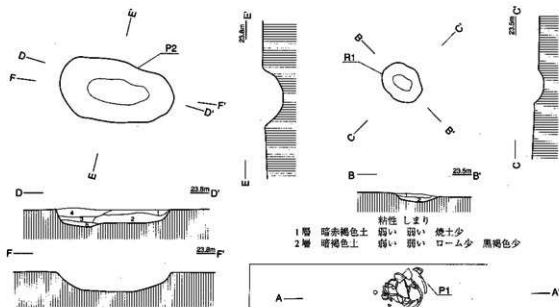


図 2-1-13 I003

I003

検出地区 F4-72G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F001・F004がある。
 遺 構 調査時においては遺構は3基の遺構、遺物については包含層調査で扱っていたが、整理時
 それらを統合し1遺構として取り扱う。

P1は、縄文時代後期の深鉢が直立してロームに突き刺さる様な状態で出土し、平面形、断面形とも
 に出土土器とほぼ同一である。また、周辺からも同時期の深鉢形土器片が多量に出土している。遺物の
 出土状況から埋甕と考えらる。



1層	暗褐色土	粘性しまり	普通	普通	にぶいローム	黒褐色土多
2層	褐色土	普通	普通	普通	にぶいローム主体	
3層	褐色土	普通	普通	普通	褐色土	ロームブロック
4層	褐色土	普通	普通	普通	焼土粒多	ローム多
5層	褐色土	普通	普通	普通	ローム粒	焼土粒多

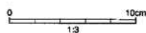
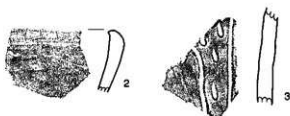
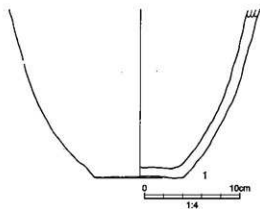
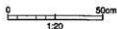
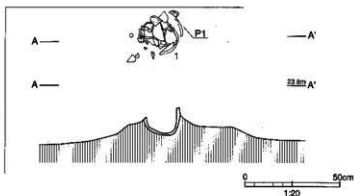
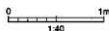


図 2-1-14 I003(2)

表 2-1-4 I003遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	一×90×(180) 平底 輪積み 外面 胴下半〜ケズリ 下縁一磨消? 内面 胴下半〜ナゲ	橙褐色 良		胴一 底部片	
2	縄文 深鉢	外面 ミガキ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア	口縁片	
3	縄文 深鉢	外面 沈線による意匠を描き列点を完填 波状口縁 内面 ミガキ	橙褐色 良		胴部片	6と同じ 同一個体?
4	縄文 深鉢	外面 沈線 による意匠を描き列点を完填 区画外ミガキ 内面 指の腹によるナゲ後ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石	胴部片	
5	縄文 深鉢	外面 沈線による意匠を描き列点を完填 波状口縁 内面 ミガキ	茶褐色 橙褐色	細砂粒 長石類 スコリア	口縁片	
6	縄文 深鉢	外面 沈線による意匠を描き列点を完填 波状口縁 内面 ミガキ	暗褐色 橙褐色 良	細砂粒 長石類 スコリア	胴部片	3と同じ 同一個体か?
7	縄文 深鉢	外面 沈線による意匠 区画外ミガキ 内面 ミガキ	茶褐色 青	砂粒 長石類		

R 1は、不整形の平面形で、浅い凹状の土坑で、火床は僅かに検出した。遺物は出土していない。覆土は色調を2層に分層され、自然堆積と考えられる。その形態、規模から、竪穴住居跡の地床炉と判断した。

P 2は、楕円形の比較的しっかりとした掘込みを持つ土坑である。底部はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。覆土は色調を5層に分層され、人為的堆積と考えられる。用途は不明である。

遺物 各土坑からは、P 1以外からは出土していない。包含層調査において取り上げられた遺物を分類し重ね合わせたものが図2-1-13になるが、早期条痕文期の遺物が数点出土しているが、その他は、P 1周辺を中心に、後期の遺物が圧倒的に多く出土した。

所見 P 2の評価に問題を残すもののP 1とR 1との位置関係、それぞれの形態、規模及び周囲の遺物出土状況を合わせ考慮するならば、後期称名時期の竪穴住居跡住居跡が存在していた可能性が高い。

I004

検出地区 E5-25G。台地南側縁辺の緩斜面部に位置する。周辺の縄文時代の遺構から離れ孤立して立地する。

遺構 不整形の平面形で、しっかりとした掘込みを持つ。縄文時代後期の深鉢が直立してロームに突き刺さる様な状態で出土し、平面形、断面形ともに出土土器とはほぼ同一である。

遺物 遺構検出グリッド出土土器の中から、接合する遺物数点が出土している。

所見 周囲での出土遺物、炉を想定させる遺構等の検出が無いために、俄に住居跡との判断はできないが、遺物の出土状況から後期、加曾利B 3期の煙臺と判断した。

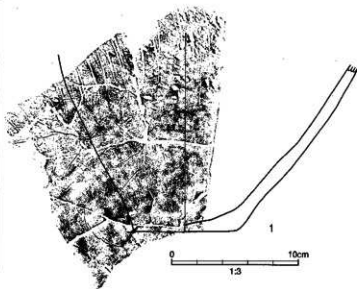
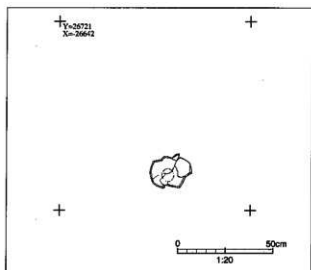


図 2-1-15 I004

表 2-1-5 I004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	一×84×(145) 平底 外面 胴下半部 LR単節縄文 施文後磨消 内面 胴下半部 ナア	橙褐色 良	砂粒	胴～ 底部片 1/3	内外面 スス付着

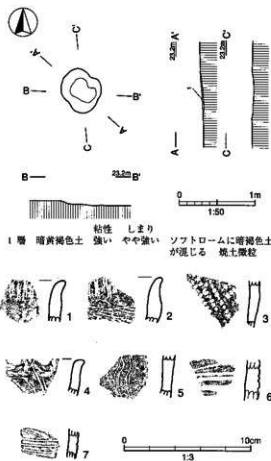
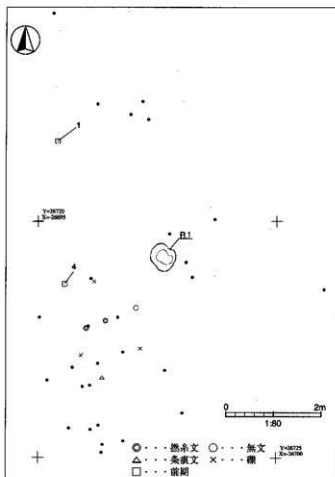


図 2-1-16 I005

表 2-1-6 I005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 口縁部に縦方向の密な条線 内面 ミガキ	砂椀褐 ◎淡褐 良	砂粒 長石類 スコリア 粒	口縁片	興津式
2	縄文 深鉢	外面 口縁部に縦方向の密な条線 それ以下は細沈線による集合沈線 内面 粗いミガキ	椀褐 普	砂粒 長石類 スコリア	口縁片	興津式
3	縄文 深鉢	外面 2段RLの波状縄文 内面 ケズリ後ミガキ	椀褐 良	砂粒 長石類 スコリア	胴部片	花輪台式
4	縄文 深鉢	外面 口唇を指頭などにより、ひだ状にし、単沈線による施文 内面 ケズリ後ナデ	砂椀褐 ◎淡褐 良	細砂粒 長石類 スコリア	口縁片	浮島式
5	縄文 深鉢	外面 胴に蛇行状の条線文を施文 内面 ミガキ	◎暗褐 ◎茶褐 良	細砂粒 長石類 スコリア	胴部片	林名寺式
6	縄文 深鉢	外面 乾磨がある程度進んだ段階で横位の沈線 内面 器面剝離のため、不明	暗褐 良	砂粒 長石類 スコリア	胴部片	田口下層式
7	縄文 深鉢	外面 縦く深めの細沈線 内面 ミガキ?	茶褐 良	細砂粒 長石 スコリア	胴部片	田口下層式

I005

検出地区 E5-30G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F005がある。

遺構 調査時においては遺構は1基の遺構、遺物については包含層調査で扱っていたが、整理時それらを統合し1遺構として取り扱う。

R1は、不整形のプランで浅い凹状の断面形で、明瞭な火床を検出している。覆土は色調を基本に1層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 R1からは遺物は出土していない。包含層調査において取り上げられた遺物を分類し重ね合わせたものが図2-1-16になるが、早期の出土遺物は多いとは言えず、多時期にわたる遺物が出土している。強い傾向を挙げるのならば、前期、後期の遺物が若干多い。図示した遺物の内、1・4以外はグリッド一括遺物である。

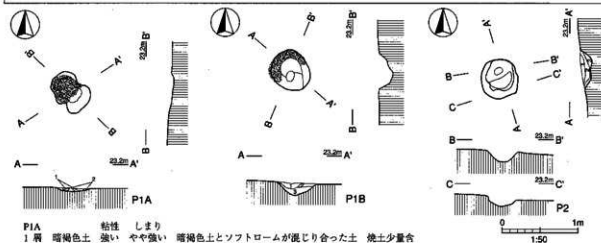
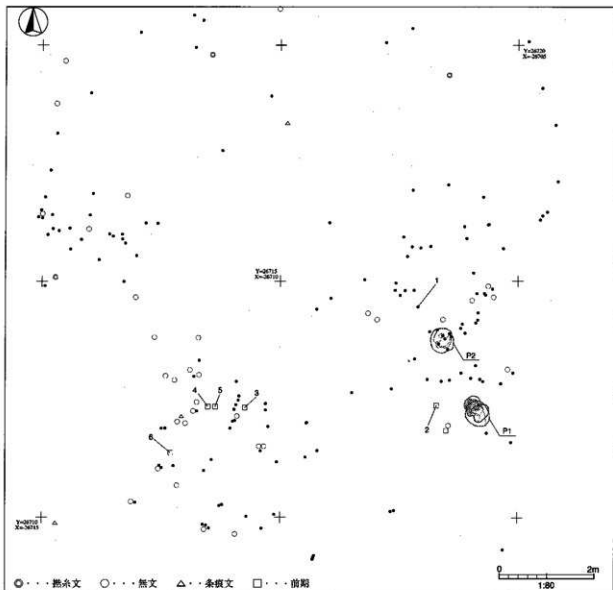
所見 R1の形態、規模、覆土の観察等から早期の炉穴とは判断しづらく、周囲での遺物出土状況と考え合わせ、前期或いは後期の住居跡の炉跡及び出土遺物と判断した。

I006

検出地区 F5-12G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、I001・I002がある。

遺構 調査時においては遺構は2基の遺構、遺物については包含層調査で扱っていたが、整理時それらを統合し1遺構として取り扱う。

P1は、2基が重複しており、上層をP1A、下層をP1Bとする。ともに不整形の浅い凹状の断面形の土坑である。ともに覆土に焼土を含み、明瞭な火床を検出している。覆土は色調を基本にP1Aが2層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。P1Bは色調を基本に3層に分層され、同じく自然堆積による埋没が想定される。同地点で繰り返し火を使用した結果と思われる。



- P1A** 粘性 しまり
 1層 暗褐色土 強い やや強い 暗褐色土とソフトロームが混じり合った土 焼土少量含
 2層 赤褐色土 強い やや強い 焼土層 焼土ブロック多含
- P1B** 粘性 しまり
 1層 暗褐色土 弱い 普通 暗褐色土主体 焼土少
 2層 暗褐色土 弱い 普通 暗褐色土主体 焼土極少
 3層 赤暗褐色土 弱い 普通 暗褐色土主体 焼土多
- P2** 粘性 しまり
 1層 暗赤褐色土 弱い 弱い 暗褐色土主体 多量の焼土が混むように混じる
 2層 暗黄褐色土 弱い 弱い 暗褐色土主体 多量のロームが混じる
 3層 暗褐色土 弱い 弱い 暗褐色土主体 少量のロームと少量の黒色土が混じる

図 2-1-17 1006

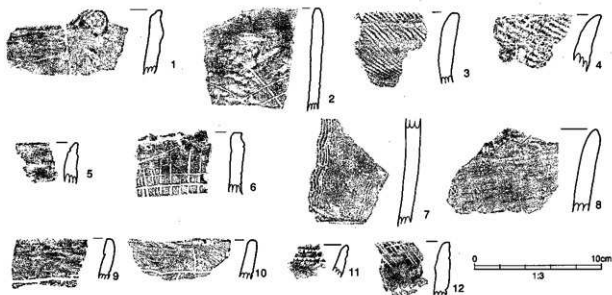


図 2-1-18 I006(2)

表 2-1-7 I006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	波状口縁 外面 波頂部にボタン形化した「C字状」貼付をする 部分的にミガキ 内面 ミガキ	橙褐色 良	細砂 長石類 スコリア 細粒	口縁片	称名寺式
2	縄文	口縁平縁 外面 1段L(摺りが粗い)を軸に転した後、浅い沈線を格子状に引く 内面 ヨコ方向中心のケズリ	①暗褐色 ②淡褐色	砂粒 長石類 赤色スコ リア細粒	口縁片	前期後半～末に伴う縄文系の粗 襲土器か
3	縄文 深鉢	口縁平縁 外面 口唇上及び器外面に2段RLを施文 内面 ヨコ方向にミガキ	①暗褐色 ②茶褐色 良	砂粒 長石類 細粒	口縁片	前期末か
4	縄文 深鉢	複合口縁 平縁 外面 口縁一原体側面圧痕 胴部一回転施文 内面 ミガキあり	①暗褐色 ②茶褐色 良	細砂 長石類	口縁片	前期末葉に伴う 縄文系粗製土器
5	縄文 深鉢	口縁平縁 外面 口唇直下より2段LRを施文 内面 風化著しい	赤褐色 普通	繊維 砂 長石類 スコリア 細粒	口縁片	黒浜式
6	縄文 深鉢	口縁ひだ状 外面 タテ→ヨコの順で縦な格子目を施文(単沈線文) 内面 軽くミガキ	灰褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	浮島式
7	縄文 深鉢	口縁平縁か 外面 口唇下に1条の線を引き、口縁部無文帯を形成する。胴部は柳葉 状工具による条線を蛇行施文する 内面 ミガキ	①淡褐色 ②褐色 良	細砂 長石類 スコリア 細粒	胴部片	称名寺式に伴う 状縄文系粗製土 器
8	縄文 深鉢	波状口縁 外面 口縁部に広い無文帯を形成する 下の構成は不明 内面 ミガキ	橙褐色 良	細砂 長石類 赤色スコ リア細粒	口縁片	称名寺式
9	縄文 深鉢	口縁平縁 外面 口唇下に1条の線を引き無文帯を形成する 内面 軽くミガキ 輪積み痕顯著	橙褐色 良	細砂 長石類 スコリア 細粒	口縁片	称名寺式
10	縄文 深鉢	波状口縁 外面 口縁下に1条の線を引き無文帯を形成する 胴部文様は格子状 内面 やや丁寧なミガキ	①茶褐色 ②橙褐色 良	細砂 長石類 スコリア 細粒	口縁片	称名寺式

11	縄文 深鉢	口縁 平縁 円筒状、乃至はコップ状の小型土器 外面 口縁下に複列の内押文を施文する 内面 ミガキ	砂 燧燭 燧 良	細砂 長石類 スコリア 細粒	口縁片	称名寺式
12	縄文 深鉢	口縁 平縁 口唇ゆるいひだ状 外面 口縁は条線 頸部以下は三角文 内面 ミガキか 器面荒れている	砂 茶褐 燧燭 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	浮島式

P 2は、不整形のプランで比較的しっかりとした掘込みをもつ。底部はほぼ平坦で、1段テラスを持ち斜めに立ち上がる。覆土に多量の焼土を含み、明瞭な火床を検出している。覆土は3層に分層され、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 各遺構からは遺物は出土していない。包含層調査において取り上げられた遺物を分類し重ね合わせたものが図2-1-17になるが、遺物集中地点が3箇所存在する事が判る。P 1・P 2が立地する地点では、早期条痕文期の出土遺物は多いとは言えず、強い傾向を挙げるのならば、中期、後期の遺物が若干多い。

所見 P 2については、炉穴の可能性もあるが、P 2についてはの形態、規模、覆土の観察等から早期の炉穴とは判断しづらく、周囲での遺物出土状況と考え合わせ、中期或いは後期の住居跡が複数重複し、それらの炉跡及び出土遺物と判断した。

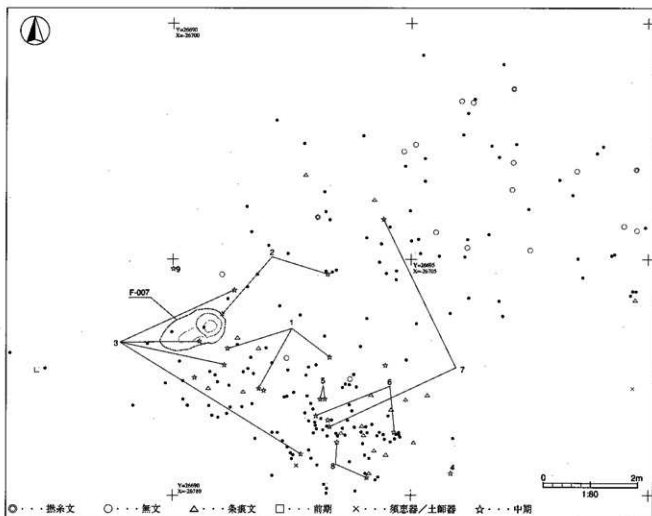


図 2-1-19 I007

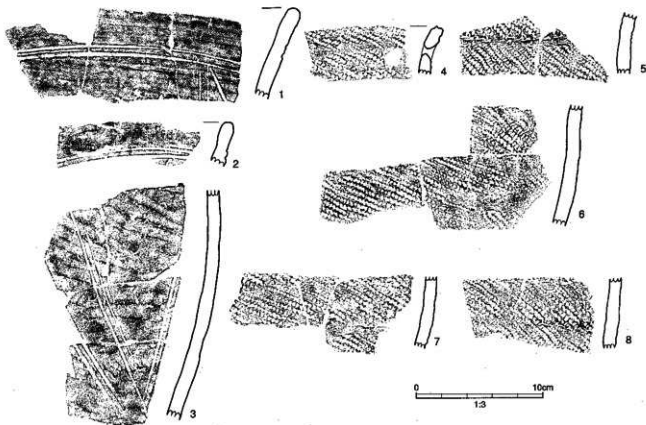


図 2-1-20 I007(2)

表 2-1-8 I007遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 竹管の内側を用い、2本1組の平行線を描線 口縁-ナア 頸部-ケズリ 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色 良	細砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	堀之内式
2	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 竹管の内側を用い、2本1組の平行線を描線 口縁-ナア 頸部-ケズリ 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色 良	細砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	1と同一個体
3	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 竹管の内側を用い、2本1組の平行線を描線 口縁-ナア 頸部-ケズリ 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色 良	細砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	1と同一個体
4	縄文 深鉢	外面 口唇上から2段RLを施文。外面からを主に断面「つづみ形」の 補修孔を穿つ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	補修孔あり
5	縄文 深鉢	外面 口唇上から2段RLを施文。外面からを主に断面「つづみ形」の 補修孔を穿つ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	4と同一個体
6	縄文 深鉢	外面 口唇上から2段RLを施文。外面からを主に断面「つづみ形」の 補修孔を穿つ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	4と同一個体
7	縄文 深鉢	外面 口唇上から2段RLを施文。外面からを主に断面「つづみ形」の 補修孔を穿つ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	4と同一個体
8	縄文 深鉢	外面 口唇上から2段RLを施文。外面からを主に断面「つづみ形」の 補修孔を穿つ 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂 長石類 赤色スコ リア凝粒	口縁片	4と同一個体

I007

検出地区 F4-91G。台地南側縁辺部に位置する。周辺の縄文時代の遺構として、F008・F009がある。

遺構 調査時には包含層遺物として扱っていたが、早期以外の遺物が比較的多く集中していた為、整理時において遺物集中区として遺構として取り扱う。

遺物 包含層調査において取り上げられた遺物を分類し重ね合わせたものが図2-1-19になる。早期の遺物が分布する中、前期末～後期にかけての遺物が多く出土していた。

所見 炉穴(F007)とともに条痕文土器を始めとする早期の遺物が出土する中、多時期にわたる遺物が多く出土する事から前期末～後期にかけての遺構が存在していた可能性がある。

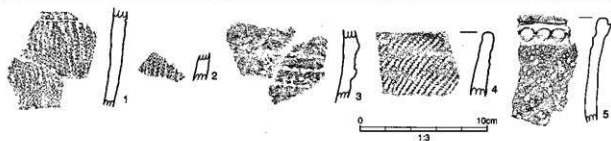
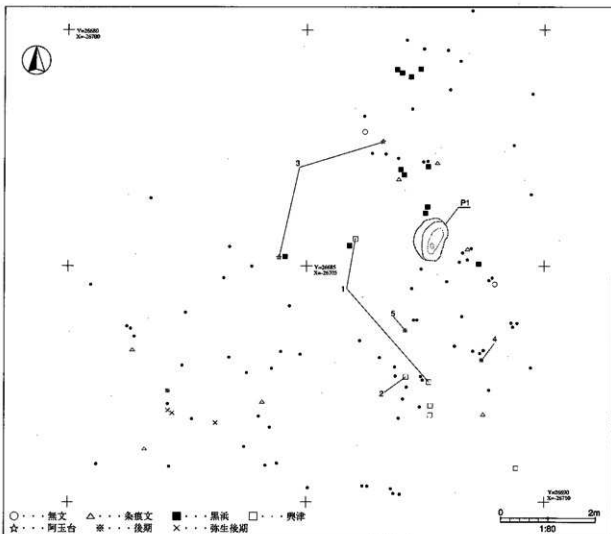


図 2-1-21 I008

表 2-1-9 I008遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 アナダラ属の貝殻の復縁を垂直に近い角度で押圧しながらロッキング気味に施文し、その後1条の沈線を引く。 内面 ミガキか?	微褐色 良	細砂粒 長石類 スコリア	胴部片	興津式
2	縄文 深鉢	外面 アナダラ属の貝殻の復縁を垂直に近い角度で押圧しながらロッキング気味に施文し、その後1条の沈線を引く。 内面 ミガキか?	微褐色 良	細砂粒 長石類 スコリア	胴部片	興津式
3	縄文 深鉢	外面 陸帯を貼付し区画状文を書く。陸帯に沿って単列しながら複列の描押文を施文。 内面 ミガキ	砂椀褐 砂淡褐 弁	雲母	胴部片	阿玉台式
4	縄文 深鉢	外面 口縁直上から2段LRを施文 内面 ケズリ後ミガキ	淡褐色 良	細砂粒 長石類 スコリア	口縁片	阿玉台式
5	縄文 深鉢	外面 2段施文後粘帯貼付。その後 内面 沈線を2条引く	微褐色 良	細砂粒 長石類 スコリア	口縁片	加曾利B式

I008

検出地区 F4-81G。台地南側縁辺部に位置する。周辺縄文時代の遺構として、F006・F007がある。
遺 構 I007同様、調査時においては包含層遺物として扱っていたが、早期以外の遺物が比較的多く集中していた為、整理時において遺物集中区として1遺構として取り扱う。包含層調査において取り上げられた遺物を分類し周辺の遺構と重ね合わせたものが図2-1-21になる。

P1は不整形の土坑で、船底型の断面形で、比較的しっかりとした堀込みを持つ。覆土は2層に分層され、人為的堆積を示し、坑底は僅かに赤化していた。遺物は出土しなかった。

遺 物 早期の遺物が少なく、前期の遺物が多く出土していた。

所 見 前期の遺物が多く分布する事から、前期の遺構が存在していた可能性がある。

I009

検出地区 E5-20G。台地南側縁辺部に位置する。周辺縄文時代の遺構として、I002・F008・F009等がある。

遺 構 隅丸長方形の平面形で、比較的しっかりとした掘込みを持つ遺構である。底部は、ほぼ平坦で、ソフトロームの軟弱な底部で、一部で硬化面を検出した。底部に小穴3基を検出しているが、どれも浅い凹状のビットであった。壁もロームの壁で一部を除き、ほぼ垂直に立ち上がっていく。

覆土は色調を基本に9層に分層され、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 底部直上から覆土上層にかけて、縄文時代早期の小破片を中心に少量(15点)出土している。また、図中の番号は野外調査時のドット番号をそのまま採用し、I2に付いては、近隣のF5-11Gから出土した遺物と接合した資料である。

所 見 用途までは特定できないが、出土遺物から早期燃糸文期末の遺構に位置づけることができるかと思われる。また、早期燃糸文系土器と同じく早期無文・擦痕系土器が共存している状況は注目される。

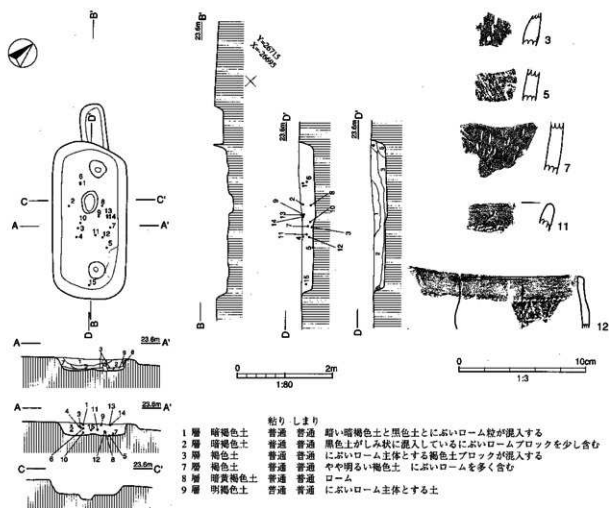


図 2-1-22 I009

表 2-1-10 I009遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
3	縄文 深鉢	R熱糸施文	①橙褐 ②暗褐 良	赤色 スコリア	胴部片	花輪台式
5	縄文 深鉢	従位のケズリ 擦痕著しい 内面はミガキを施す	①褐 ②黒褐 良	チャート	胴部片	早期 無文擦痕土器
7	縄文 深鉢	条割の幅が広い熱糸を施文	淡褐 良	赤色 スコリア	胴部片	花輪台式
11	縄文 深鉢	口唇一丸頭状 口縁一内外面ともミガキを施す。下端に原体の押圧を複数実行う。	褐 良		口縁片	花輪台式
12	縄文 深鉢	口唇一角頭状 口縁一口唇直下がややくびれ、ほぼ直立する。横位のケズリを施す。下層、原体押圧 胴部上半-原体押圧によってモチーフを描く。	①淡褐 ②褐 良		口縁片	花輪台式

表 2-1-11 縄文遺構一覽表

(単位)m

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
I001	F5-2G	不整形 3.0×2.64×0.2 N-10°-E	色調を基本に4層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	小穴2基検出
		比較的しっかりとした掘り込み持つ 底部はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がる	底部直上から覆土層にかけて小破片が 少量出土	
I002	F5-2G	不整形円形 2.64×1.83×0.16 N-37°-W	色調を基本に16層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	2基の土坑の重複か？
		比較的しっかりとした掘り込み持つ 底部はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がる	底部直上から覆土層にかけて小破片が 少量出土	
I003 P1	F4-75G	円形 0.2×0.2×0.1	——	埋裏
		平面・断面形ともに出土した深鉢形土器 とはほぼ同一	縄文土器深鉢底部から胴部片 周器から接合資料多数出土	
I003 P2	F4-75G	不整形円形 1.22×0.66×0.2 N-80°-W	色調を基本に5層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	遺物は出土していない
		比較的しっかりとした掘り込み持つ 底部はほぼ平坦。壁は内湾しながら上る		
I003 R1	F4-83G	不整形円形 0.46×0.36×0.1 N-45°-W	色調を基本に2層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	遺物は出土していない
		浅い凹状の断面形で僅かに熱を受けた 火床を検出		
I004	E5-25G	円形	——	埋裏
		平面・断面形ともに出土した深鉢形土器 とはほぼ同一	縄文土器深鉢底部から胴部片	
I005	E5-30G	不整形 0.54×0.46×0.02 N-42°-W	色調を基本に1層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	遺物は出土していない
		浅い凹状の断面形で明瞭な火床を検出		
I006 PIA	F5-12G	不整形 0.55×0.44×0.04 N-47°-W	色調を基本に2層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	PIBと重複
		浅い凹状の断面形で明瞭な火床を検出	遺物は出土していない	
I006 PIB	F5-12G	不整形 0.56×0.44×0.18 N-36°-W	色調を基本に3層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	PIAと重複
		浅い凹状の断面形で明瞭な火床を検出	遺物は出土していない	
I006 P2	F5-12G	不整形 0.51×0.46×0.14 N-18°-W	色調を基本に2層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	遺物は出土していない
		比較的しっかりとした掘り込みをもち 底部は平坦で一段テラスを有する		
I007	F4-91G	——	——	遺物集中区
		——	前期末から後期の遺物が多い	
I008 P1	F4-81G	不整形 0.86×0.62×0.2 N-20°-E	色調を基本に2層に分層	遺物集中区 前期の遺物が多い
		比較的しっかりとした掘り込みを持ち 断面輪底型で、底部が僅かに赤化	遺物は出土していない	
I009	E5-20G	隅丸長方形 3.3×1.56×0.32 N-46°-W	色調を基本に9層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	小穴3基検出
		比較的しっかりとした掘り込みを持つ 底部はほぼ平坦一部で硬化面を検出	底部直上から覆土層にかけて小破片を中 心に少量出土	

(3) 包含層遺物

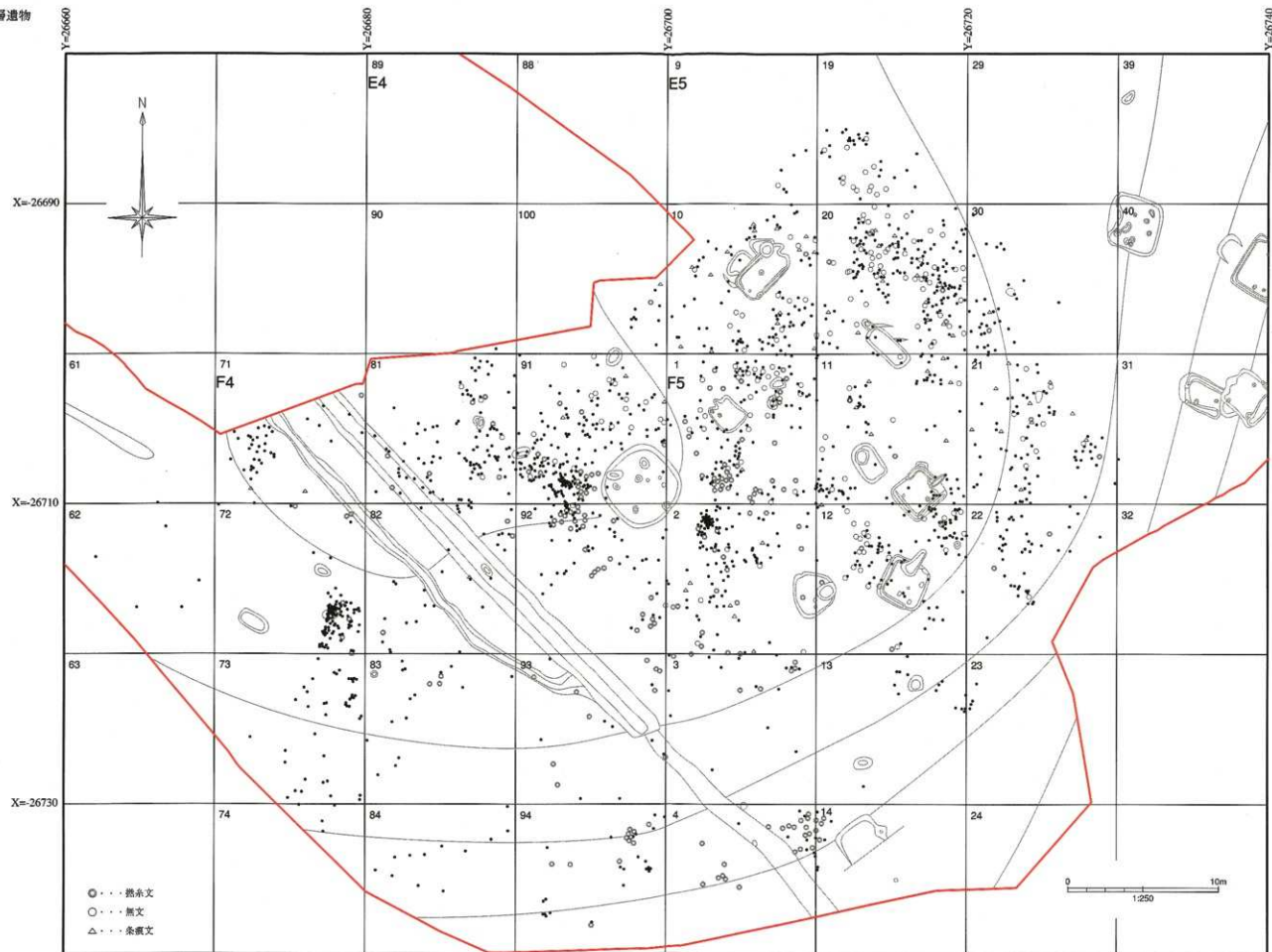
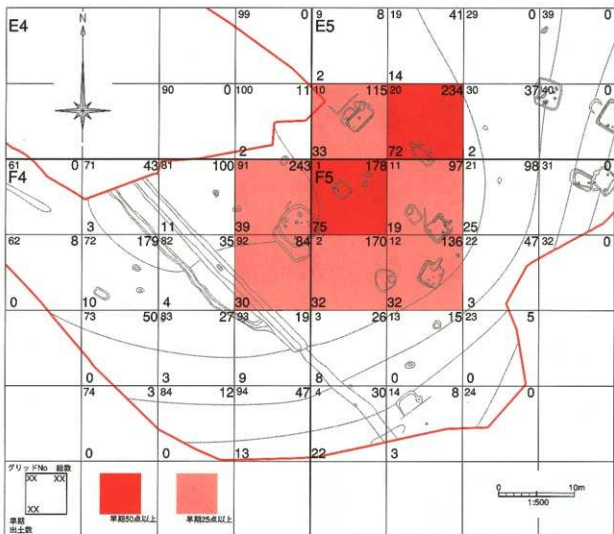


图 2-1-23 向壕道跡包含層遺物分布圖

向境遺跡の今回の調査では、調査範囲南東部の台地先端部において、縄文時代を中心とした遺物包含層を検出している。出土遺物としては、土器と若干の石器である。骨角器等の自然遺物については出土を見なかった。

1 土器

包含層出土の土器については、早期を中心に早期から晩期に至るまで出土している。分布状況は、図2-1-23のとおりである。以下、時期ごとに主だった遺物を報告してゆく。遺物観察等を適宜合わせて参照されたい。



燃糸文系土器 分布状況は、図2-1-25のとおりで、主体となる燃糸文系土器は花輪台式土器である。また、花輪台式土器に加えて花輪台式土器以前の土器（稻荷台～稻荷原式）が少量出土（図2-1-26）している。

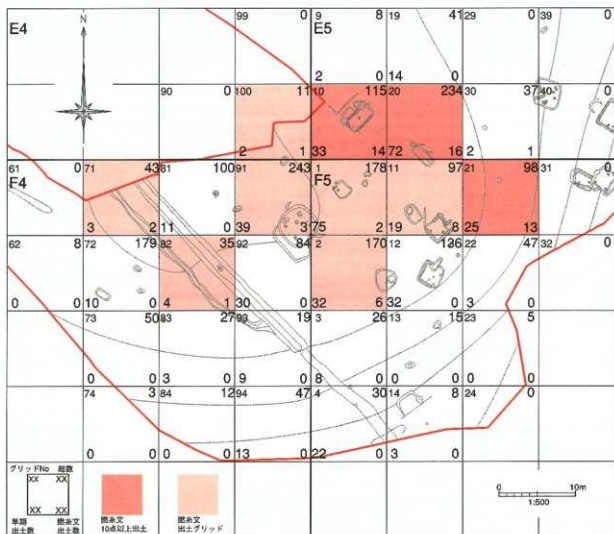


図 2-1-25 遺物包含層図 燃糸文

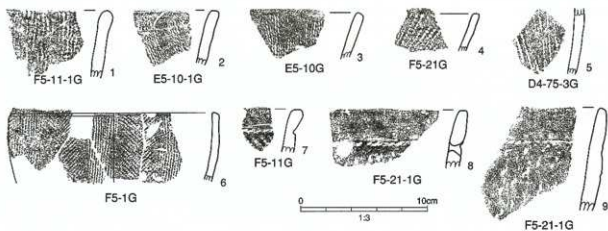


図 2-1-26 包含層遺物 燃糸文

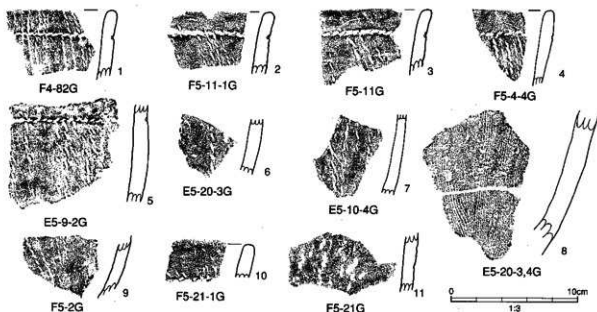


図2-1-27 包含層遺物 燃糸文(2)

図2-1-26 (1~9) 1は、深鉢形土器の口縁片で、口縁は僅かに外反、肥厚し、口縁直下に僅かに凹線が廻る。口唇は円頭状で、口唇直下からRの燃糸を施文する。色調は淡褐色で焼成は良好。稲荷台式と考えられる。2、3は、恐らく同一個体と思われる。深鉢形土器の口縁片で、口縁は、ほぼ直立、角頭状気味の口唇で、口唇直下から細かな縄文を施す。破片資料の為、詳細は不明だが、或いは帯状施文と思われる。色調は淡褐色で焼成は良好。1同様稲荷台式と考えられる。4も1と同様で稲荷台式の深鉢形土器の口縁片で、ほぼ直立した口縁と思われる。角頭状の口唇で、口唇直下からRL縄文を斜行して施文している。色調は淡褐色で焼成は良好。5も1と同様で稲荷台式の深鉢形土器の胴部片。6は、深鉢、口縁~胴部片で口縁はやや内湾し口唇はやや角頭状を呈する。口縁部直下に僅かな凹線が廻る。口唇部直下から文様帯が始まり3種の原体によって文様構成がされている。Rの燃糸による帯状施文と、RL、LRによる羽状縄文を施す。稲荷原の後半期に比定した。7~9は深鉢形土器の口縁片。7は、口縁が外反し、口唇は円頭状を呈する。口縁下端の区画に沈線と原体の押圧とを併用して行う。口縁部無文帯は比較的狭い。胴部はLR縄文を施文。羽状構成をとるかは不明。色調は橙褐色で焼成は良好。8は、口縁がほぼ直立し、口唇は円頭状を呈する。口縁下端の区画に沈線と原体の押圧とを併用して行う。口縁部無文帯は比較的狭い。胴部はRL縄文を施文。羽状構成をとるかは不明。口縁部下端に補修孔有り。色調は褐色で焼成は良好。9は口縁がほぼ直立し口唇は円頭状を呈する。口縁下が無文帯となり、無文帯下端の区画に沈線と縄文原体の側面圧痕を併用している。胴部はRの燃糸を施文する。色調は褐色で焼成は良好。7~9とも花輪台式と稲荷原式の折衷型と考えられる。また8、9は出土地点が同じグリッドであるため、異種原体を使用して文様構成する6の例を挙げるならば、同一個体の可能性がある。

図2-1-27 (1~11) 花輪台式の燃糸文タイプを中心に取り上げた。1は深鉢口縁片で、口縁はほぼ直立し口唇は角頭状を呈する。口縁下端に原体の側面押圧を行い口唇直下から条間の広いR燃糸を施す。色調は橙褐色で焼成は良好。口縁部無文帯が存在していないが、口唇から原体押圧までの幅は20mm程度である。花輪台式の燃糸文タイプの一つとして捉えた。2~5も深鉢形土器の口縁片で、2は、口縁は直立し、口唇は円頭状を呈する。口縁下端に原体の側面押圧を行い、口縁部無紋帯の幅は20mm程度である。胴部に条間の広いR燃糸を施す。色調は淡褐色で焼成は良好。3は、口縁やや外傾し、口唇は

円頭状を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、口縁部無紋帯の幅は20mm程度である。胴部に条間の広いR熱糸を施す。色調は淡褐色で焼成は良好。4は、口縁やや外傾し、口唇は円頭状を呈する。口縁下端に原体L Rの側面押圧を行い、口縁部無紋帯の幅は20mm程度である。胴部に条間のやや狭いR熱糸を施す。色調は淡褐色で焼成は良好。5～7は深鉢形土器の胴部片で、5は、口縁下端に原体R Lの側面押圧を行い、口縁部無紋帯の幅は不明であるが、20mmを越える大型破片と思われる。胴部はR熱糸を施し、色調は淡褐色で焼成は良好。6は、底部に近い部分と考えられ、R熱糸を施し、色調は淡褐色で焼成は良好。7も底部に近い部分と考えられR熱糸もしくは2段熱糸を施し、色調は橙褐色で焼成は良好。L Rの8は、6、7同様、底部に近い部分で、条間、節、共に細かいR熱糸の帯状施文を行っている。色調は淡褐色で焼成は良好である。9は深鉢形土器の底部周辺で、R熱糸を施し、色調は淡褐色で焼成は良好。10は口縁片で、口縁下端に原体の押圧を施す。胴部以下は不明。1と同様口縁部無文帯になるべき部分に熱糸を施文した痕跡が認められる。口縁部無文帯の幅に関しては23mm程度である。色調は淡褐色で焼成は良好である。11は、胴部片で、L Rの熱糸を施す。色調は褐色で焼成は良好である。

図2-1-28図(1～30) 花輪台式の縄文タイプを中心に取り上げた。1～15は、深鉢形土器の口縁片である。1は口縁がほぼ直立し、口唇は円頭状を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、口縁部無文帯は比較的狭い。胴部に無節Rの縄文を施文。破片資料のため羽状構成をとるかどうかは不明。色調は淡褐色で焼成は良好。2は、口縁がほぼ直立し横位の削りが見られる。口唇は円頭状を呈する。口縁部無文帯は17程度。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部にR L縄文を施す。色調は淡褐色で焼成は良好。3、4は、口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は比較的狭い。口唇は円頭状を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はR L縄文による羽状構成を採る。色調は褐色で焼成は良好。3に較べ4は、原体の圧痕が明瞭である。5、6は口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は比較的狭い。口唇は円頭状を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はR L縄文を施文。色調は淡褐色で焼成は良好。7は口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は比較的狭い。口唇部形態は角頭気味である。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はR L縄文による羽状縄文。色調は褐色で焼成は良好。8は口縁がほぼ直立し、口唇部形態は角頭を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はR L縄文を施文。色調は褐色で焼成は良好。9は口縁がほぼ直立し、口縁部無紋帯の幅は20mm程度である。口唇部形態は角頭気味で、口縁下端に原体R L縄文の押圧を行い、胴部はL R縄文を施文。頸部の押圧する原体と、胴部に施文する原体が異なっている。色調は暗褐色で焼成は良好で堅緻である。10は口縁がほぼ直立し、口唇部形態は角頭を呈する。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はL R縄文による羽状縄文。色調は暗褐色で焼成は普通である。11は口縁がほぼ直立し、口唇部形態は角頭を呈し、僅かに肥厚する。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はL R縄文を施文。色調は褐色で焼成は良好である。12は口縁がほぼ直立し、口唇部形態は角頭気味である。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はR L縄文を施文。色調は橙褐色で焼成は良好である。13は口縁が外傾し、口唇部形態は角頭気味である。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部はL R縄文による羽状縄文。色調は淡褐色で焼成は良好である。14、15は口縁がほぼ直立し、口唇部形態は角頭を呈する。口縁下端に原体の押圧を行う。胴部文様については不明である。色調は淡褐色で焼成は良好である。16～21は胴部片である。16はL R縄文で羽状縄文。色調は褐色で焼成は良好。17はL R縄文で羽状縄文。色調は外面が褐色で内面が黒褐色である。焼成は良好。18、19は口縁部直下の部分で、18は原体の押圧を行い、胴部はL R縄文を施文。色調は淡褐色で焼成は良好である。19も原体の押圧を行い、胴部はR L縄文を施文。色調は橙褐色で焼成は良好である。20は口縁下端の原体の押圧を行い胴部については、R L縄文を施文している。色調は暗褐色で、焼成は良好である。21は口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は広く、

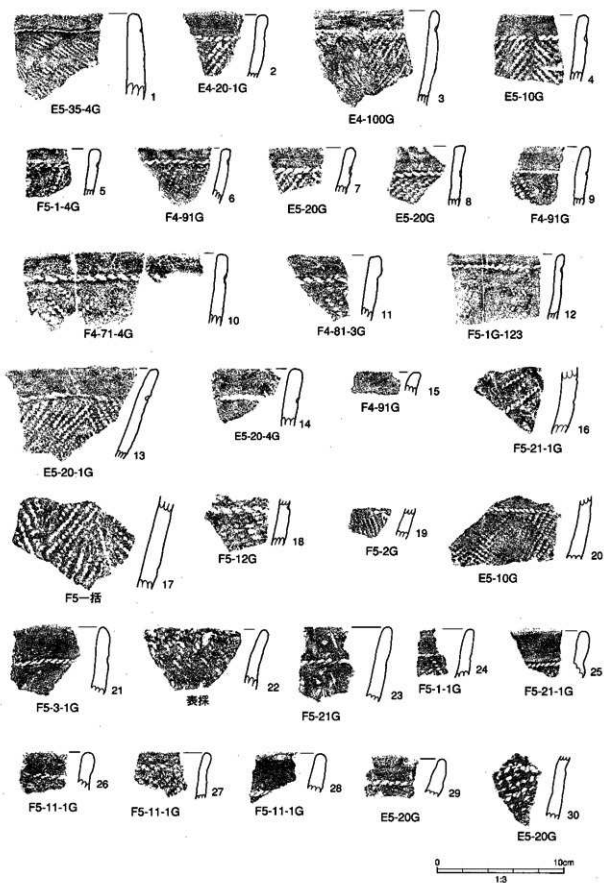


图 2-1-28 包含層遺物 燃糸文(3)

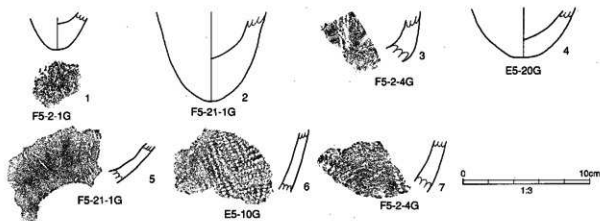


図 2-1-29 包含層遺物 撚糸文(4)

22mm程度である。口唇は円頭状を呈し、口縁下端に原体の押圧を行う。胴部に文様が見られない。花輪台式の無文タイプの可能性もある。色調は褐色で焼成は良好である。22は口縁片で外反、口唇、円頭状を呈す。R Lの撚糸もしくはR Lの複筋縄文を施文すると思われるが、判然としない。色調は褐色で焼成は良好である。23は、口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は広く、25mm程度である。口唇は円頭状を呈し、口縁下端に原体の押圧を行う。胴部に文様については不明部分が多い。色調は褐色で焼成は良好である。24は、口縁がほぼ直立し、口縁部無文帯は、20mm程度である。口唇は角頭状を呈し、口縁下端に原体の押圧を行う。胴部は原体の押圧によってモチーフを描いている。花輪台式に見られる文様バリエーションの一つと思われる。色調は表面が淡褐色で裏面が黒褐色で、焼成は良好である。25は、口唇は円頭状を呈し、口縁部無文帯は広く、24mm程度である。口縁下端に原体の押圧を行い、押圧を施した部分で屈曲し、口縁がやや外傾する。胴部については詳細は不明であるが、縄文施文のタイプと考えられる。色調は淡褐色で焼成は良好である。26は、25同様、口唇は円頭状を呈し、口縁下端に原体の押圧を行い押圧を施した部分で屈曲し、口縁がやや外傾する。25と比べ、口縁部無文帯は狭く、15mm程度である。胴部の施文方法については不明である。色調は表面が橙褐色で裏面が暗褐色で、焼成は良好である。27は、口唇は角頭ぎみで、口縁は、ほぼ直立し口縁部無文帯は狭く10mm程度である。口縁下端に原体の押圧を行い、胴部は縄文を施文。色調は橙褐色で、焼成は良好である。28は、口唇は円頭状を呈し、ほぼ直立する。口縁下端に原体の押圧をし、以下が破損しているため胴部については不明である。口縁部無文帯の幅は25mm程度である。色調は暗褐色で、焼成は良好である。29も28と同様である。口縁部無文帯の幅は28と比べ狭く15mm程度である。色調は淡褐色で、焼成は良好である。30は胴部片で、口縁下端の原体の押圧を行い胴部についてはL R縄文を施文している。色調は暗褐色で、焼成は良好である。

図2-1-29図(1~7) 1~7は底部片及び底部付近を掲載した。1は、文様構成としては、撚糸文による施文と思われるが、詳細は不明。色調は橙褐色で焼成は良好である。2は、器壁が厚く、大型の深鉢形土器の底部と考えられる。外面には従位の削りが見られるが、撚糸等の施文の痕跡はない。色調は淡褐色で焼成は良好である。3はRの撚糸を施文、色調は外面が褐色、内面が暗褐色で、焼成は良好である。4は、撚糸等の施文の痕跡が認められない。色調は暗褐色で、焼成は良好である。5は、Rの撚糸を施文、色調は褐色、焼成は良好である。6は、L R縄文による羽状縄文を施文している。色調は外面が淡褐色、内面が黒褐色で、焼成は良好である。7はL R縄文を施文、おそらく羽状構成を探ると思われる。色調は淡褐色、焼成は良好である。1~7とも胎土に繊維を含まない尖底土器である。以上、撚糸文期の所産で、花輪台式に前後する時期と思われる。

無文・擦痕系土器 向境遺跡において熱糸文期後半に併行、或いは後続するとされる無文・擦痕系土器がまとまって出土した。分布状況としては図2-1-30図のとおりで、熱糸文系土器の分布と重なるか、微妙にずれている状況であった。なお、本報告書では、器面の擦痕の状況を中心に無文・擦痕系土器をA～Fの6分類をして考えた。以下、順を追って主だった遺物について報告したい。

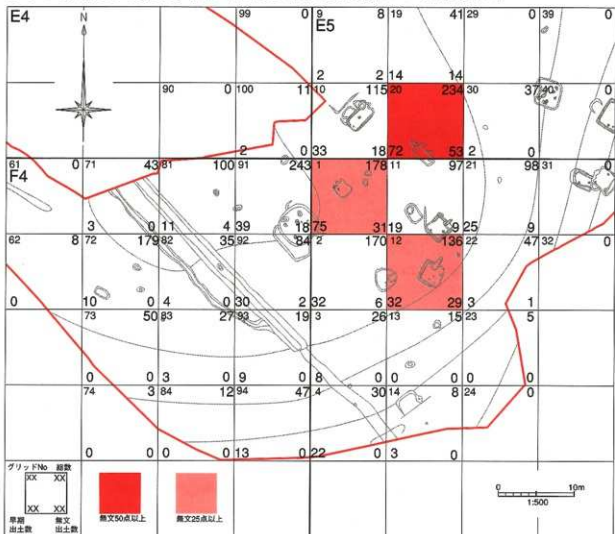


図2-1-30 遺物包含層図 無文

a 種 (図2-1-31 1～6) 擦痕が顕著ではなく、口縁直下に凹線が廻るもの。1～6はいずれも口縁片。1は、口縁がほぼ直立し口唇は角頭気味である。口縁直下に僅かな凹線が廻る。擦痕の状況はあまり見受けられず、擦痕系土器と言うより無文土器とした方がふさわしい。色調は暗褐色、焼成は良好である。2も1と同様であるが、1に比べやや擦痕が窺え、口縁付近では横位の胴部付近では縦位の擦痕がある。色調は褐色、焼成は良好である。3は、口縁がやや外傾し、口唇部の形態が角頭状を呈し明らかに平坦面を作っている。凹線の状況は比較的明瞭である。擦痕の状況は2と同様で僅かに見受けられる程度である。色調は暗褐色、焼成は良好である。4は、口唇の状況は角頭気味で凹線の状況は比較的明瞭である。擦痕の状況は2と同様で僅かに見受けられる程度である。色調は橙褐色、焼成は良好である。5は、口唇の状況は丸頭で凹線の状況は不明である。擦痕の状況は1と同様であまり見受けられない。内面の磨きが顕著である。色調は暗褐色、焼成は良好である。6は、口縁がほぼ直立するかやや外反気味で口唇は角頭気味である。口縁直下に僅かな凹線が廻る。擦痕の状況はあまり見受けられず、1と同様で擦痕系土器と言うより無文土器とした方がふさわしい。色調は暗褐色、焼成は良好である。以上1～6は稲荷原式併行或いは稲荷原式無文タイプの影響を受けた一群と考えられる。

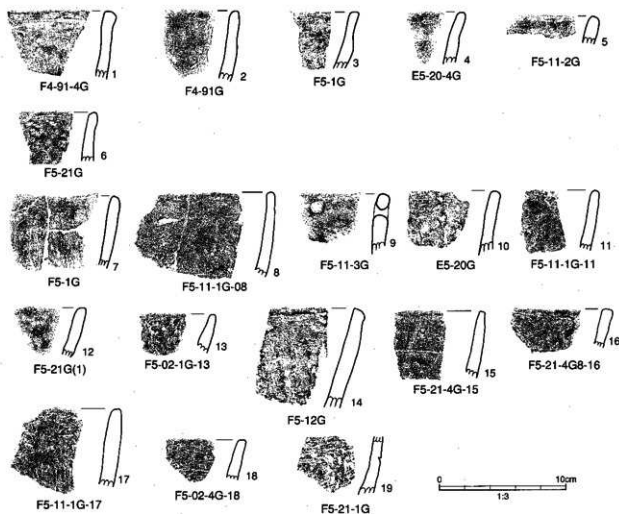


図2-1-31 包含層遺物 無文

b 種 (図2-1-31 7~19) 擦痕が顕著ではなく、口縁直下に凹線がないもの。7~18が口縁片、19が胴部片である。口縁片の内、7~13が口唇が円頭状のもので、14~18が角頭状のものである。7は、ほぼ直立する口縁で、擦痕の状況は、口縁付近で横位に胴部で縦位に僅かに見られる。胎土に若干の砂粒が含まれ、色調は橙褐色、焼成は良好である。8は、やや外傾する口縁で、擦痕の状況は、斜位の擦痕が僅かに認められる。色調は橙褐色、焼成は良好である。9は、口唇の形態が角頭気味で、やや外傾する。口縁下に補修痕を有する。擦痕の状況、胎土、色調は7とほぼ同じである。色調は橙褐色、焼成は良好である。10は、やや外傾する口縁で胎土に若干の砂粒が含まれ擦痕の状況は9と同様、僅かに認められる。色調は橙褐色、焼成は良好である。11は、ほぼ直立する口縁で、擦痕はあまり顕著ではない。色調は橙褐色、焼成は良好である。12・13は、やや外傾する口縁で、擦痕の状況はあまり顕著ではない。胎土、色調は7とほぼ同じである。14は、直立かやや外反する口縁で擦痕の状況は、口縁付近で横位に胴部で縦位に見られる。胎土に若干の砂粒が含まれ、色調は7とほぼ同じである。15は、直立かやや外反する口縁で擦痕の状況は、顕著ではないが、口縁付近で横位に胴部で縦位にそれぞれ僅かに見られる。16は、ほぼ直立する口縁で、擦痕の状況は明瞭ではない。色調は外面が橙褐色、裏面が黒褐色、焼成は良好である。17・18は、ほぼ直立する口縁で、擦痕の状況は口縁部で横位に、胴部で縦位にそれぞれ僅かに認められる。態度に砂粒を少量含み、色調は橙褐色、焼成は良好である。19は、底部に近い部分と思われ、棒状工具による刺突列が僅かに見られる。横位、斜位の擦痕が僅かに認められる。色調は外面が褐色、裏面が黒褐色、焼成は良好である。以上7~19は平板式の影響の無文土器と考えられる。

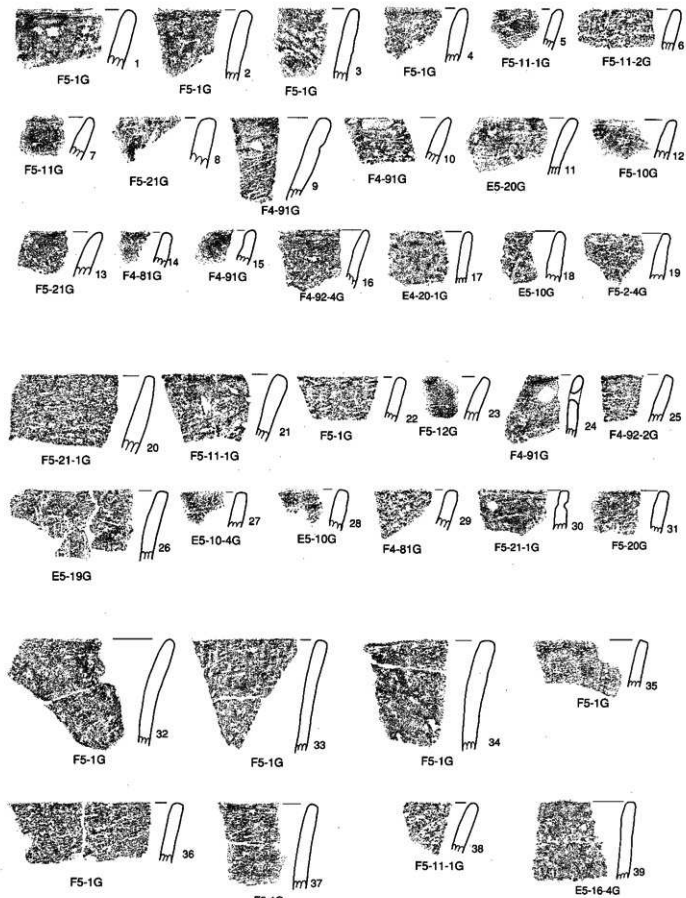


图 2-1-32 包含層遺物 無文(2)

c 種 (図2-1-32 1~19) 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が円頭状のもの。c種-e種は大別すれば、同じ種類に属すると思われるが、口唇部の形態でc種-e種の3種に分類した。1~19とも口縁片である。1は、厚手の口縁でやや外傾し、口縁上半から口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。口縁部外面には横位の擦痕があり、擦痕の状況は比較的明瞭である。色調は淡褐色、焼成は良好である。2/3は、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。外面の擦痕の状況、胎土、色調、焼成は7とはほぼ同様である。出土地点も同じグリッドであるため、同一個体の可能性がある。4は、口縁やや外傾し、胎土に小角礫を多く含む外面の擦痕が顕著である。内面は丁寧な磨きが施されている。色調は外面が黒褐色で、内面が褐色、焼成は良好である。5は、やや薄手の口縁でやや外傾する。口縁部外面には横位の擦痕があり、擦痕の状況は比較的明瞭である。色調は淡褐色、焼成は良好である。6は、口縁がやや外傾し、胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。内面は丁寧な磨きが施されている。色調は淡褐色、焼成は良好である。7は、やや外傾する口縁で内面は丁寧な磨きが施されている。色調は淡褐色、焼成は良好である。8は、1と同様の口縁片である。出土地点も近いため同一個体の可能性あり。9は、口縁やや外傾し、口縁上半から口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は外面が暗褐色で、内面が褐色、焼成は良好である。10は、9と同様で、色調については、内面外面とも暗褐色である。11・12・13・14・16・18は、口縁がやや外傾し、胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。内面は丁寧な磨きが施されている。色調は外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。15は、口縁がやや内湾する。胎土の状況、その他、摩痕等の状況は他のc種の土器と同様である。色調は、外面、内面ともに暗褐色、焼成は良好である。17は、口縁がやや外傾し、胎土の状況、その他の摩痕等の状況は他のc種の土器と同様で、色調に関しては、外面、内面ともに暗褐色である。19は、口唇がやや角頭気味で、口縁がやや外傾する。胎土の状況、その他の摩痕等の状況は他のc種の土器と同様で、色調に関しては、外面が暗褐色土、内面が黒褐色である。

d 種 (図2-1-32 20~31) 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が角頭状、或いは角頭気味のもの。20・21は、厚手の口縁でやや外傾し、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。22は、やや薄手の口縁でやや外傾する。摩痕等の状況は20・21と同様である。色調は、外面が橙褐色、内面が褐色、焼成は良好である。23は、口縁がやや外傾する。内面は磨きが施され、外面の摩痕も比較的明瞭である。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。24は、やや外反する口縁で、補修孔を有する。口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面、内面ともに暗褐色、焼成は良好である。25は、やや外傾し、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。26は、やや外反する口縁で、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。27は、やや外傾する口縁で、補修孔を有する。口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面が淡褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。28も27同様であるが、口縁下に補修孔?を有する。摩痕の状況等も27と同様である。色調は、外面、内面ともに淡褐色、焼成は良好である。29は、やや外傾する口縁で、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。胎土に小角礫を多く含む外面に横位の擦痕が顕著である。色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。30もやや外傾する口縁で、口唇、器面表面にかけて磨きが施されている。口縁下に補修孔?の痕跡が見られるが、28と違い、穿孔

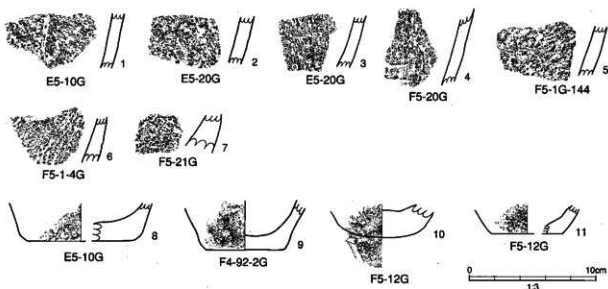


図2-1-33 包含層遺物 無文(3)

されていない。胎土に小角礫を多く含み外面に横位の擦痕が顕著である。色調は外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。31もやや外傾する口縁で、胎土の状況、擦痕の状況等は他のd種の土器と同様で、色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。

e種(図2-1-32 32~38) 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しく、口唇が角頭状で口縁が外反するもの。32は、厚手の口縁で口唇に平坦面を有する。胎土に小角礫を多く含み外面に横位の擦痕が顕著である。内面は磨きが施されている。色調は、外面が褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。33は、32と同様である。色調は、外面が暗褐色、内面が褐色、焼成は良好である。34も32と同様であるが32、33と比べると外反の度合いがやや低い。色調は、外面が褐色、内面が淡褐色、焼成は良好である。35は、やや薄手の口縁で、摩痕の状況等は32と同様である。外反の度合いは34と同様やや弱い。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。36・37・38も摩痕の状況等は32と同様で外反の度合いは34と同様やや弱い。色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。39も摩痕の状況等は32と同様で外反の度合いは34と同様やや弱い。色調は、外面、内面ともに褐色、焼成は良好である。

f種(図2-1-33 1~11) 胎土にチャート等の小角礫を含み擦痕が著しい土器で、c~e種の胴部及び底部にあたると思われるもの。1~7は胴部片である。1は、胎土に小角礫を多く含み外面に斜位の擦痕が顕著である。内面は磨きを施している。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。2も胎土に小角礫を多く含み、外面の擦痕は比較的顕著である。色調は、外面が褐色、内面が暗褐色、焼成は良好である。3も1と同様で、外面に縦位の擦痕が顕著である。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好である。4も3同様、外面に縦位の擦痕が顕著である。色調は、外面、内面とも橙褐色、焼成は良好である。5・6・7は、底部に近い胴部片、いずれも、胎土に小角礫を多く含み外面に斜位の擦痕が顕著である。色調等は、5が外面が暗褐色、内面が褐色、焼成は良好、6が外面が暗褐色、内面が黒褐色、焼成は良好、7が外面が暗褐色、内面が橙褐色、焼成は良好である。8~11は底部片である。いずれも、丸底を意識した、平底のタイプで、摩痕の状況等は、他のf種のものと同じであるが、摩痕の程度は口縁、胴部と比べると顕著ではない。

以上c~f種は、千葉県成田市取香和田戸遺跡L地点及び栃木県茂木町天矢場遺跡出土の摩痕土器と類似の土器と考えられる。

条痕文土器 分布状況としては図2-1-34のとおりで、縄ヶ島台期のものがその主体であった。

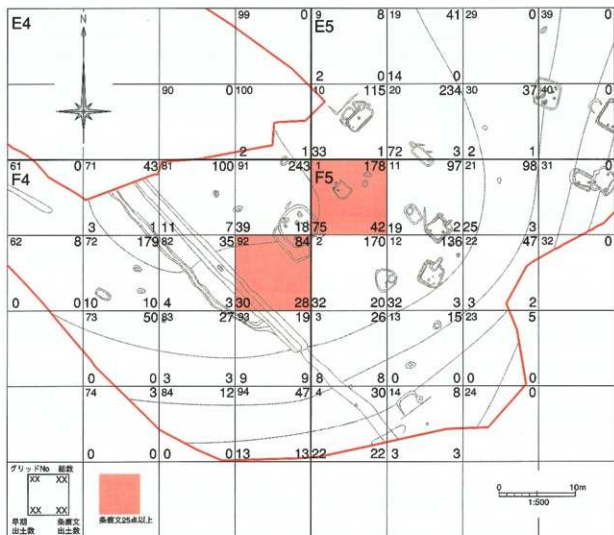


図 2-1-34 遺物包含層図 条痕文

図2-1-35 (1~20) 1~20はすべて口縁片である。1は厚手の外傾する口縁で、口唇は丸頭である。外面、内面ともに粗く浅い横位、斜位の条痕を施す。口縁下部に補修孔を有する。色調は暗褐色で、胎土に繊維を多く含み、焼成は悪く脆い。2・3は、やや薄手の口縁で、口唇に刻みを持つ。外面、内面ともに細かく比較的しっかりとした横位の条痕を施す。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。3は2に比べ、口唇の刻みが細かい。4も成形、調整との手法は同じである。内面の調整に関して、比較的しっかりとした横位の条痕を施す。5は、やや外傾する口縁で、口唇に刻みを持つ。外面、内面ともに明瞭な条痕を認められない。色調は橙褐色で、胎土に含まれる繊維の量は少量で、焼成は良好である。6は、やや外傾する口縁で、平らな口唇である。外面に竹管による押し引きと刺突による意匠を施し、沈線で区画する。色調は橙褐色で、胎土に含まれる繊維の量は少量で、焼成は良好である。7は、やや外傾する口縁で、口唇に浅い刻みを持つ。外面、内面ともに細かく比較的しっかりとした横位の条痕を施す。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。8・9は、やや外傾する口縁で、口唇に刻みを持つ。外面、内面ともに細かく比較的しっかりとした横位の条痕を施す。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。10は、やや外傾する口縁で、口唇に刻みを持つ。外面に細かく浅い横位の条痕を施す。内面の条痕についてはあまり顕著ではない。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。11は、やや外傾する口縁で、口唇に刻みを持つ。外面、内面とも

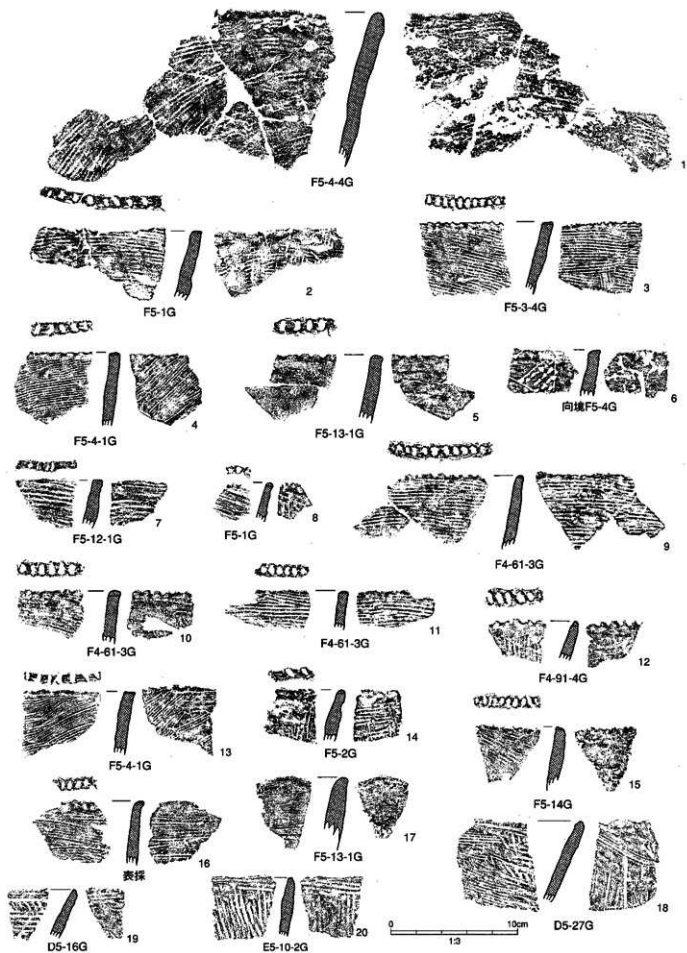


图 2-1-35 包含层遗物 条痕文

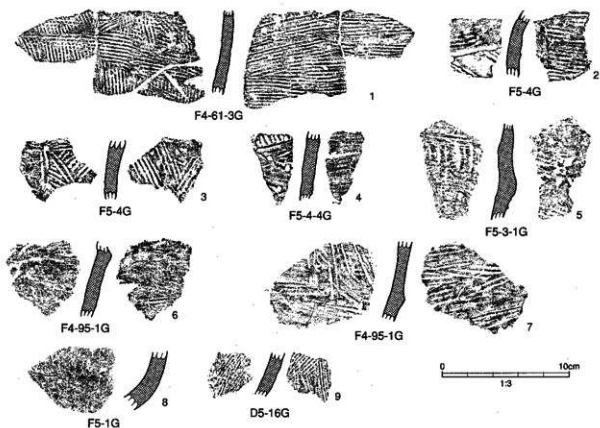


図2-1-36 包含層遺物 条痕文(2)

に細かく比較的しっかりとした横位の条痕を施す。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。12は、やや外傾する口縁で、口唇に刻みを持つ。刻みは、これまでの土器が器壁に対して直角に刻まれていたのに対し、12は器壁に対して斜めに刻まれている。外面に浅い従位の条痕を施す。内面の条痕についてはあまり顕著ではない。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。13は、やや外傾する口縁で、口唇は角頭状で尚かつ刻みを持つ。外面、内面ともに細かくしっかりとした斜位の条痕を施す。色調は暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。14は、やや外傾する口縁で、口唇は丸頭状で尚かつ刻みを持つ。刻みは器壁に対して斜めに刻まれている。外面に、浅い従位の、内面に浅く細かい従位、横位の条痕を施す。色調は暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。15は、やや外傾する口縁で、口唇に細かい刻みを持つ。外面に、斜位の、内面に横位の条痕を施す。内面の条痕はあまり顕著ではない。色調は暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。16は、ほぼ直立し、若干反する口縁片である。口唇は角頭状で尚かつ浅く細かい刻みを持つ。外面、内面ともに比較的しっかりとした横位の条痕を施す。色調は、外面が暗褐色で内面が橙褐色、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。17は、刻みを持たない円頭状の口唇で、やや外傾する口縁片である。外面、内面とも浅い横位の条痕を施すが、条痕の状況は、あまり顕著ではない。色調は暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。18も刻みを持たない円頭状の口唇で、やや外傾する口縁片である。口唇を外面、内面ともに撫で後、横位の条痕文を施し、胴部、外面、内面ともに縦位の条痕文を施す。内面の条痕文に関しては、あまり顕著ではない。色調は、外面が暗褐色で内面が橙褐色、胎土の繊維の混入は少量で、焼成は良好である。

19、20は、包含層調査区域外からの出土である。やや外傾する口唇が丸頭状の口縁片である。外面、内面とも横位の条痕を施す。色調は暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。以上、野島期～縄ヶ島台期の所産と考えられる。

図2-1-36 (1~9) 1~7は頸部~胴部片である。1は、胴部片で、外面は従位、横位の条痕、内面は横位の条痕が施されている。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。2は、胴部片で、外面は条痕を微隆起と刺突によって区画し意匠を描いている。内面は横位の条痕を施す。色調は外面が褐色で、内面が橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。3は、外面については、押し引きによる意匠を半裁竹管と刺突によって区画し、2と同様の文様効果をだしている。内面は斜位の条痕を施す。色調は外面、内面ともに淡褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。4は、2と同様、条痕を微隆起と刺突によって区画し意匠を描いている。内面は横位の条痕を施すが、条痕の程度は顕著ではない。色調は外面が橙褐色で、内面が褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。5・6・7は頸部片で、5は、屈曲する部分に隆帯が廻り、隆帯を連続沈線で刻んでいる。隆帯から上半は横位の条痕を施している。内面は、斜位の条痕を施している。外面、内面ともに条痕の程度は顕著ではない。色調は外面が橙褐色で、内面が淡褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。6も5と同様、頸部片で、屈曲する部分に隆帯が廻っている。外面、内面ともに斜位の条痕を施しているが、ともに条痕の程度は顕著ではない。色調は外面が暗褐色で、内面が褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。7も5・6と同様、屈曲する部分に隆帯が廻っている。隆帯以下は、僅かに横位の条痕が施されている。隆帯以上は、従位、横位の条痕が明瞭に施されている。色調は外面が暗褐色で、内面が褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好で、堅緻である。8は、底部片で、尖底である。条痕等の文様、施文の痕跡は認められない。色調は外面、内面ともに暗褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。9は、包含層調査区域外からの出土で胴部片である。外面、内面ともに斜位が施されている。色調は橙褐色で、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。以上、鶴ヶ島台期の所産と考えられる。

前期

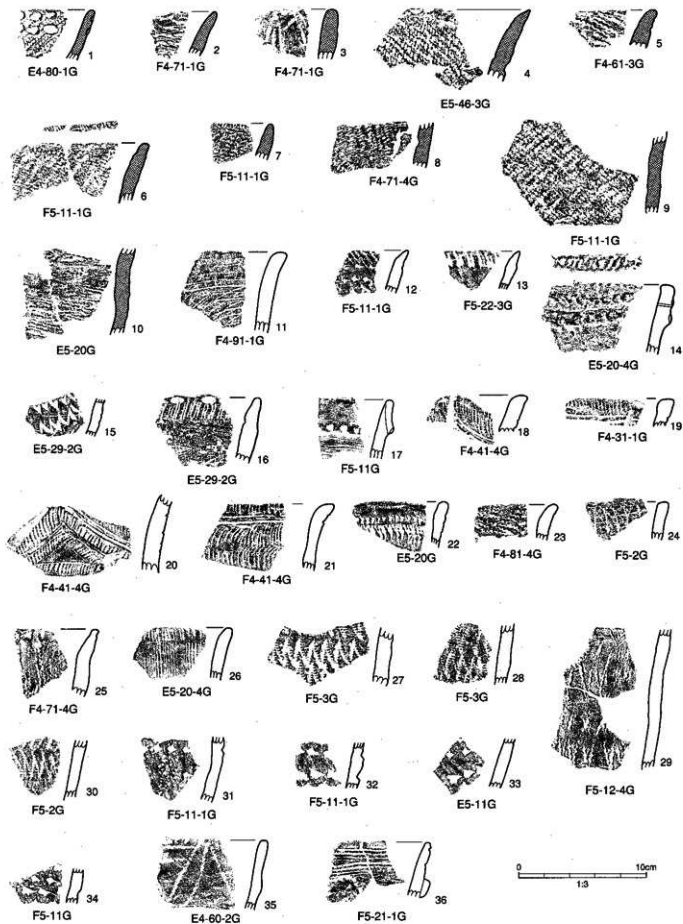


图 2-1-37 包含层造物 前期

表 2-1-12 包含層遺物観察表(縄文前期)

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 2段L Rを施文に口縁部文様帯は2段の判別判 内面 ミガキあり	砂橙褐色 砂淡褐色	細砂長石 スコリア 細粒 繊維含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
2	縄文 深鉢	外面 樽葉状工具による波状文 内面 ケズリ後ミガキ	淡黄褐色 青	細砂 スコリア 細粒繊維 含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
3	縄文 深鉢	外面 斜行沈線による壺尻 内面 ケズリあり	淡黄褐色 青	細砂長石 細粒 繊維やや 目立つ	口縁片	前期中葉 黒浜式
4	縄文 深鉢	外面 0段多条R Lを施文 施文のタイミングはやや早め 口縁 平縁 外反気味に立ち上がり口唇部形態は内割ぎ気味の尖頭状 内面 軽くミガキ	淡褐色 青	細砂長石 スコリア 細粒繊維 含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
5	縄文 深鉢	外面 口縁平縁 口唇部形態は内割ぎ気味 附加条か 内面 ナデつけており軽くミガキ	暗褐色 青	細砂 スコリア 細粒繊維 含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
6	縄文 深鉢	外面 口唇上にキザミ その下には0段多条R L 内面 ケズリあり	暗褐色 青	細砂 長石類 細粒 繊維含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
7	縄文 深鉢	外面 口唇上にキザミ 0段多条R L 内面 ケズリあり 6と同一個体か	暗褐色 青	細砂 長石類 細粒 繊維含む	口縁片	前期中葉 黒浜式
8	縄文 深鉢	外面 使用原体は0段多条のR L 内面 軽くミガキ	暗褐色 青	砂 スコリア 類 繊維含む	胴部片	前期中葉 黒浜式
9	縄文 深鉢	外面 2段R Lか 施文のタイミングは早く、押捺は浅い 内面 ケズリあり	砂橙褐色 砂暗褐色	細砂 長石類 細粒繊維 含む	胴部片	前期中葉 黒浜式
10	縄文 深鉢	外面 附加条縄文 内面 軽くミガキ	砂茶褐色 砂暗褐色 青	細粒スコ リア粒繊維 含む	胴部片	前期中葉 黒浜式
11	縄文 深鉢	外面 竹管による平行沈線文を施文 口縁は外反気味 内面 ケズリあり	淡褐色 青	砂目立ち スコリア 粒含む	口縁片	前期後半 浮島Ⅰ式
12	縄文 深鉢	外面 斜位のキザミ 連続「三角文」 口縁 平縁 内面 軽くミガキ	橙褐色 青	細砂長石 赤色スコ リア繊維 含む	口縁片	前期後半 浮島Ⅱ式
13	縄文 深鉢	外面 口縁部文様帯の条線は斜め 口縁 平縁 外反気味 内面 軽くミガキ	淡褐色	細砂の 目立つ 胎土で やや緻密	口縁片	前期後半 浮島Ⅲ式?
14	縄文 深鉢	外面 口唇上にキザミ 口縁上に圧痕あり 口縁 平縁 複合口縁で穿孔あり 内面 ミガキあり	淡褐色 良	砂 スコリア 粒目立つ 胎土	口縁片	前期後半 浮島式
15	縄文 深鉢	外面 ハマグリ腹縁による波状貝殻文 内面 ケズリ残る	淡褐色	細砂スコ リア細粒 含む	胴部片	前期後半 浮島Ⅱ式
16	縄文 深鉢	外面 口縁部の条線は細いがナメ 口縁 小波状(基本的には平縁) 内面 軽くミガキ 輪痕残る	橙褐色 良	砂多く 長石粒 スコリア 細粒含む	口縁片	前期後半
17	縄文 深鉢	外面 複合口縁 下端にキザミを施す 以下は竹管による沈線を施す 内面 ミガキあり	茶褐色 良	細砂 長石類 スコリア 繊維含む	口縁片	前期後半 浮島式
18	縄文 深鉢	外面 アナダラ属の貝殻の腹縁を連続押捺する 口縁 波状縁4単位か 内割ぎ気味の口唇部 内面 ミガキ	淡褐色 良	砂長石類 スコリア 細粒含む	口縁片	前期後半 興津Ⅱ式

19	縄文 深鉢	外面 □縁部文様帯はアナグラ属の直縁を連続押捺したもの これ以下は「磨消貝紋文」か □縁は波状縁4単位か 内面 ミガキ	淡褐色 良	硬スコリア 細粒 長石粗粒 含む	□縁部 片	前期後半 興津Ⅱ式
20	縄文 深鉢	外面 磨消貝紋文 (二角透携文の中に貝殻縁押捺)	淡褐色 良	砂長石類 スコリア 細粒含む	胴部片	前期後半 興津Ⅱ式
21	縄文 深鉢	外面 アナグラ属の貝殻腹縁を連続押捺する □縁 平縁か □唇部形態は内削ぎ状 内面 ミガキ	茶褐色 普	砂長石類 赤色スコ リア細粒 含む	□縁片	前期後半 興津式
22	縄文 深鉢	外面 アナグラ属の貝殻の腹縁を連続して押しつけて施文	橙褐色 良	細砂長石 類赤色 スコリア 細粒含む	□縁片	前期後半 興津Ⅰ式
23	縄文 深鉢	外面 □縁頸部にアナグラ属の貝殻腹縁の圧痕を施す □縁 外反して立ち上がる □唇部は丸棒状 内面 軽ミガキ	橙褐色 良	砂長石 スコリア 細粒含む	□縁片	前期後半 興津Ⅱ式
24	縄文 深鉢	外面 アナグラ属の貝殻腹縁による波状貝紋文 口縁 小波状で口唇上を押捺によって小波状にしてある	砂暗茶褐色 微 砂暗褐色 微	砂長石類 赤色スコ リア粗粒 含む	□縁片	前期後半 興津式
25	縄文 深鉢	外面 □縁～頸部はアナグラ属の貝殻腹縁による連続押捺 □縁縁は指痕により「ひだ状」にする	茶褐色 普	細砂 長石類 スコリア粗 粒含む	□縁片	前期後半 興津式
26	縄文 深鉢	外面 □縁ケテ密接条線 頸部～胴部上半条線 内面 ケズリ後ナデ	淡褐色 普	砂目立ち 反石赤色 スコリア 細粒含む	□縁片	前期後半 興津式
27	縄文 深鉢	外面 胴部はアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝紋文 内面 ケズリ後軽ミガキ	砂橙褐色 微 淡褐色 良	細砂 長石類赤 色スコリア 類含む	胴部片	前期後半 興津式
28	縄文 深鉢	外面 胴部はアナグラ属の貝殻腹縁による波状貝紋文 内面 軽ミガキ	淡褐色 良 堅微	細砂 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
29	縄文 深鉢	外面 頸部鋸歯状文 胴部波状貝紋文 歯状文は「大木4式」もしくは「大木5式」との脈絡がたど れる 内面 ケズリ後軽ミガキ	砂灰褐色 微 茶褐色 良	細砂 長石類 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
30	縄文 深鉢	外面 胴部中位下半アナグラ属の貝殻腹縁を用いロッキングさせて施 文(波状貝紋文) 内面 ケズリ後軽ミガキ	淡褐色 普	砂スコリア 粒やや 目立つ	胴部片	前期後半 興津式
31	縄文 深鉢	外面 胴部 三角文を連続施文する	橙褐色 良	砂目立ち 長石類 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
32	縄文 深鉢	外面 胴部 三角文を連続施文する	橙褐色 良 堅微	砂目立ち 長石類 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
33	縄文 深鉢	外面 三角文を横位に施文する 内面 ケズリあり	橙褐色 良	細砂 長石類 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
34	縄文 深鉢	外面 三角文を横位に施文する 内面 ケズリありか	橙褐色 良	砂目立ち 長石類 スコリア 粗粒含む	胴部片	前期後半 興津式
35	縄文 深鉢	外面 原体側面圧痕で描く(原体は1段R) 内面 ミガキありか	砂暗褐色 微 淡褐色 普	砂多く 長石類 スコリア 粒含む	□縁部	前期後半～木葉 縄文系粗製土器
36	縄文 深鉢	外面 多変化比喩と貼付文 内面 ケズリ部分的にミガキやナデ	淡褐色 普	砂長石類 スコリア 粒大さめ	□縁片	諸磯C式?

前期末～中期前半



図 2-1-38 包含層遺物 前期末～中期前半

表 2-1-13 包含層遺物観察表(前期末~中期前半)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 竹管(半截竹管)を用いて連続刺突及び集合沈線を描く 内面 ケズリ幾ナアモの後軽くミガキ	茶褐色 良	細砂 長石類 花崗岩粒 含む	口縁片	前期末葉 諸磯c式
2	縄文 深鉢	口縁 波状 波頂部は双頭状か 外面 浮線文で小さなジグザグを描き波頂下に橋状把手をつける 内面 ミガキあり	橙褐色 良	砂長石類 スコリア 凝粒含む	口縁片	前期末葉 十三岩様式
3	縄文 深鉢	外面 ソーメン状の細い浮線文で描く 内面 ミガキあり?	砂黒褐色 砂淡褐色 普	砂目立ち 長石類 花崗岩粒 含む	口縁片	前期末葉 十三岩様式
4	縄文 深鉢	外面 施文順序は縄文施文→ソーメン状浮線文→沈線である	砂橙褐色 砂淡褐色	砂目立ち 長石類 花崗岩粒 含む	頸部片	前期末葉 十三岩様式
5	縄文 深鉢	口縁 波状 胴中位でくびれ大きく外反し立ち上がる 底部は外側に 張り出す 波頂下より橋状把手(脱落) 外面 キザミを施した隆帯を第一次区画文として口縁部文様を面する 意匠を施してから三角形刻文を施して縦位の沈線を充填する 内面 ミガキあり	橙褐色 良	砂長石類 赤色 スコリア 凝粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台I a式
6	縄文 深鉢	口縁 波状 波頂部は双頭状 波頂下より橋状把手 外面 縦位沈線を施してから意匠を描き三角形刻文を施す 内面 ミガキか	砂茶褐色 砂暗褐色	細砂 長石類 スコリア 凝粒含む	口縁~ 胴上部	中期初頭 五領ヶ台I b式
7	縄文 深鉢	5と同一個体 単位文の一部	砂茶褐色 砂暗褐色	細砂 長石類 スコリア 凝粒含む	頸部片	中期初頭 五領ヶ台I a式
8	縄文 深鉢	5と同一個体 単位文の一部	砂茶褐色 砂暗褐色	細砂 長石類 スコリア 凝粒含む	頸部片	中期初頭 五領ヶ台I a式
9	縄文 深鉢	口縁 平線 外面 口縁部は外厚し縦位沈線を引き上下端を平行沈線で面し三角 形刻文を施文する 内面 軽くミガキ	茶褐色 良	砂長石類 スコリア 凝粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II a式
10	縄文 深鉢	口縁 平線 外面 口縁キザミあり胴部に交互刺突文を施文 内面 ミガキあり	茶褐色 良	細砂 長石類 スコリア 凝粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II a式
11	縄文 深鉢	口縁 平線 外面 口縁キザミあり胴部に交互刺突文を施文 内面 ミガキあり	茶褐色 良	細砂 長石類 スコリア 凝粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II a式
12	縄文 深鉢	口縁 平線 外面 平行沈線の両側に円形竹管の刺突列を施す 内面 ミガキあり	砂暗褐色 砂淡褐色 良	砂長石類 凝粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II b式 か?
13	縄文 深鉢	口縁 波状線 外面 区画内に三叉文を施文 内面 波頂下に「玉抜き三叉文」状の意匠	暗褐色 普	砂雲母 長石類 花崗岩粒 含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II c式
14	縄文 深鉢	口縁 波状線 外面 隆帯貼付 内面 円孔と「玉」と見立てると「玉抜き三叉文」か?	砂暗褐色 砂淡褐色 良	砂雲母 長石類 スコリア 粒子含む	胴部片	中期初頭 五領ヶ台II c式
15	縄文 深鉢	口縁 平線 外面 交互刺突文か地文は2段R Lをまばらに転がす 内面 ミガキあり	橙褐色 普	砂雲母長 石類花崗 岩粒含む	口縁片	中期初頭 五領ヶ台II c式
16		欠番				
17	縄文 深鉢	外面 地文は2段R Lで二条一組の沈線で意匠を描く くびれ部に隆 帯を貼付する 内面 軽くミガキ	淡褐色 良	砂長石類 スコリア 凝粒含む	頸部片	中期初頭 五領ヶ台II c式 か?

18	縄文 深鉢	口縁 平縁（複合口縁） 外面 口唇上及び口縁部に原体側面圧痕頸部以下は2段LR 内面 ナア後部分的にミガキ	橙褐色 良	砂長石類 赤色スコ リア細粒 含む	口縁片	前期末 ～中期初頭
19	縄文 深鉢	外面 縦位の結節縄文（綾線文）底部が外に張り出す 内面 ミガキあり	⑤橙褐色 ⑥暗褐色	細砂長石 類赤色ス コリア細 粒含む	胴部片	中期初頭 五領ヶ台式
20	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 耳状の貼付に「L」字状の隆帯を貼付して意匠に沿って意匠を 描く 隆帯に沿って一条の沈線を引く 内面 軽くミガキ	淡褐色 良 堅緻	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉直前式
21	縄文 深鉢	口縁 波状4単位波頂部は非対称 隆帯で懸垂文あるいは区画状文 を描き隆帯に沿って一列の角押文を施文 内面 ミガキ	暗褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
22	縄文 深鉢	口縁 波状線で一列の角押文により意匠を描く 口唇上にキザミ 内面 軽くミガキ	淡褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
23	縄文 深鉢	口縁 波状線 外面 波頂部にキザミを有する 内面 ミガキありか	暗褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
24	縄文 深鉢	口縁 波状線 外面 一列の角押文により区画状文を描く 内面 ミガキ	暗褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
25	縄文 深鉢	口縁 波状線 波頂下より蛇行状の隆帯を貼付し一列の角押文を沿わ せる 内面 ミガキ	⑤黒褐色 ⑥茶褐色 普	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
26	縄文 深鉢	口縁 小波状か 外面 口縁部の突起は縦位の粘土棒を芯にその上を粘土板二枚で囲む 隆帯で楕円形の区画文を構成し隆帯に沿って一列の角押文を施文 内面 ミガキありか	淡褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
27	縄文 深鉢	口縁 波状線 外面 一列の角押文により区画状文を描く 内面 軽くミガキ	茶褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	前期前半 阿玉台Ia式
28	縄文 深鉢	口縁 平縁か？ 外面 一条の隆帯を貼付し隆帯に沿って一列の角押文を施文 内面 軽くミガキ	⑤茶褐色 ⑥淡褐色 普	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
29	縄文 深鉢	外面 一条の隆帯を貼付し隆帯に沿って一列の角押文を施文 内面 軽くミガキ（本例は口唇端を欠く）	淡茶褐色 良 堅緻	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
30	縄文 深鉢	口縁 平縁 口縁部文様帯は狭めのタイプ 外面 口縁部文様帯は隆帯貼付による区画状文で隆帯に沿って一列の 「連続（円形竹管）刺突列」を施文する 内面 軽くミガキ	茶褐色 普	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
31	縄文 深鉢	口縁 平縁 口縁部文様帯は狭めのタイプ 外面 口縁部文様帯は隆帯貼付による区画状文で隆帯に沿って一列の 「連続（円形竹管）刺突列」を施文する「Y」字状の意匠を連携する 内面 軽くミガキ	茶褐色 普	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
32	縄文 深鉢	口縁 平縁 口縁部文様帯は隆帯貼付による区画状文で隆帯に沿って 一列の角押文を施文 口縁部文様帯は広めのタイプである 口唇部は 内割ぎ状で内縁を有する 内面 ミガキ	暗褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
33	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 一列の角押文でおそらく隆帯も併用していたもの 内面 ミガキ	橙褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
34	縄文 深鉢	口縁 平縁か？ 外面 隆帯により区画状文を構成し隆帯に沿って一列の角押文を施文 する 内面 沈線あり ミガキ	⑤暗茶褐 ⑥橙茶褐 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式
35	縄文 深鉢	口縁 平縁 口唇部「刃形」 外面 成形痕のみ 内面 ミガキあり	暗褐色	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台Ia式

36	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 一列の角押文によって意匠を描くもの 内面 ミガキ	淡褐色 良	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
37	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 一列の角押文により意匠を描くもの 内面 ミガキ	黒灰色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
38	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 一列の角押文により意匠を描くもの 内面 ミガキ	砂褐色 砂黒褐色 良 堅緻	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
39	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 一列の角押文により意匠を描く 内面 ミガキ	灰褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
40	縄文 深鉢か?	口縁 平縁 口唇部形態は方形で内接あり 外面 無文となるが胴部に隆帯を貼付する等の類型少なくとも口縁部 文縁帯は無し外面は単なるナアつけのみ 内面 ミガキ	灰褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
41	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 粘土棒を芯に粘土板で囲む把手(突起) 突起は「紐」の様な 作り 内面 ミガキ	灰褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
42	縄文 深鉢	口縁 平縁 口唇上に施文する 外面 一列の角押文で意匠を描く 内面 ミガキ	灰褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a ~ I b 式
43	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 隆帯を貼付して区画状文を構成する 隆帯に沿わせて一列の角 押文を施文する 内面 ミガキ	灰褐色 普	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
44	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 隆帯を貼付して区画状文を構成する 隆帯に沿わせて一列の角 押文を施文する 内面 ミガキか?	茶褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
45	縄文 深鉢	口縁 平縁 口縁部文縁帯は隆帯貼付による区画状文で隆帯に沿って 一列の角押文を施文 内面 軽ミガキか?	砂茶褐色 砂暗褐色 普	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
46	縄文 深鉢	口縁 平縁 口唇上にも施文 外面 区画状文を角押文によって描くもの口縁部文縁帯は広い	茶褐色	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a ~ I b 式
47	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 隆帯を貼付して楕円形の区画文を構成 起点には粘土棒を芯に した突起をつける 内面 ケズリ後ナデ	橙褐色 良	非雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I a 式
48	縄文 深鉢	口縁 平縁あるいは波状 外面 区画内に斜め方向の単列角押文を充填する 内面 軽ミガキ	砂茶褐色 砂波褐色 普	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I b 式
49	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 いわゆる「有節沈線」により楕円形状の区画文を描く 三重状 の隆帯となる 工具は竹管を削って一端を尖らせた「ペン状」のもの これを重ねて多重化する	暗褐色 普	雲母 混入型	口縁片	中期前半 阿玉台 I b 式

中期後半～後期前半

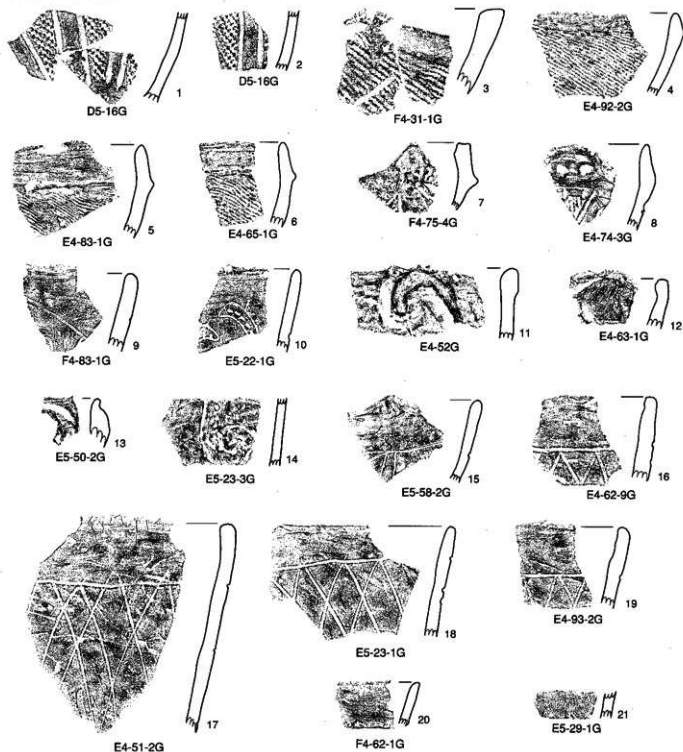


図 2-1-39 包含層遺物 中期後半～後期前半

表 2-1-14 包含層遺物観察表(中期後半～後期前半)

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	外面 「磨消懸垂文」である 地文として3段LRしを施し2本1組の懸垂文を描き面線内を磨消縄文とする 内面 ミガキ入る	◎暗褐色 ◎淡褐色 良	砂長石類 スコリア 粒含む	胴部片	中期後半 加曾利EⅡ式
2	縄文 深鉢	外面 「磨消懸垂文」である 地文として3段LRしを施し2本1組の懸垂文を描き面線内を磨消縄文とする 内面 ミガキ入る	◎暗褐色 ◎淡褐色 良	砂長石類 スコリア 粒含む	胴部片	中期後半 加曾利EⅡ式 1と同一個体

3	縄文 深鉢	口縁 波状(4単位) 外面 2段しR地文に微隆起線を貼付 内面 ミガキありか? (器面荒れている)	砂褐色色 赤褐色色 良	砂目立ち 長石類ス コリア縹 粒含む	口縁片	中期末葉 加曾利EIV式
4	縄文 深鉢	口縁 波状縁 外面 ミガキはいる 頸部 地文縄文に微隆起線を貼付する 胴部下端無筋し 内面 ケズリ後ミガキ	淡褐色色 良	細砂目立 ち長石類 赤色スコ リア縹粒 含む	口縁片	中期末葉 加曾利EIV式
5	縄文 深鉢	口縁 平縁か? 外面 地文に1段しを帯状に施文し微隆起線を貼付する この先後関係 は微隆起一縄文である 内面 ケズリ後軽くミガキ	淡褐色色 良	砂長石類 の粒子ス コリア縹 粒含む	口縁片	中期末葉 加曾利EIV式
6	縄文 深鉢	口縁 平縁か? 外面 地文に1段しを帯状に施文し微隆起線を貼付するこの先後関係 は微隆起一縄文である 内面 ケズリ後軽くミガキ	淡褐色色 良	細砂 長石類 の粒子ス コリア縹 粒含む	口縁片	中期末葉 加曾利EIV式 5と同一個体
7	縄文 深鉢	口縁 波状 C字状貼付(かなりダレている) 外面 沈線を描線とする意匠 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色色 良	細砂 長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
8	縄文 深鉢	口縁 波状縁 外面 沈線で意匠を描き列点を充填する 及孔を有する把手あり 内面 やや丁寧なミガキ	暗褐色色 良	細砂 長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
9	縄文 深鉢	口縁 波状縁 外面 沈線で意匠を描き列点を充填する 内面 丁寧なミガキ	橙褐色色 良	砂長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
10	縄文 深鉢	外面 沈線で意匠を描き浅く突き刺した列点を充填する 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色色 良	細砂 長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
11	縄文 深鉢	口縁 平縁に突起が付く 外面 C字状の貼付 内面 ケズリ後軽くミガキ	橙褐色色 良	細砂 長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
12	縄文 深鉢	口縁 小波状 外面 C字状の貼付 内面 ミガキ	茶褐色色 良	細砂スコ リア少量 長石類縹 粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
13	縄文 深鉢	口縁 小波状か? 外面 C字状の隆帯貼付 内面 ケズリ後ミガキ	砂茶褐色 赤褐色色 善	細砂スコ リア縹粒 目立つ	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
14	縄文 深鉢	外面 キザミを施した隆帯を垂下させ先端は開放せずに巻く 内面 ケズリ後ミガキ	暗褐色色 良	細砂スコ リア縹粒 含む	胴部片	後期初頭 称名寺式(新)
15	縄文 深鉢	口縁 小波状 外面 沈線による意匠を描く 内面 ケズリ後ミガキ	橙褐色色 良	砂長石類 赤色スコ リア縹粒 含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
16	縄文 深鉢	口縁 平縁あるいは小波状 外面 左下→右下の順で描く格子目文となる	暗赤褐色 良 堅緻	砂長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
17	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 格子目文を施文する 内面 ケズリ後軽くミガキ	橙褐色色 良 堅緻	砂目立ち 長石類赤 色スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺式(新)
18	縄文 深鉢	外面 格子目文を施文する 格子目は右下がり→左下がりの順で描き 最後に口縁下の沈線を引く 内面 ケズリ後軽くミガキ	赤褐色色 砂褐色色 良 堅緻	砂目立ち 長石類赤 色スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺(新) 16と同一個体
19	縄文 深鉢	口縁 平縁あるいは小波状 外面 左下から右下で描く格子目文となる	暗赤褐色 良 堅緻	砂長石類 スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺(新)
20	縄文 深鉢	口縁 平縁 外面 条線を施文 内面 ケズリあり	暗褐色色 良	細砂長石 類スコリア 縹粒含む	口縁片	後期初頭 称名寺(新)
21	縄文 深鉢	外面 条線を施文する(柳葉状ではなく竹管が原体) 内面 ケズリ後ミガキ	赤褐色色 赤褐色色 良 堅緻	細砂 長石類 スコリア 縹粒含む	胴部片	後期初頭 称名寺(新)

後期前半

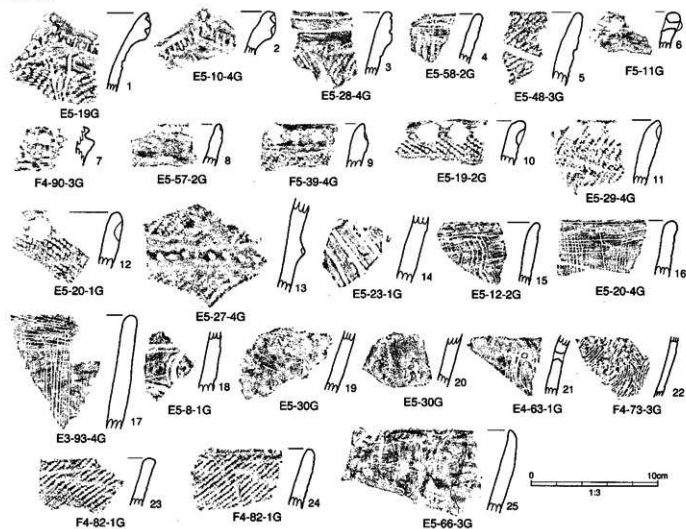


図 2-1-40 包含層遺物 後期前半

表 2-1-15 包含層遺物観察表(後期前半)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	口縁 波状(3単位~4単位) 波頂部に「8」の字文 外面 胴部~底部2段R L地文に懸垂文を引く 内面 ケズリ後ミガキ	黒褐色 茶褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
2	縄文 深鉢	口縁 波状(3単位~4単位) 外面 胴部~底部2段R L地文に懸垂文を引く 内面 ケズリ後ミガキ	黒褐色 茶褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式 1と同一個体
3	縄文 深鉢	口縁 波状 外面 L R地文に比喩で意匠を描く 内面 軽くミガキ	暗褐色 淡褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
4	縄文 深鉢	口縁 波状 外面 口縁~胴部~地文縄文に沈線による意匠 地文は1段しか 内面 口縁~胴部~ミガキ	暗褐色 橙褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
5	縄文 深鉢	口縁 波状で穿孔あり 外面 口縁~胴部~地文縄文に沈線 地文は2段L Rか	淡褐色 昏	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
6	縄文 深鉢	外面 波状口縁突起ないし把手を波頂部につける 内面 ミガキ	茶褐色 昏	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式

7	縄文 深鉢	口縁 波状 外面 粘土を貼付し、横位に「8」字状に突起をつなげる 内面 軽くミガキか	茶褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
8	縄文 深鉢	口縁 刺突列 内沈線 内面 軽くミガキ	橙褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
9	縄文 深鉢	外面 隆帯を一条貼付した口縁部文様帯は、指痕による盲孔列 地文は2段LR 内面 ナデ目立つ	暗褐色 青	砂粒 長石類 赤色スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
10	縄文 深鉢	口縁 平縁か 外面 地文は3段RLR 内面 軽くミガキ	橙褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
11	縄文 深鉢	外面 口縁—盲孔列をもつ 胴部下端—地文は0段多条のLR 内面 ケズリ後軽くミガキ	淡茶褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
12	縄文 深鉢	外面 口縁に盲孔列をもつ 胴部下端—地文3段RLR 内面 ミガキ	黒褐色 茶褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
13	縄文 深鉢	外面 地文は2段LR (0段多条) 隆帯を貼付し刺突列を施す 内面 縦位のミガキ	淡褐色 橙褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
14	縄文 深鉢	外面 太沈線による意匠を描く 内面 ケズリ後軽くミガキ	橙褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
15	縄文 深鉢	口縁下に1条の沈線を引く 称名寺式の遺制の器形 外面 条線を引く 内面 ミガキか	茶褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式 粘土帯にキザミ
16	縄文 深鉢	称名寺式の遺制の器形か 外面 多条化沈線による意匠 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
17	縄文 深鉢	称名寺式の遺制を引く器形 外面 多条化沈線をタテヨコで引く タテの沈線はある程度帯状に 施文されている 内面 ケズリ後ミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒		堀之内1式
18	縄文 深鉢	称名寺式の遺制を引く器形 外面 太(深)細(浅)の2本1組の沈線で意匠を描くもの 内面 ケズリ後ミガキ	淡黄褐色 良	砂粒 長石類 細粒	胴部片	堀之内1式 称名寺式か
19	縄文 深鉢	外面 指痕による器面調整(ナデあげ)が目立ち器面がめくれ上がっている この上に沈線を引く 沈線は細く浅い 内面 ヘラの調整あり この後ミガキ	茶褐色 橙褐色 良	細粒 赤色スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
20	縄文 深鉢	外面 指痕による器面調整(ナデあげ)が目立ち器面がめくれ上がっている この上に沈線を引く 沈線は細く浅い 内面 ヘラの調整あり この後ミガキ	茶褐色 橙褐色 良	細粒 赤色スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
21	縄文 深鉢	称名寺式の遺制を引く器形 外面 条線による意匠を描く 表からを主に表裏両側からの穿孔でい わゆる「桶修孔」 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
22	縄文 深鉢	外面 樂筒状工具による曲流文を施文 内面 ケズリ後ミガキ	茶褐色 暗褐色 青	砂粒 長石類 スコリア 細粒	胴部片	堀之内1式
23	縄文 深鉢	外面 2段LRが地文 内面 ミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式
24	縄文 深鉢	外面 2段LRが地文 内面 ミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式 23と同一個体
25	縄文 浅鉢	胴上半に最大径があり、口縁は内湾内傾気味の器形 外面 ケズリ少々軽くミガキ 内面 軽くミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	堀之内1式

後期中葉～後葉・晩期前半

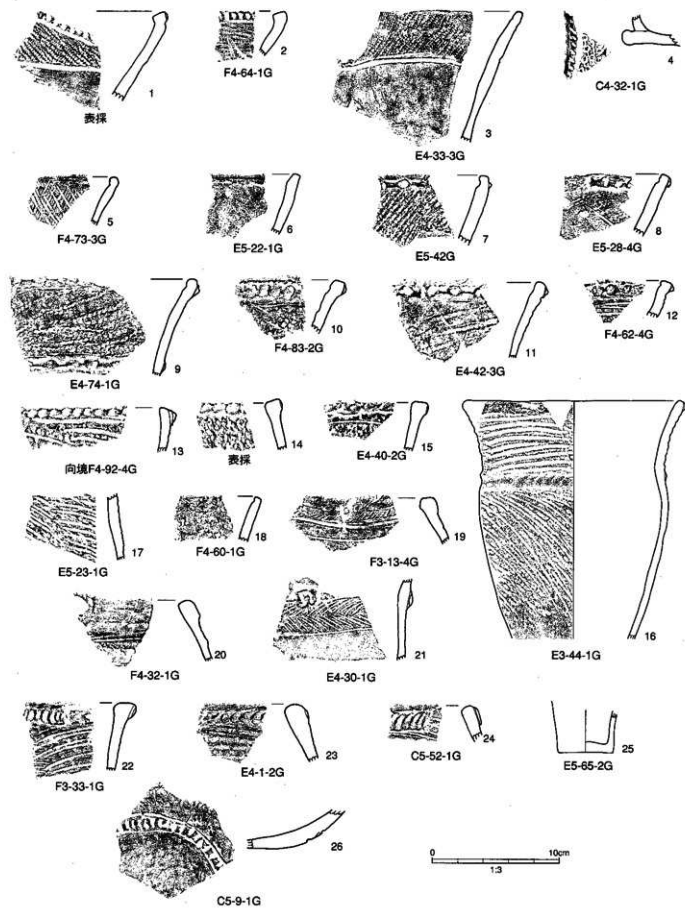


図 2-1-41 包含層遺物 後期中葉～後葉・晩期前半

表 2-1-16 包含層遺物観察表(後期中葉～後葉・晩期前半)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口徑×底徑×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 精製深鉢	口縁 波状 外面 口縁部文様帯は単段連続 頸部・胴部→磨耗縄文 内面 ミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	加曾利B3式か
2	縄文 精製深鉢	口縁 波状 外面 口縁部文様帯は単段連続 頸部文様帯→縄文施文 内面 器面完れており不明	暗褐色 普通	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	加曾利B3式
3	縄文 鉢または 浅鉢	外面 口縁→帯縄文 2段LR それ以外はよく研磨されている 内面 ヨコを中心とする密なヘラミガキ 口縁と頸部の間に浅い内沈線	淡褐色 良	細砂 長石類	口縁片	外面の一部に 黒斑 B2式か
4	縄文 釣手土器	釣手部はおそらく二手式 外面 円形竹管による刺突 縁はキザミ 内面 軽くミガキ	◎暗褐色 ◎淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	釣手 部片	加曾利B2式
5	縄文 深鉢	外面 左下→右下の順で格子目文を施文 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	加曾利B3式 「遠部第四期」 系
6	縄文 鉢または 浅鉢	外面 口縁→頸部→ヘラケズリのみ 内面 丁寧なミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	加曾利B3式
7	縄文 粗製深鉢	外面 口縁紐帯は指頸または工具で連続押圧する 施文工程は沈線で 区画→地文→紐帯貼付である 地文は2段LR 内面 ミガキ 内沈線	暗褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B1式 堀之内2式か
8	縄文 粗製深鉢	外面 口縁紐帯は指頸による連続圧痕 地文は縄文+条線 施文工程は地文→条(沈)線→紐帯貼付・押捺 地文は2段LR 内面 口縁直下に紐帯 ミガキ 内沈線	◎黒褐色 ◎淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B2式
9	縄文 粗製深鉢	外面 施文工程は縄文→紐帯→沈線→押圧 地文はLR 内面 口縁下に2～3mmの間において紐帯貼付 内沈線1条 ケズリ後軽くミガキ 胴中位からはやや丁寧なミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B2式
10	縄文 粗製深鉢	外面 紐帯指頸押圧 施文工程は縄文→紐帯→押圧→地文は2段LR の極めて太く粗いもの 内面 軽くミガキ 内沈線2条	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B2式
11	縄文 粗製深鉢	外面 口縁に紐帯貼付 頸部→地文 施文工程は縄文→条線→紐帯→ 押圧 地文は2段LR 内面 ケズリ後ミガキ 内沈線	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B2式
12	縄文 粗製深鉢	外面 口縁に紐帯を貼付し 密な指頸押圧 頸部→地文→条線(ヨコ) 施文工程は縄文→条線→紐帯→押圧 内面 ミガキ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B2式
13	縄文 粗製深鉢	外面 縄文+条線 施文工程は縄文→条線→紐帯→押圧 内面 ミガキあり	暗赤褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B3式
14	縄文 粗製深鉢	外面 口縁に紐帯を貼付して押圧 施文工程は縄文→紐帯→押圧 地文は2段RLの撚りの粗いもの 本例は条線のリダクション型 内面 軽くミガキ	◎暗褐色 ◎灰褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B3式
15	縄文 深鉢	外面 口縁に紐帯を貼付して押圧 施文工程は縄文→条線→紐帯→押圧 地文はLR 原体は粗い 内面 ミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコ リア細粒	口縁片	紐線文系 加曾利B3式か
16	縄文 深鉢	頸部に括れを持ち口縁開く 胴上部が張る 外面 口縁・頸部→押圧を加えた隆帯 地文の縄文を擦消 口縁には 横位、頸部には斜位の条線文を施文 内面 丁寧な研磨	暗褐色 良	砂粒	1/3	紐線文形 曾谷式か
17	縄文 深鉢	外面 地文縄文に条線 地文はLR 内面 ミガキ	茶褐色 良	細砂	胴部片	紐線文系 加曾利B3式

18	縄文 粗製深鉢	外面 口縁・頸部一地文縄文(2段LR) 内面 ミガキか 内沈線1条	暗褐色 青	砂粒 長石類 赤色スコ リア細粒	口縁片	縄文系粗製深鉢
19	縄文 土器	外面 磨消縄文 いわゆる「隆起帯縄文」を施す 縄文はLR 内面 ケズリ後軽くミガキ	茶褐色 良			隆起縄文を施す 精製土器
20	縄文 深鉢	外面 口縁・頸部一磨消縄文 いわゆる「隆起帯縄文」を施す 縄文はRL 内面 ケズリ後軽くミガキ	橙褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコ リア含む	口縁片	
21	縄文 深鉢	外面 双刺押瘤を起点に文様し帯 頸部に旋杉文を施す 内面 ナデ	淡暗褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒	胴部片	
22	縄文 深鉢	外面 施文工程は条線→紐帯貼付→押圧 内面 ケズリ後ナデ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒		紐線文系 粗製土
23	縄文 粗製深鉢	外面 施文工程は条線→紐帯→押圧である 内面 ケズリか	橙褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒		
24	縄文 粗製深鉢	外面 施文工程は条線→紐線→押圧 紐帯の一部が剥落しており下の条 線が見える 内面 軽くミガキ	淡茶褐色 良	砂粒 長石類 赤色スコ リア細粒		
25	縄文 深鉢	外面 胴部・底部→ケズリ後ミガキケズリ後ミガキ 内面 胴部→ケズリ後密なミガキ 底部→ケズリ後ナデ	淡褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒		
26	縄文 皿	外面 底部→ケズリ後ミガキ 内面 底部→ケズリ後密軽くミガキ	灰褐色 良	砂粒 長石類 スコリア 細粒		

2 石器

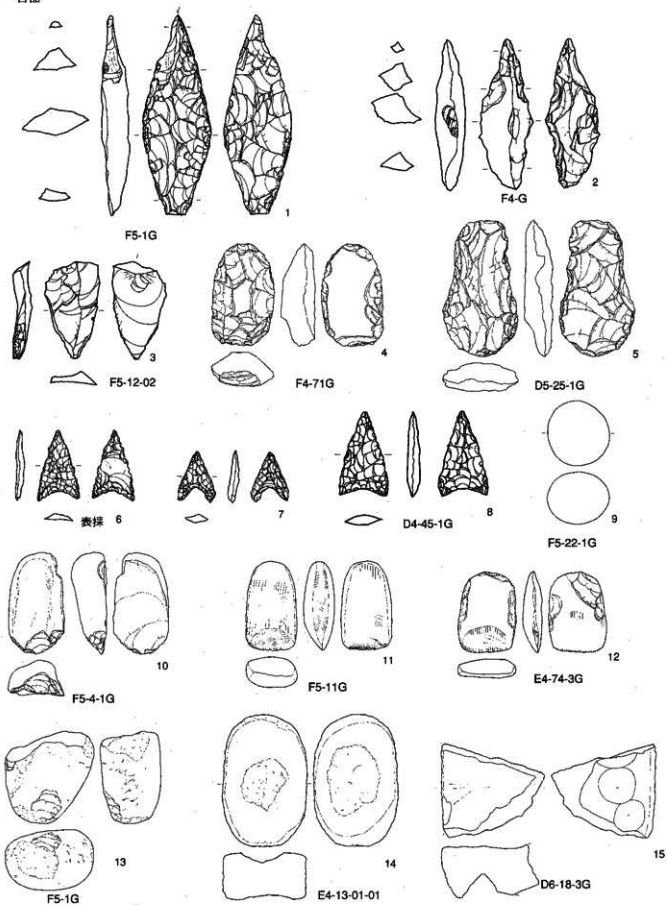


图 2-1-42 包含层遗物 石器

表 2-1-17 包含層遺物観察表(石器)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 有種 尖頭器	79.5×21.5×10.0 頁岩 重量17.8g				旧石器時代 F5-1G
2	石器 尖頭器	59.0×20.5×11.5 ガラス質黒色安山岩 重量11.8g				旧石器時代 2-43-12
3	石器 ナイフ形 石器	39.5×18.5×6.5 頁岩 重量4.6g				旧石器時代 F5-12G
4	石器 打製石斧	81.5×48.5×26.0 流紋岩 重量130.3g				礫斧に近い F4-71G
5	石器 打製石斧	108.5×58.5×22.5 ホルンフェルス 重量153.6g				換形 D5-25-1G
6	石器 石鏃	19.5×14.5×3.5 チャート 重量0.8g				無茎凹基式 2-43-11
7	石器 石鏃	28.5×16.5×3.0 チャート 重量1.2g				無茎凹基式 表採
8	石器 石鏃	22.5×12.5×3.5 チャート 重量0.8g				無茎凹基式 D4-45-1G
9	石器 磨石	48.5×51.5×41.5 砂岩 重量134.5g				球形 F5-22-1G
10	石器 打製石斧	80.0×44.0×28.0 砂岩? 重量115.8g				表面は節理面 F5-4-1G
11	石器 磨製石斧	64.0×45.5×15.0 ホルンフェルス 重量64.5g				礫斧 E4-74-3G
12	石器 磨製石斧	71.0×40.5×24.0 安山岩 重量107.7g				刃部片刃状 F5-11G
13	石器 敲石	73.5×70.0×42.5 流紋岩 重量308.0g				ハンマーか F5-11G
14	石器 凹石	105.0×66.5×36.5 砂岩 重量415.0g				磨石でもある E4-13G
15	石器 石皿	82.0×75.0×40.5 安山岩 重量195.1g				凹石としても 利用 D6-18-3G

第2節 弥生時代

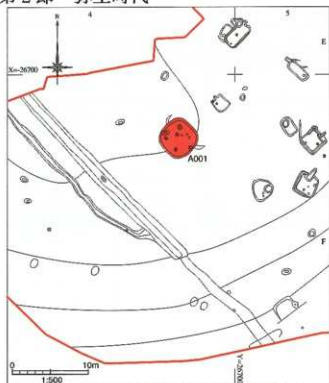


図2-2-1 向境遺跡弥生時代遺構配置図

向境遺跡における弥生時代の概要は、後期の竪穴住居跡が1軒検出されたのみである。他には、遺構外出土遺物が少量出土しているに過ぎず、弥生時代の遺構、遺物の全体から占める比率は低いと言える。

以下、個別の遺構についての報告に移る。計測値等の詳細については、適宜、一覧表等にまとめたので、併せて参照されたい。

(1) 竪穴住居跡

A001

検出地区 F4-91G。台地縁辺部に立地する。縄文時代の遺物包含層区域に位置し、周辺に弥生時代の遺構は無く孤立して立地する。

遺構 中型の隅丸方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1～P4と考えられる。炉は地床炉で住居跡中央からやや北壁による。床はロームを踏み固めた床で、

硬化面を一部で検出している。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に19層に分層。自然堆積による埋没が考えられるが、大きく2時期程度の埋没のピークがあったと思われる。

遺物 床面直上から覆土中層にかけて弥生土器を中心に出土。1は住居跡北隅の集中的に出土した。床面直上層から覆土上層にかけての出土で、住居跡埋没時の流れ込みによるものと思われる。印旛沼周囲の特有の弥生後期土器で、輪積痕系の壺形土器である。また、覆土中出土遺物として、縄文土器、石器がやや目立つ。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

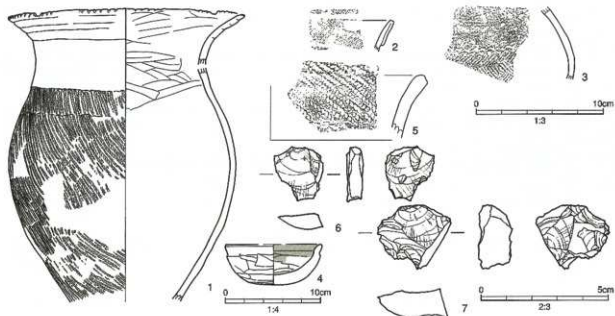
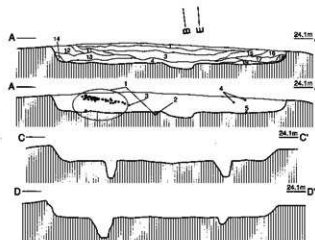
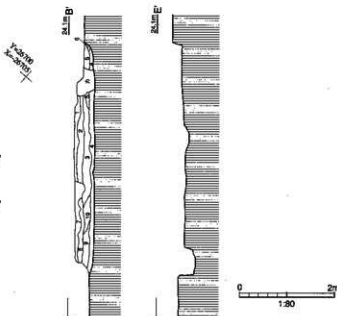
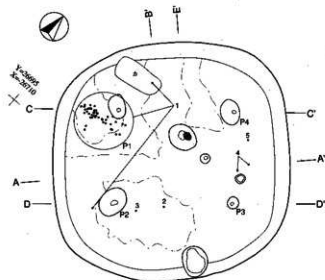


図2-2-2 A001



1層	暗褐色土	普通	普通	ローム小ブロック	ローム粒多
2層	黒褐色土	やや弱い	普通	ローム粒多	
3層	暗褐色土	普通	普通	黒褐色土多	ローム粒やや多
4層	褐色土	普通	普通	にぶいローム多	
5層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム主体	
6層	褐色土	普通	普通	にぶいローム主体	
7層	暗褐色土	普通	普通	黒色土多	ローム粒
8層	黒褐色土	普通	普通	ローム粒少	
9層	暗褐色土	普通	普通	ソフトローム	
10層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック多	褐色土少
11層	暗褐色土	普通	普通	黒色土多	
12層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームやや多	
13層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロックと暗褐色土が混	
14層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム多	
15層	暗褐色土	普通	普通	黒色土やや多	
17層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム粒	にぶいローム
18層	褐色土	普通	普通	にぶいローム	
19層	暗褐色土	やや強い	やや強い	にぶいローム粒多	

表 2-2-1 A001遺物観察表

図 2-2-3 A001(2)

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 調成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	250×-×(313) 口縁外反 胴やや上半に膨らみをもつ 外面 口唇-刻み目 口縁-輪積痕 頸部-ナア 胴部-附加糸縄文 内面 口縁-ヘラナア 全体-輪積み	暗褐色 赤	砂粒	1/2	外面 コケ状付着物
2	弥生 甕	折り返し口縁 外面-口唇とも附加糸縄文 内面-ナア	暗褐色 青	砂粒	口縁片	
3	弥生 甕	外面-胴部 上半-ナア 下半-結節2段 下端-羽状縄文 内面-ナア	褐色 青	粗砂粒	胴部片	
4	土師器 坏	(105)×-×43 口縁外反 口縁と体部の境に稜 外面 口縁-ヨコナア 胴部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナア 胴部-ヘラナア	橙褐色 良	砂粒 雲母	2/3	口縁部 内面 ケール状付着物
5	縄文 深鉢	口縁外反 口唇やや厚みをもつ 口縁 口唇とも縄文施文 内面磨かれる	褐色 良	砂粒 雲母	口縁片	
6	石器 黒曜石	22×19×6 2.3g 小型の割片を素材としたリタッチド・フレイク 腹面側谷側縁下方に部分的な二次加工が施される			完形	
7	石器 黒曜石	26×29×12 7.7g リタッチド・フレイク? 先端部に折断面があり、二次加工が加えられている			完形	

表 2-2-2 弥生時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	発掘施設・位置 周溝・備考
A001	F4-91G	隅丸方形5.6×4.96×0.34 N-41°-W 床面直上から覆土中層にかけて出土	床面 ロームを踏み固めた床で一部で硬化面を検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる 色調を基本的に19層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	地床炉 住居跡中央から北壁による 周溝は検出されない 主柱穴4本(P1~P4)

(2) 遺構外出土遺物

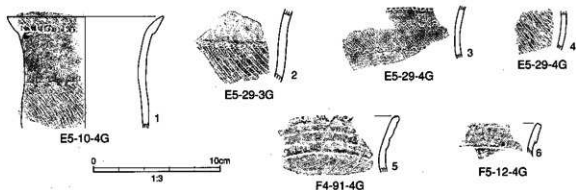


図 2-2-4 遺構外出土遺物

表 2-2-3 弥生時代遺構外出土遺物観察表

(単位mm)

%	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	外面 口縁外反 折り返しによる複合口縁 付加条縄文を施した後、口縁 下端を刺突 頸部-無文 胴部-付加条縄文 内面 ミガキ	①黒褐 ②褐 良	砂粒	口縁~ 胴部片	
2	弥生 甕	頸部-無文 胴部-付加条縄文	①黒褐 ②褐 良	砂粒	胴部~ 胴部片	外面タール付着
3	弥生 甕	S字状結節による区画をし、区画内R.L.単節縄文斜縄文を充填し文様帯 を構成。文様帯上下部には無文帯。上部無文帯はさらにS字状結節文で 区画される。	①褐 良	砂粒	胴部片	
4	弥生 甕	外面-付加条縄文 内面-ミガキ	①暗褐 ②褐 良	砂粒	胴部片	
5	弥生 甕	外面 口唇-キザミ 口縁-外反 和積痕4段 頸部-無文 内面 ナア	①淡褐 良	砂粒	口縁片	
6	弥生 甕	外面 口縁-外反 折り返しによる複合口縁 口縁、口唇ともにLR単 節斜縄文 内面 ミガキ	①暗褐 良	緻密	口縁片	

第3節 古墳時代

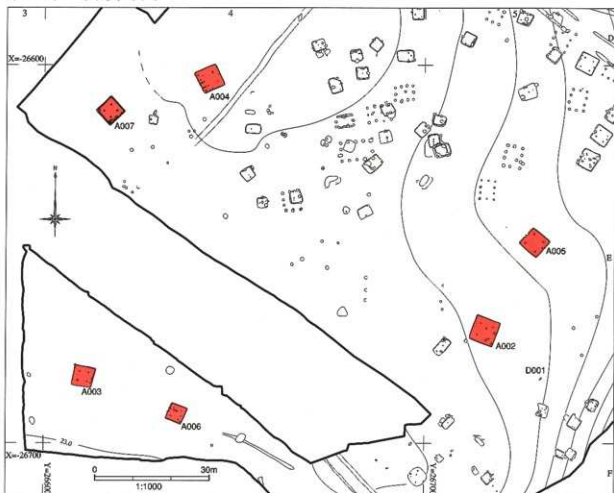


図 2-3-1 向境遺跡古墳時代遺構配置図

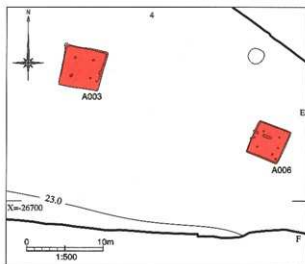


図 2-3-2 向境遺跡古墳時代遺構配置図(2)

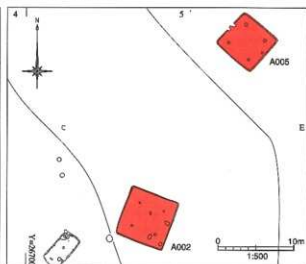


図 2-3-3 向境遺跡古墳時代遺構配置図(3)

向境遺跡における古墳時代の概要は、竪穴住居跡が6軒、土坑1基が検出された。その内訳は中期の竪穴住居跡が2軒、後期の竪穴住居跡が4軒、土坑1基である。立地としては、調査区南側及び西側の台地平坦面に散在するように立地し、遺構密度としてはそれほど高くない。

以下、個別の遺構についての報告に移る。計測値等の詳細については、適宜、一覧表等にまとめたので、併せて参照されたい。

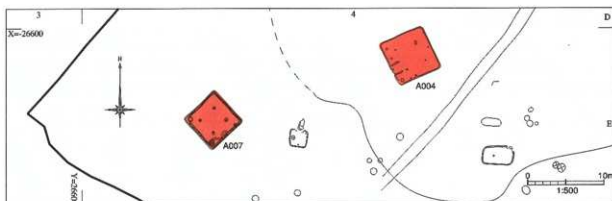


図 2-3-4 向境遺跡古墳時代遺構配置図(4)

(1) 竪穴住居跡

A002

検出地区 E5-17G。台地平坦部に立地する。約100m西方に古墳時代中期の住居跡としてA003がある。周辺遺構としては、古墳時代後期の住居跡としてA004が、奈良時代の遺構としてA023がある。

遺 構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP 1～P 4と考えられる。P 5は貯蔵穴で、P 6は出入り口施設と考えられる。P 7は、深さ15cmの平底のピットであるが、用途は不明である。炉は地床炉で住居跡中央から南東コーナーにより、柱穴を結ぶラインより外側に位置している。明瞭な火床を検出している。床はロームを踏み固めたしっかりした床である。壁もロームの壁では垂直に立ち上がる。周溝は全周する。

覆土は、色調を基本に20層に分層。床面直上にて焼土を一部検出しているが、おおむね自然堆積による埋没が考えられる。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて比較的多く出土している。中心は古墳時代の土師器片であるが、覆土中からは縄文時代～奈良・平安時代に至るまでの遺物が各少量出土している。

所 見 出土遺物と全体の出土状況等から、古墳時代中期の竪穴住居跡と判断した。炉の位置が著しく壁際によっていることも竈出現前夜の状況を反映しているものと思われる。

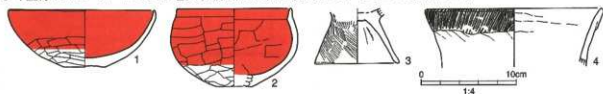
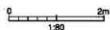
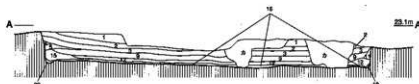
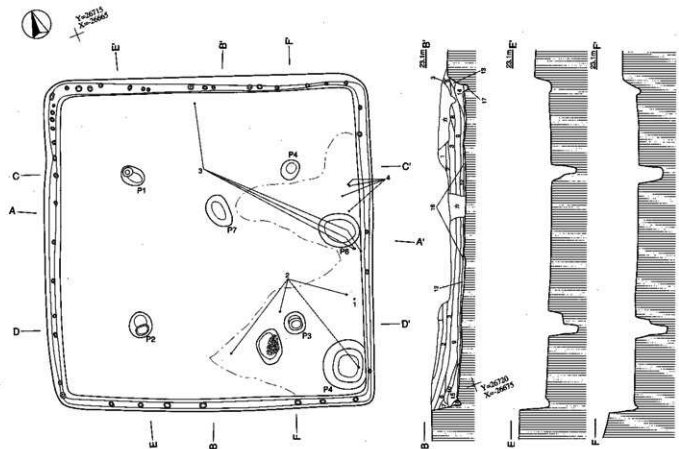


図 2-3-5 A002

表 2-3-1 A002遺物観察表

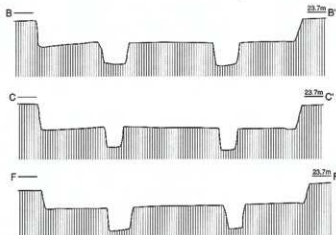
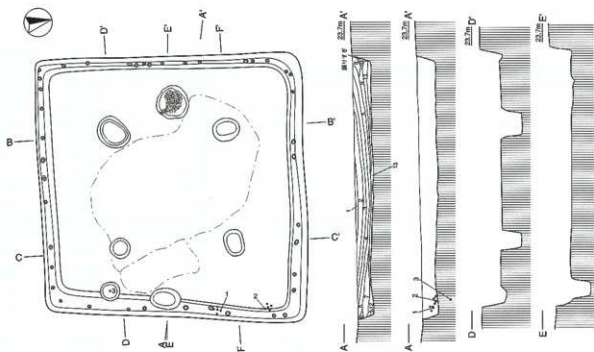
(単位mm)

No	種別 器形	量 数	口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 外面 ヨコナデ 内面 全体ヘラナデ	154×40×62	古墳 口縁やや内湾 外面スス付着 体部下半～底部ヘラケズリ 全体輪襷	橙褐色	砂粒 小石	2/3	赤彩 外面 体部上半 内面
2	土師器 鉢 外面 口縁～ヨコナデ 内面 口縁～ヨコナデ	(120)×(36)×83	古墳 頸部～底部ヘラケズリ 頸部～底部ヘラナデ	橙褐色	砂粒多	1/2	赤彩 外面 口縁～胴中位 内面 全面
3	土師器 台付甕 脚部 外面 ハケ 内面 ヘラナデ	一×脚台形88×(59)	古墳 「ハ」の字状	① 暗橙褐色 ② 暗茶褐色	砂粒含	2/3	
4	弥生 甕 外面 口縁、口唇とも附加糸縄文 内面 口縁ヘラナデ	(184)×一×(62)	弥生 折り返し口縁 輪襷み 頸部ヘラナデ	暗褐色 橙褐色 黒褐色	砂粒含	口縁片	



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土多
2層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
3層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
4層	暗黄褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ローム
5層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
6層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土主体 褐色土多
7層	暗黄褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ローム
8層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
9層	黒褐色土	やや強い	有り	黒褐色土 褐色土多
10層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
11層	暗黄褐色土	やや強い	有り	暗褐色土 ローム
12層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土多
13層	暗黄褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ローム
14層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体
15層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
16層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体
17層	黄褐色土	弱い	有り	ロームアロック主体
18層	褐色土	弱い	有り	暗褐色土七少 ローム主体
19層	黄褐色土	弱い	有り	暗褐色土少 ローム主体
20層	黄褐色土	弱い	有り	黒褐色土少 ロームアロック主体 暗褐色土少

図 2-3-6 A002(2)



層	土質	粘性	しまり
1層	暗褐色土	やや強い	強い
2層	黒褐色土	やや強い	強い
3層	黒褐色土	やや強い	強い
4層	黒褐色土	やや強い	強い
5層	黒褐色土	やや強い	強い
6層	暗褐色土	やや強い	強い
7層	暗褐色土	やや強い	強い
8層	褐色土	やや強い	強い
9層	黒褐色土	やや強い	強い
10層	暗黄褐色土	やや強い	強い
11層	暗褐色土	やや強い	強い
12層	黒褐色土	やや強い	強い
13層	暗褐色土	やや強い	強い

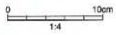
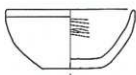
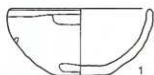
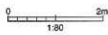


図 2-3-7 A003

表 2-3-2 A003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 調 焼 成	胎 土	通 存	備 考
1	土師器 坏	(154)×55×(70) 外面 口縁ナデ割部上半ヘラケズリ 底部 静止ヘラ切り	褐色 普	普	略完形	磁鉢か?
2	土師器 鉢	(138)×60×(62) 外面 口縁ナデ 内面 ミガキ	褐色 普	普	略完形	鹿書 釈文「×」 底部外面
3	土師器 鉢	(160)×(38)×55 ロクロ成形 外面 口縁ナデ 胴部ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	赤褐色 普	普	1/2	赤彩
4	土師器 坏	(132)×-×- ロクロ成形 外面 下縁ヘラケズリ	褐色 普	普	1/4	墨書 体部外面
5	土師器 高台付皿	ロクロ成形 底部 ヘラケズリ	橙褐色 普	普	底部片	
6	有孔円盤	材質 滑石	灰色			

A003

検出地区 E4-9G。台地平坦部に立地する。約100m東方に古墳時代中期の住居跡としてA003がある。周辺遺構としては、古墳時代後期の住居跡としてA006がある。

遺 構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1～P4と考えられる。P5は貯蔵穴で、P6は出入り口施設と考えられる。主軸がほぼ90°西にふれている状態である。炉は地床炉で住居跡中央から西壁際により、柱穴を結ぶラインより外側に位置している。明瞭な火床を検出している。床はロームを踏み固めたしっかりした床である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。

覆土は、色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が考えられる。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。滑石製の石製模造品が出土している。中心は古墳時代の土師器片であるが、覆土中からは縄文時代～奈良・平安時代に至るまでの遺物が各少量出土している。

所 見 出土遺物とから、古墳時代中期の竪穴住居跡と判断した。A002同様、炉の位置が著しく壁際によっていることも竈出現前夜の状況を反映しているものと思われる。

A004

検出地区 E4-11G。台地平坦部に立地する。約20m西方に古墳時代後期の住居跡としてA007がある。その他の古墳時代後期の住居跡としては、やや地点を異にしてA005・A006がある。

遺 構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1～P4と考えられる。P5は貯蔵穴で、P6は出入り口施設と考えられる。床はロームを踏み固めたしっかりした床である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

竈は住居跡東壁南寄りに位置する。煙道は壁を僅かに切り込む程度のもので急傾斜で立ち上がる。袖は片方が僅かに残る程度であった。天井部は平面、断面ともに現れず、恐らく住居跡廃絶時に壊されたものと考えられる。明瞭な火床を検出し、両脇に溝を検出した。竈導入時における特殊な形態かと思われる。周溝は、竈以外の部分で全周する。

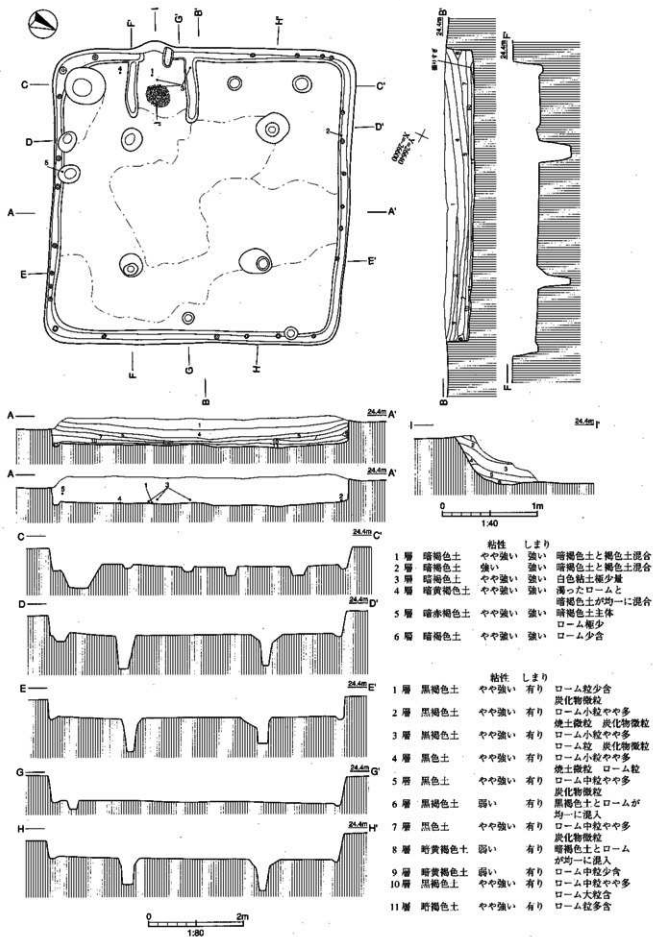


図 2-3-8 A004

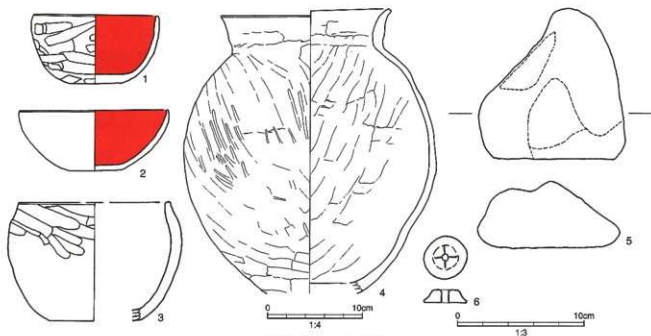


図 2-3-9 A004(2)

表 2-3-3 A004遺物観察表

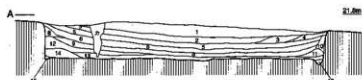
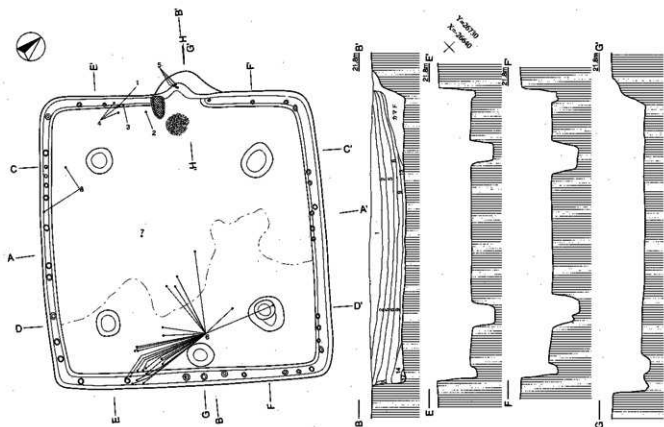
(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	全体 ロクロ成形 口縁 ナデ 外面 胴部上半～下半横位のヘラケズリ 底部 静止ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキ	砂橙褐色 赤褐色	普	完形	赤彩内面
2	土師器 鉢	全体 ロクロ成形 口縁 やや内湾気味 外面 横位のヘラケズリの後ヘラミガキ 底部 静止ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキを施す	赤褐色 普	普	完形	赤彩
3	土師器 鉢	全体 ロクロ成形 口縁 内湾する 外面 雑なヘラケズリ	橙褐色 悪	粗	1/3	全体的に器面未調整のまま焼成
4	土師器 甕	177×-×(302) 口縁は頸部より直線的に立ち上がり上端でやや外反胴部楕円形 外面 口縁ヨコナデ頸部ヘラナデ胴部ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 内面 口縁ヨコナデ 胴部胴部上半ヘラナデ	橙褐色 良	粗砂流	略完形	黒斑有 外面スス付着
5	石製品 金床石	平面断面三角形	灰色			
6	石製品 紡錘車	上面下面は丁寧な研磨され側面には細かな擦痕(加工痕)を残す	緑灰色		完形	

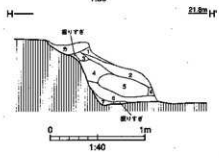
覆土は、色調を基本に11層に分層。おおむね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上から覆土下層及び覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物と遺構の形態等から、古墳時代中期～後期にかけての竪穴住居跡と判断した。A003と比較すると出土遺物の様相が近似しているが、住居跡に目を向けると竈の有無の相違が現れ、竈導入時の様相を考える上で注目される。



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	黒褐色土	やや強い	有り	黒色土主体 褐色土少
2層	黒暗褐色土	やや強い	有り	黒褐色土主体 褐色土多
3層	暗褐色土	やや強い	有り	黒褐色土主体 褐色土多 ローム中粒多 黒褐色土少
4層	黒褐色土	やや強い	有り	黒色土主体 褐色土多 褐色土少粒 炭粒散点
5層	黒褐色土	やや強い	有り	黒色土主体 褐色土多
6層	黒褐色土	やや強い	有り	黒色土主体 褐色土多
7層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ロームブロック
8層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ロームブロック ローム中粒多
9層	黒褐色土	やや強い	有り	黒褐色土主体 褐色土多
10層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土主体 ローム少
11層	黒褐色土	弱い	有り	黒褐色土主体 褐色土少
12層	黒褐色土	弱い	有り	黒色土主体
13層	暗褐色土	やや強い	有り	暗褐色土主体 褐色土少
14層	黒褐色土	やや強い	有り	黒褐色土主体
15層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土主体 ロームブロック少
16層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土 ロームブロック
17層	暗褐色土	弱い	有り	暗褐色土主体 濁ったローム少 ローム中粒少
18層	暗灰褐色土	強い	有り	暗褐色土 白色粘土多
19層	暗灰褐色土	強い	有り	白色粘土主体
20層	黒色土	やや強い	有り	黒色土主体



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	黒褐色土	やや強い	強い	黒褐色土主体 ローム微粒散点
2層	暗褐色土	やや強い	強い	黒褐色土主体 濁った白色粘土
3層	暗褐色土	やや強い	強い	黒褐色土 濁ったローム少
4層	暗灰褐色土	やや強い	強い	濁ったローム少 濁った白色粘土 暗褐色土
5層	暗灰褐色土	やや強い	強い	濁った白色粘土 暗褐色土 褐色土
6層	黒灰褐色土	やや強い	強い	黒色土 濁ったローム 濁った白色粘土
7層	暗褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濁ったローム少

図 2-3-10 A005

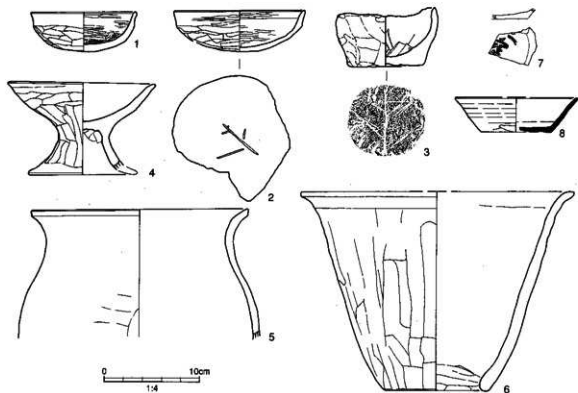


図 2-3-11 A005(2)

表 2-3-4 A005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	112×-×42 口縁やや外反 内面 口縁-ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部-ヘラナデ後ヘラミガキ 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヘラケズリ	暗褐色 良	砂粒 雲母	2/3	
2	土師器 坏	(140)×-×44 内面 口縁-ヨコナデ後疎らにヘラミガキ 胴部・底部-ヘラケズリ 外面 口縁-ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部・底部-ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	2/3	底部外面 木葉痕
3	土師器 鉢	104×83×62 外面 ヘラケズリ及び指によるナデ 内面 ヘラ及び指によるナデ	橙褐色 良	砂粒 雲母	4/5	底部 木葉痕
4	土師器 高坏	156×(116)×100 口縁やや外反 接合部太く低い脚部 外面 口縁-ヨコナデ 体部上半-ヨコヘラケズリ 体部下半・脚部-タテヘラケズリ 裾部-ヨコナデ 内面 口縁-ヨコナデ 体部-ヘラナデ 脚部-ヘラケズリ 裾部-ヨコナデ	橙褐色 良	砂粒 雲母	4/5	内面 タール状 付着物有
5	土師器 甕	(230)×-×(135) 口縁受け口状 内面 ヨコナデ 輪積み 外面 口縁・胴部-ヨコナデ 胴部上半-ヘラナデ	褐色 普	砂粒 雲母多	口縁片	
6	土師器 瓶	(290)×(110)×213 輪積み 口縁外反 鉢垂 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヘラケズリ 内面 ナデ 底部-ヘラケズリ	砂赤褐色 砂暗褐色 普	砂粒	1/3	
7	土師器 坏	-×-×- 外面-ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒多	底部片	底部外面 墨密□ 内面スス付着
8	須恵器	(130)×(73)×37 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ	灰色 普	砂粒 小石	1/6	

A005

検出地区 E5-25G。台地平坦部に立地する。約20m南方に古墳時代中期の住居跡としてA002がある。周辺の古墳時代後期の住居跡としては、やや地点を異にしてA006・A007がある。

遺構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1～P4と考えられる。P5は出入り口施設と考えられる。床はローンを踏み固めたしっかりした床である。壁もローンの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

竈は住居跡西壁ほぼ中央に位置する。煙道は壁を僅かに切り込んでおり、斜めに直線的に立ち上がる。袖は片方が僅かに残る程度であった。天井部は竈セクション5層が相当し、片袖のみが残存していたことと考えあわせれば、竈は、住居跡廃絶時に人為的に破壊されたと考えられる。明瞭な火床を検出している。周溝は、竈以外の部分で全周する。

覆土は、色調を基本に2層に分層。一部で焼土を検出しているが、恐らくは、住居跡廃絶時に伴うもので、廃絶後は、おおむね自然堆積による埋没が考えられる。A005に見られる、住居跡廃絶時の状況及びその後の埋没過程については、向境遺跡の古墳時代の住居、A006・A007に共通して看取できる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。竈付近の床面直上から支脚が倒れて出土している。また、覆土中から奈良・平安時代の土師器、須恵器も少量出土している。(7)は、土師器環形土器で墨書土器である。破片の為、釈文は尚、慎重にならねばならないが、或いは「三宝」か。

所見 出土遺物と全体の出土状態から、古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。

A006

検出地区 E4-40G。台地平坦部に立地する。約20m西方に古墳時代中期の住居跡としてA003がある。周辺の古墳時代後期の住居跡としては、やや地点を異にしてA005・A007がある。

遺構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1～P4と考えられる。P5は貯蔵穴と考えられる。P6は出入り口施設と考えられる。床はローンを踏み固めたしっかりした床である。出入り口施設付近で、硬化面を検出している。壁もローンの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

竈は住居跡西壁ほぼ中央に位置する。煙道は壁を僅かに切り込んでおり、斜めに直線的に立ち上がる。袖は片方が僅かに残る程度であった。天井部は平面、断面ともに検出されず、竈は住居跡廃絶時に壊されたものと考えられる。明瞭な火床を検出している。周溝は竈下を通り全周する。

覆土は、色調を基本に2層に分層。壁際で多量の焼土を検出。住居跡廃絶時に火を焚いたものと考えられる。その後は、おおむね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量に出土。(8)は竈内から倒立した状態で出土。支脚として使用されていたものと考えられる。また、貯蔵穴(P6)付近から、完形レベルの土器(1)・(3)・(4)・(5)・(6)・(10)が集中して出土している。

所見 出土遺物と全体の出土状態、遺構の形状等から、古墳時代後期の竪穴住居跡と判断した。古墳時代後期的な須恵器の模倣坏である(1)・(2)と、古墳時代中期的な椀形土器(3)～(7)及び(9)が共伴していることは興味深い。古墳時代中期であれば末期、古墳時代後期であれば初頭に位置づけられるだろう。多量の焼土を検出しているが、竈が壊されていた状況を踏まえると、失火では無く、住居跡廃絶に伴い、火を焚いたと考えられる。

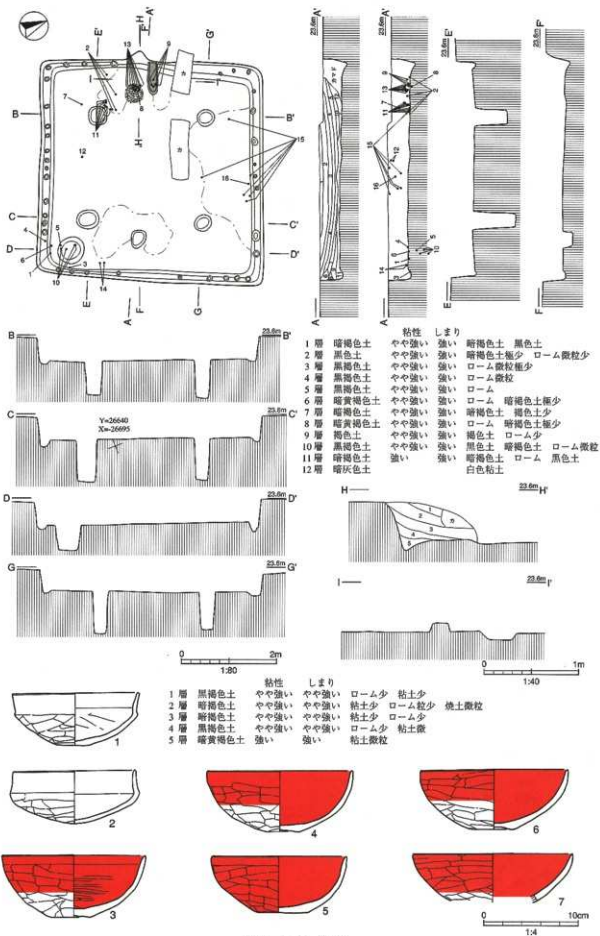


図 2-3-12 A006

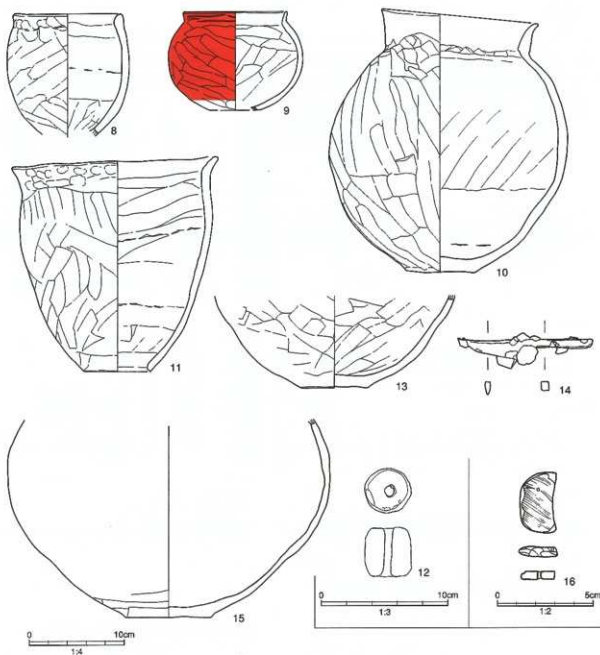


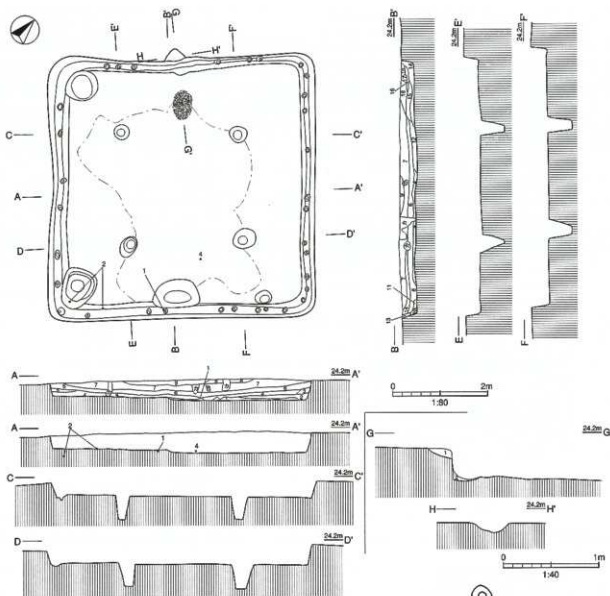
図 2-3-13 A006(2)

表 2-3-5 A006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	133×-×56 口縁と体部の境に稜を持つ 口縁やや外傾 外面 口縁-ヨコナデ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナデ 頸部-底部-ヘラケズリ	暗赤褐 青	砂粒多	略完形	
2	土師器 杯	(128)×-×56 縁と体部の境に稜を持つ 口縁やや内湾 輪積み 外面 口縁-ヨコナデ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヘラナデ	暗橙褐 青	砂粒少	1/2	
3	土師器 碗	150×42×66 輪積み 外面 口縁-ヨコナデ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナデ 頸部-底部-ヘラナデ後ヘラミガキ	橙褐 良	砂粒	完形	赤彩 外面 体部上半 内面 全面

4	土師器 罎	155×37×65 器面摩耗のため、はっきりせず 外面 口縁-ヨコナテ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナテ 頸部-胴部-ヘラナテ	橙褐色	砂粒多	完形	赤彩 ⑤体部上半 ⑥全面
5	土師器 罎	142×50×60 輪積み 外面 口縁-ヨコナテ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナテ 頸部-胴部-ヘラナテ? 器面ひび割れ	橙褐色	砂粒多	完形	
6	土師器 罎	155×45×63 口縁やや内湾 輪積み 外面 口縁-胴下半・底部中央-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナテ 胴部-ヘラナテ? 器面剥離	橙褐色	砂粒	略完形	赤彩 ⑤体部上半 ⑥全面
7	土師器 罎	168×-×(52) 口縁やや内湾 輪積み 外面 口縁-胴上半-ヘラケズリ 内面 口縁-胴上半-ヨコナテ+ヘラナテ	橙褐色 良	砂粒	口縁- 体部片	赤彩 ⑤体部上半 ⑥全面
8	土師器 小型甕	116×-×(132) 長胴で厚手の作り 輪積み 外面 胴部-ヘラケズリ後ナテ 内面 胴上半-ヨコナテ 下半-ヘラナテ	橙褐色 良	砂粒 雲母	略完形	
9	土師器 小型甕	(112)×(52)×(105) 最大径144 (胴部) 球形型を呈する 輪積み 外面 口縁-ヘラナテ 頸部-底部-ヘラケズリ 内面 全体ヘラナテ	暗橙褐色 良	砂粒 雲母	2/3	赤彩 ⑤口縁-胴下半
10	土師器 甕	167×70×283 最大径252 (胴部) 直口縁 やや歪んだ丸胴 輪積み 外面 口縁-ヨコナテ 胴部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナテ 胴部-ヘラナテ	橙褐色 良	砂粒多	完形	
11	土師器 甕	220×71×230 口縁外反 鉢形 輪積み 外面 口縁-指頭任痕 胴部-ヘラケズリ後ヘラナテ 内面 口縁-ヨコナテ 胴部-ヘラナテ	橙褐色 良	砂粒	略完形	
12	土製品 土鉢	長さ39×最大幅37×孔径6 厚手の作り。孔は上面から下面に向かって斜めに穿たれる。 ナテ調整。上・下面は平滑に仕上げられている。			完形	
13	土師器 甕	-×72×(98) 輪積み 外面 ヘラケズリ後ナテ 内面 ヘラナテ	⑤暗橙褐色 ⑥橙褐色 普	砂粒 雲母	底部片	⑤スス付着
14	鉄製品 刀子	71×4 -×2.5				
15	弥生 壺	-×90×(212) 輪積み 外面 胴部下端-ヘラケズリ 内外面ともに器面剥離著しく、詳細不明	橙褐色 悪	砂粒 雲母	胴部- 底部片	
16	古墳 滑石製 模造品	材質 滑石	灰色			



層	しまり	粘性	説明
1層	黄褐色土	粘性	焼土主体の層で1cm大のハードロームブロックを少量含む
2層	黄褐色土	やや有り	ローム粒やや多量
3層	暗褐色土	やや有り	1cm大の焼土主体の層であり若干ロームが混じる
4層	暗褐色土	やや有り	1~5mm大の焼土粒子や5mm大の炭化材を含む
5層	暗褐色土	やや有り	微細な焼土粒子や炭化材を少量含む シミ状にローム混
6層	暗褐色土	やや有り	焼土粒子の量と大きさは4層に準ずる
7層	暗褐色土	やや有り	微少な焼土粒子が含まれる シミ状にローム混
8層	黒褐色土		
9層	黒褐色土		下層から焼土粒子巻き上げられる
10層	暗褐色土	やや有り	焼土粒子の量と大きさは6層に準ずる
11層	暗褐色土	やや有り	10層と同じ
12層	黄褐色土	やや有り	2~5mm大の焼土粒子を微量に含む シミ状にローム混
13層	黄褐色土	やや有り	ロームブロック主体
14層	暗褐色土	やや有り	焼土粒子の量は極微量
15層	黒褐色土		1mm大の粒子含む
16層	黒褐色土		焼土粒子を微粒に含む
17層	暗褐色土		汚れたローム主体
18層	黒褐色土		微粒の焼土やロームを含む

層	しまり	粘性	説明
1層	暗褐色土	やや有り	普通 ロームが少量混じった土 粘土粒・焼土粒・炭化材を含む
2層	暗褐色土	やや有り	普通 ロームが少量混じった土 ローム粒少量含む

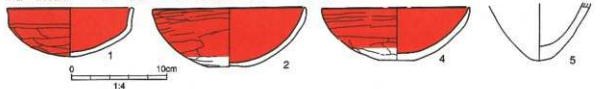


図 2-3-14 A007

表 2-3-6 A007遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	134×-×52 外面 口縁-ヨコナテ 胴部~底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナテ 器内側磨きしく、詳細不明	橙褐色	砂粒 雲母	2/3	赤彩 内外面
2	土師器 鉢	160×45×56 口縁内湾 外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	砂粒	略光形	赤彩 口縁~体下半 全面
3	土師器 鉢	(156)×38×56 口縁やや内湾 外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	粗砂粒	2/3	赤彩 口縁~体下半 全面
4	土製品 土玉	高さ(36)×幅(33)×孔径(6) 歪んだ球状 ナテによる調整 一部指頭痕 孔はやや片寄って穿たれる			1/2	
5	縄文 深鉢	-×-(62) 尖底 外面 擦痕 内面 ナデ	褐色	砂粒 雲母		底部片
6	石製 模造品	白玉				

A007

検出地区 E4-12G。台地平坦部に立地する。約20m東方に古墳時代中期の住居跡としてA004がある。周辺の古墳時代後期の住居跡としては、やや地点を異にしてA005・A006がある。

遺構 中型の方形のプランで、4本柱の住居跡である。主柱穴はP1~P4と考えられる。P6は貯蔵穴と考えられ、P6は出入り口施設と考えられる。床はロームを踏み固めたしっかりした床で、住居跡中央にて硬化面を検出した。壁もロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

竈は住居跡西壁はほぼ中央に位置する。煙道は壁を僅かに切り込んでいる程度で、直線的に立ち上がる。袖、天井部は残存していなかったが、火床については、明瞭な火床を検出している。竈は、住居跡廃絶時に人為的に破壊されたと考えられる。周溝は竈下を通り全周する。

覆土は、色調を基本に18層に分層。床面直上で多量の焼土を検出しているが、恐らくは、住居跡廃絶時に火を焚き、人為的に埋め戻されたものである。廃絶後は、おおむね自然堆積による埋没が考えられる。また14・15・16・17・18層は竈セクションの一部と考えられる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量に出土。焼土層より下層からの出土が多い傾向にある。
所見 A006同様、古墳時代後期的な須恵器の模倣坏である(1)と、古墳時代中期的な椀形土器(2)が伴していることは興味深い。古墳時代中期末~後期初頭に位置づけられるだろう。竈については、袖、天井を検出できなかったが、或いは竈導入期の状況から、古墳時代後期に見られるような構造では無かった可能性もある。

(2) 土坑及び遺構外出土遺物

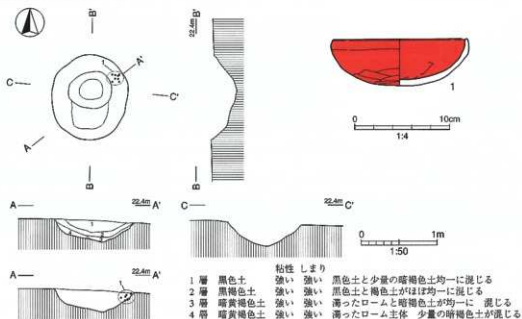


図 2-3-15 D001

表 2-3-7 D001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	142×-×50 口縁やや内湾 外面 頸部～体部上半-ナデ 体部下半・底部-ヘラケズリ 内面 口縁-ヨコナデ 頸部～底部-ヘラナデ	橙褐色 普	砂粒 雲母	完形	内外面 赤彩

D001

検出地区 E5-39G。台地先端部に位置する。同時期の土坑は本土坑1基のみで、孤立して立地する。近隣の遺構としては、奈良・平安時代の住居跡としてA012等がある。

遺 構 楕円形のプランで、しっかりとした掘込みを持つ。半球状の断面で底部において僅かに落ち込む部分がある。

覆土は色調を基本に4層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土上層から、土師器の杯(1)が出土している。

所 見 出土遺物から古墳時代中期末～後期初頭の土坑と判断した。出土した遺物からは、向境遺跡で検出された古墳時代の集落と対応する時期と考えられる。



E4-32-1G

図 2-3-16 遺構外出土遺物

表 2-3-8 古墳時代遺構外遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 杯	(100)×-×(47) 口縁内傾 受部は外上方に短くのびる 底部-回転ヘラケズリ	灰 良好	緻密	1/4	

表 2-3-9 古墳時代竪穴住居跡一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A002	E5-17G	方形 7.10×6.58×0.62 N-22°-E	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	床炉 住居跡南東隅による 周溝 全周する 周溝幅0.22m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土上層にかけて比較的多く出土している	色調を基本に20層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	
A003	E4-9G	方形 5.55×5.60×0.44 N-87°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	床炉 住居跡西壁端ほぼ中央 周溝 全周する 周溝幅0.16m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に13層に分層自然堆積による埋没が想定される	
A004	E4-41G	方形 6.30×6.18×0.62 N-116°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 住居跡西壁やや南側による 周溝 全周する 周溝幅0.18m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土下層及び覆土上層で少量出土	色調を基本に11層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	
A005	E5-25G	方形 6.20×6.00×0.52 N-46°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 住居跡 西壁ほぼ中央 周溝 全周する 周溝幅0.18m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土上層にかけて多量出土	色調を基本に20層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	
A006	E4-40G	方形 4.7×4.7×0.4 N-67°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 住居跡西壁ほぼ中央 周溝 全周する 周溝幅0.24m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土上層にかけて少量出土 貯蔵穴付近から集中的に出土	色調を基本に12層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	
A007	E4-12G	方形 5.5×5.54×0.28 N-44°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 住居跡 西壁ほぼ中央(施床切か) 周溝 全周する 周溝幅0.16m 主柱穴 4本
		床面直上から覆土上層にかけて少量出土 焼土層より下層での出土が多い	色調を基本に18層に分層 人為的な埋め戻しの後自然堆積による埋没	

表 2-3-10 古墳時代土坑一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D001	E5-39G	楕円形 1.10×1.0×0.3 N-0°-W	色調を基本に4層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
		しっかりとした掘込みを持ち船底形の断面形である	覆土上層から土師器坏1点出土	

第4節 奈良・平安時代

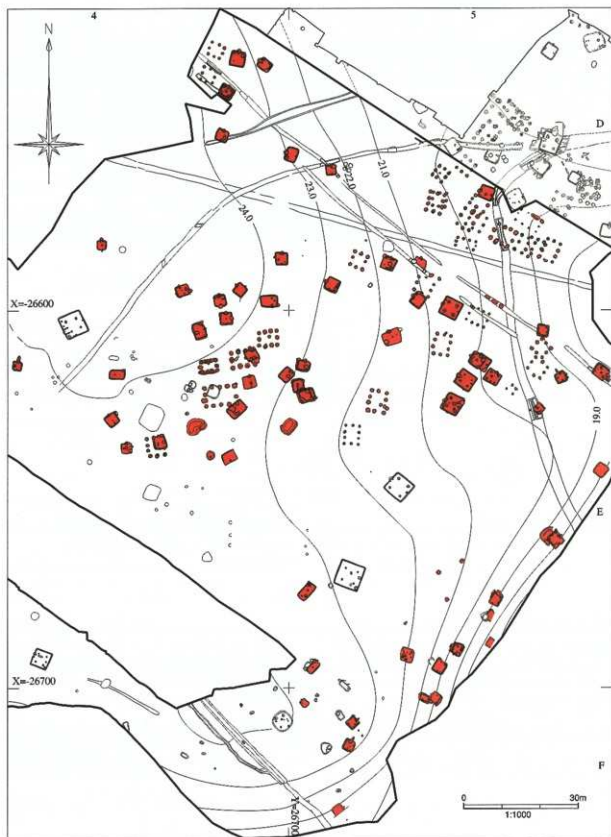


図2-4-1 向境遺跡奈良・平安時代遺構配置図

向境遺跡における奈良・平安時代の概要は、竪穴住居跡が62軒、堀立柱建物跡27棟、土坑、その他の遺構14基が検出された。向境遺跡の主たる時期となる。竪穴住居跡は総数62軒であるが、調査区全体を概観すると、地区的に4つの小群に分けることが可能である。第1群は調査区南端の斜面地に展開する

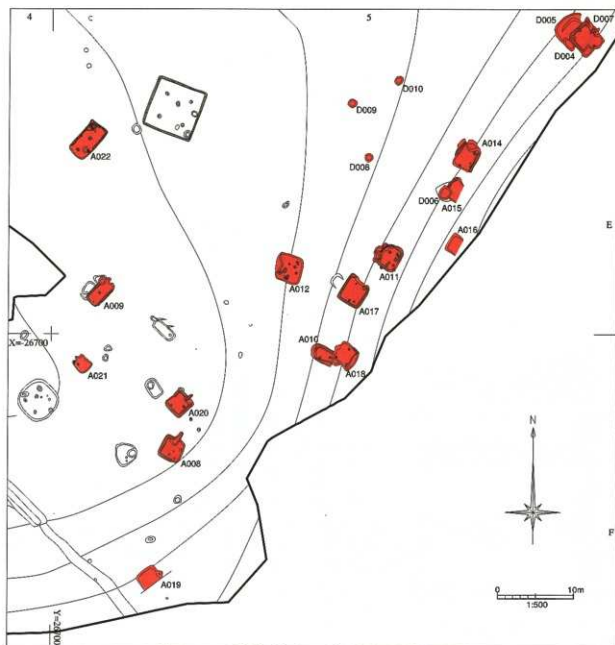


図2-4-2 向境遺跡奈良・平安時代第1群遺構配置図

一群で、第2群は台地中央に展開する一群、第3群は台地東側に入り込む谷津を取り巻くように展開する一群で、隣接する境畑遺跡と同一の集落と考えられる一群である。第4群も、第3群と同様に隣接する境畑遺跡と同一の集落と考えられる一群で、調査区北側に展開する一群である。グルーピングはあくまでも視覚的なもので各小群とも当然時期差が存在するが、隣接した遺構が何らかの有機的な関連を持つことは当然考えられ、整理を進める上での便宜も考慮し、以上のような1～4の小群に分け、記述を進めたい。

以下、個別の遺構についての報告に移る。計測値等の詳細については、適宜、一覧表等にまとめたので、併せて参照されたい。

(1) 第1群の遺構と遺物

第1群は、調査区南端の斜面地に展開する一群で、竪穴住居跡16軒、鍛冶遺構1基、土坑墓1基、その他の土坑7基を検出した。掘立柱建物跡を伴わないことを特徴とできるかもしれない。時期的には、平安時代が主体である。

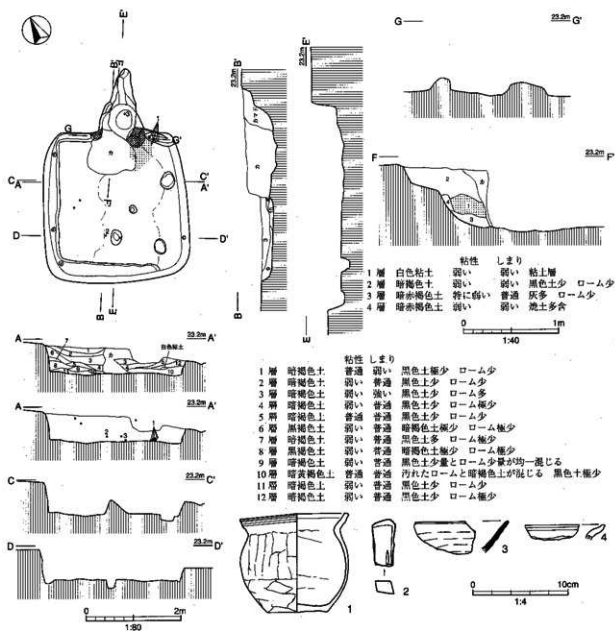
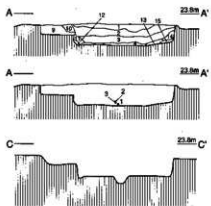
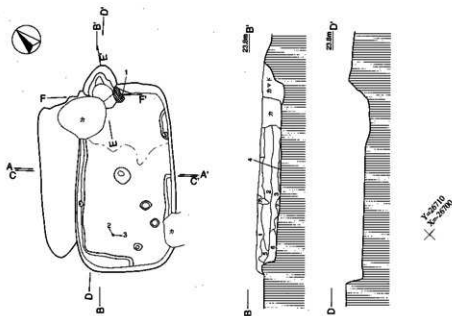


図 2-4-3 A008

表 2-4-1 A008遺物観察表

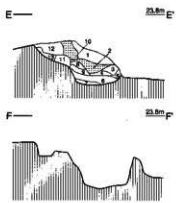
(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型甕	111×62×105 口縁やや立ち上がり外面凹線状の調整 外面 口縁～頸部ヨコナテ 胴部上半タテヘラケズリ 胴部下半・下 端ヨコヘラケズリ 内面 口縁～頸部ヨコナテ 全体ヘラナテ	暗赤褐 青	砂粒 青	3/4	内外面スス付着
2	石製品 砥石	-×-×- 外面 全体-割痕1条あり	乳白色			
3	須恵器 坏	ロクロ成形	灰 青	白色砂粒 青	口縁片	
4	土師器 甕	ロクロ成形	黒褐 青	青	口縁片	



層	粘性	しまり
1層	普通	普通
2層	普通	普通
3層	普通	普通
4層	普通	普通
5層	普通	普通
6層	普通	普通
7層	普通	普通
8層	やや強い	やや有り
9層	普通	普通
10層	普通	普通
11層	普通	普通
12層	普通	普通
13層	普通	普通
14層	普通	普通
15層	普通	普通

ロームブロック(20mm前後)やや多く含む
 ロームブロックと黒褐色土を混入
 黒褐色土をやや多にぶいロームブロック
 にぶいローム、ロームを多く含む
 ロームブロックを主体
 にぶいロームの小ブロックを主体
 粘土粒小
 やや有り
 ソフトローム
 ロームブロック多 褐色土少
 ロームブロック混在
 ロームブロック多 ローム多
 にぶいロームブロック少
 ロームブロックやや多
 ローム多



層	粘性	しまり
1層	普通	粘土少
2層	強い	粘土主体 褐色土 焼土少
3層	強い	粘土多 粘土少
4層	強い	粘土粒やや多、焼土粒少
5層	やや弱い	焼土粒混入
6層	普通	粘土、炭化物少量
7層	普通	焼土粒やや多く粘土粒少
8層	弱い	焼土粒微量
9層	弱い	焼土微量 砂質粘土少
10層	強い	粘土多く含む
11層	やや強い	粘土、焼土混入
12層	普通	褐色土多 焼土少
13層	やや強い	褐色土主体

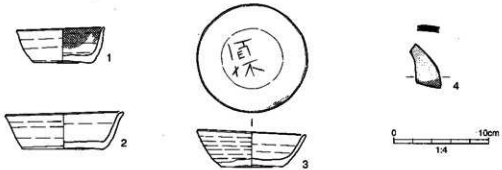


図 2-4-4 A009

表 2-4-2 A009遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏 (灯明皿)	91×62×38 ロクロ成形 口縁やや外反 体部中央に丸みを持つ 外面 底部ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	完形	内外面ケール状 付着物
2	土師器 坏 (灯明皿)	122×85×40 ロクロ成形 底部大きく断面台形状を呈する 口縁やや外反 被熱のため器面びび割れ 外面 胴部下端・底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	完形	口唇部に少量の ケール状付着物
3	土師器 坏	112×64×40 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色 良	砂粒 雲母	完形	線刻「□」 底部内面
4	灰軸陶器				胴部片	

A008

検出地区 F5-12G。台地先端部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A019・A020等がある。また、覆土上層から鍛冶遺構を検出している。

遺構 小型の隅丸方形のプランで、煙道部の長い竈を持つ。床はロームを踏み固めたしっかりした床で、住居跡中央部で広範囲に硬化面を検出している。床面にて小穴を4基検出しているが用途までは不明である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。竈は北壁ほぼ中央で検出されたが、竈正面に攪乱を受けていた為、両袖ともほとんど残っていなかった。同様に燃焼部にも火床及び赤化範囲は検出されなかった。煙道部には灰と焼土のセクションが検出されたことから竈は暫く放置され、その後天井部が自然崩壊したと考えられる。周溝は竈の両袖で途切れており竈の下を通らない。

覆土は、色調を基本に12層に分層。概ね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土している。覆土中から輪羽口、鉄砕及び黒曜石フレイク等も出土している。前者は覆土上層で検出された鍛冶遺構の、後者は、縄文時代の遺物包含層区域内に立地している影響によるものと考えられる。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。煙道が長いタイプの竈が検出されたことは注目される。同様の堅穴住居跡としてA022がある。或いは有機的な関連があるかもしれない。

A009

検出地区 E5-10G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A021・A022等がある。

遺構 小型の隅丸長方形のプランで、住居跡北隅に竈を持つ。床はロームの平坦な床で、竈前で若干堅いものの全体的には軟弱な床である。床面にて小穴を4基検出しているが用途までは不明である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。竈は北隅に寄っているが煙道部は壁に直行していた。攪乱を受けていた為、片袖はほとんど残っていなかった。燃焼部には明瞭な火床及び赤化範囲は検出されなかったものの、煙道部は明瞭に赤化していた。

覆土は、色調を基本に15層に分層。概ね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上及び覆土上層から少量に出土している。(1)・(2)は灯明皿としての使用が考えられ、(2)・(3)は床面直上で重なって出土した。また、覆土中から灰軸陶器が出土している。

所見 出土遺物から、奈良時代の堅穴住居跡と判断した。住居跡隅に竈を持つ長方形の住居跡で、同様の堅穴住居跡として、A010・A022等がある。或いは有機的な関連があるかもしれない。

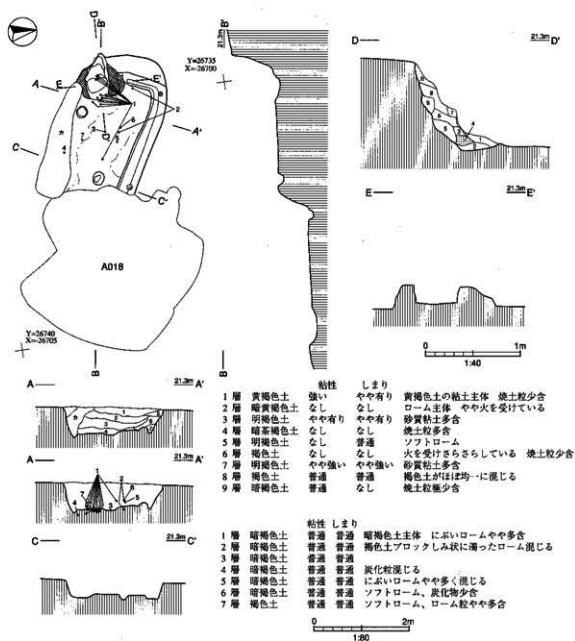


図 2-4-5 A010

A010

検出地区 F5-31G。台地斜面部に立地する。A018と重複するが、重複部分が僅かな為、新旧完形までは明らかにし得なかった。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A017・A018等がある。

遺構 A009同様、小型の隅丸長方形のプランで、住居跡、隅に竈を持つ。床はロームの平坦な床で、住居跡壁際で硬化面を検出している。床面に小穴を2基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は、重複する住居跡と攪乱の為、不明であるが、ほぼ全周していたものと考えられる。竈は南西隅に寄り、煙道部は壁に対して斜行して切れ込んでいた。煙道の切れ込みの度合いはそれほど強くなく、急傾斜で立ち上がってゆく。一部攪乱を受けていたものの、両袖とも残った。燃烧部には明瞭な火床及び赤化範囲は検出されなかった。支脚はロームを切り出し、粘土と土器片を積み重ね、支脚としている。天井部は、平面、断面ともに明確には捉えることはできなかったことから、竈は住居跡廃棄時に壊されたものと考えられる。

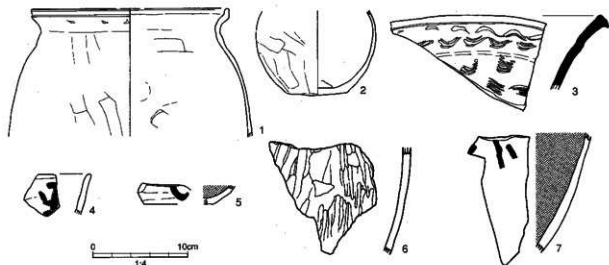


図2-4-6 A010(2)

表2-4-3 A010遺物観察表

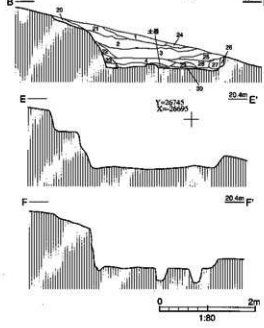
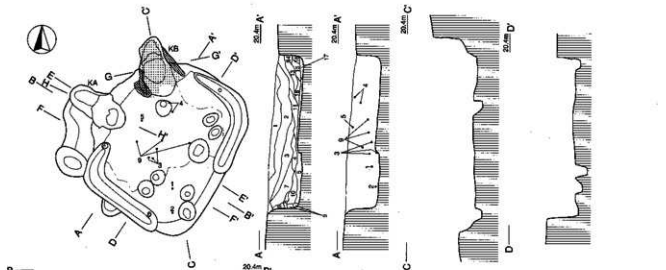
(単位mm)

No	種別 器形	法量 成 形・調整等の 特徴	色調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 壺	(206)×-×(136) 口縁受け口状 上端つまみ上げられる 外面は門線状の調整 外面 線-ヨコナデ 胴部上半-ヘラケズリ 内面 口縁-頸部-ヨコナデ 胴部上半-ヘラナデ	橙褐色 青	粗砂粒多	口縁- 胴部片	
2	土師器 小型壺	-×64×(90) 外面 胴上半-ヘラケズリ後ヘラナデ? 内面 胴下半-ヘラナデ	暗橙褐色 青	砂粒	1/2	
3	須恵器 壺	-×-×- 外面 口縁-波状文 内面 口縁-ヨコナデ	暗灰褐色 良	砂粒 雲母	口縁片	
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「□」 体部外面
5	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラケズリ	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒
6	土師器 壺	-×-×- 外面 縦位のヘラケズリ	黒褐色 青	砂粒少	胴部片	
7	土師器 坏	-×-×- 内面 丁寧なヘラミガキ	褐色 青	青	体部片	墨書「□」 体部外面 内黒

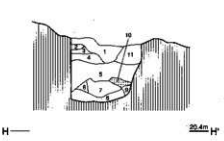
覆土は、色調を基本に7層に分層。床面直上から焼土を検出し、また、覆土最下層から、炭化粒を多く含むことから、廃絶時に人為的に火を焚いた状況が窺える。その後は自然堆積による埋没が考えられる。覆土上層の状況から、上層にさらに遺構のあった可能性もある。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて少量に出土している。墨書土器が3点出土した。

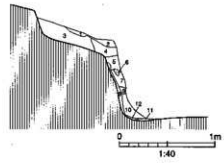
所 見 出土遺物から、奈良時代・平安時代の堅穴住居跡と判断した。住居跡間に竈を持つ長方形の住居跡で、同様の堅穴住居跡として、A009・A022等がある。或いは有機的な関連があるかもしれない。



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	黒褐色土	普通	普通	褐色土をしみ状に極少量混入
2層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームをしみ状に混入
3層	暗褐色土	普通	普通	2層より暗い、焼土少量
4層	黒褐色土	普通	普通	炭化物混入、一部に粘土粒
5層	暗褐色土	やや有り	普通	褐色土ブロックをしみ状に含
6層	褐色土	普通	普通	ソフトローム多量混入
7層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロック少量混入
8層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロックをしみ状に混入
9層	褐色土	普通	普通	
10層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロック、褐色土ブロックしみ状に混入
11層	褐色土	普通	普通	にぶいロームブロック多量混入
12層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロック少量
13層	暗褐色土	普通	普通	12層より暗い、褐色土ブロックやや多い
14層	明褐色土	普通	普通	ロームブロック、ソフトロームからなる
15層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム、焼土少量
16層	明褐色土	普通	普通	ソフトロームよりなる
17層	暗褐色土	やや有り	普通	粘土粒一部を含む
18層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロックやや多い、焼土粒極少量混入
19層	明褐色土	普通	普通	ソフトローム多量
20層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒少量
21層	暗褐色土	普通	普通	暗褐色土を主体とし、ほぼ均
22層	暗褐色土	普通	普通	22層より暗い、暗褐色土を主体としほぼ均一
23層	暗褐色土	普通	普通	1層よりやや明るい
24層	黒褐色土	普通	普通	
25層	暗褐色土	普通	普通	褐色土をしみ状に含、一部に焼土粒
26層	明褐色土	普通	普通	ソフトローム
27層	褐色土	普通	普通	ローム小ブロック、ローム粒やや多い
28層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロックをしみ状にやや多く混入
29層	褐色土	普通	普通	29層より、ロームの小ブロックやや多い、一部に炭化物
30層	褐色土	やや有り	普通	2層より明るい



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	暗褐色土	普通	やや有り	褐色土ブロック、ローム粒混じる
2層	明褐色土	普通	普通	ソフトローム
3層	褐色土	普通	やや有り	ソフトローム混じる
4層	褐色土	やや有り	やや有り	ロームブロック、粘土混じる
5層	暗褐色土	やや有り	やや有り	粘土ブロック、粘土粒混じる
6層	暗褐色土	なし	やや有り	粘土ブロック、焼土粒混じる
7層	暗褐色土	なし	なし	ローム粒少量、炭化物、焼土粒混じる
8層	暗褐色土	なし	なし	焼土ブロック多量
9層	赤褐色土	なし	なし	焼土ブロック
10層	暗灰褐色土	有り	有り	粘土粒極めて多量
11層	暗黄褐色土	なし	なし	ローム主体



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	褐色土	普通	普通	暗褐色土少量
2層	暗褐色土	普通	普通	ほぼ均一層
3層	暗褐色土	普通	普通	ソフトローム
4層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒少量
5層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒、黒色土粒混入
6層	暗灰褐色土	やや有り	普通	粘土主体
7層	褐色土	なし	普通	ロームブロック、焼土ブロック混入、粘土粒やや多い
8層	明褐色土	普通	やや有り	ローム主体
9層	暗褐色土	なし	なし	焼土、炭化物多量
10層	黒褐色土	なし	なし	炭化物多、粘土、焼土一部混入
11層	暗褐色土	なし	なし	炭化物、焼土やや多量
12層	明褐色土	普通	普通	ローム主体

図 2-4-7 A011

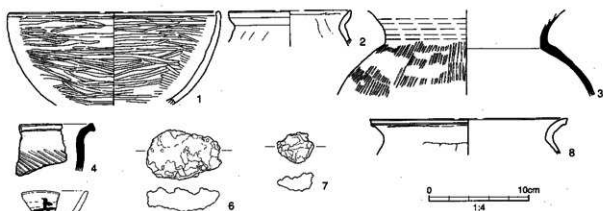


図 2-4-8 A011(2)

表 2-4-4 A011遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 碗	(222)×-×(99) ロクロ成形 口縁内湾 外面 胴部上半-ヘラミガキ 下半-回転ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	橙褐色	砂粒 雲母	1/4	外面スス付着
2	土師器 小型壺	(127)×-×(38) 口縁立ち上がる 外面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴部上半-ヘラケズリ 内面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴上半-ヘラナデ	橙褐色	砂粒 雲母		口縁片
3	須志器 壺	-×-×(90) 外面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴上半-タキ目 内面 ヨコナデ	灰黒	砂粒 雲母		口縁- 胴部片
4	須志器 壺	-×-×- 口縁外反 外面 口縁-ヨコナデ 胴上半-タキ目 内面 ヨコナデ	灰白 黒	砂粒 雲母		口縁片
5	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐色	砂粒 雲母		口縁片 墨書「□」 体部外面
6	鉄製品 鉄滓	79×52×26 重量95.3g 木炭痕を有する 砂鉄焼結塊付着				
7	鉄製品 鉄滓	38×33×20 重量24.0g 鉄指付着				
8	土師器 壺	(206)×-×(38) 口縁外反 外面 口縁-ヨコナデ 胴部-ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	暗赤褐色	砂粒 雲母		口縁片

A011

検出地区 E5-50G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A016・A017等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプランで。床はロームの平坦な床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出。床面に小穴を8基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は東西コーナーでそれぞれ検出している。竈は2基検出され、KAからKBへと作り替えられている。KAは、住居跡北東壁ほぼ中央に作られ、袖・天井・燃烧部等の竈の主要要素は検出されなかった。KBは、竈は北隅に寄り、煙道部は壁に対して斜行して切れ込んでいた。煙道の切れ込みの度合いはそれほど強くなく、急傾斜で立ち上がってゆく。袖部の遺存状況は両袖とも比較良好であった。燃烧部、天井部、煙道に明瞭な火床及び赤化範囲は検出されなかった。竈周辺に粘土ブロックが広範に混在していたことから、KBは住居廃絶時に、壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に30層に分層。覆土下層において、焼土、炭化物を検出していることから、住居廃絶時に火を焚き、人為的な埋め戻しが行われ、その後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

遺物 床面直上及び覆土上層から比較的多量に出土した。覆土上層から墨書土器出土。同様に覆土上層から、腕状鉄宰が出土。周辺での鍛冶遺構の存在を想定させる。また、覆土中出土の須恵器の甕形土器(9)がA012の遺物と接合している。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。2基の竈の検出状況、床面におけるピットの配置、住居跡の平面・断面形態から、単に竈の作り替えに止まらず、住居自体の立て替えが想定される。壁中央に竈を持つ住居からコーナーに竈を持つ住居に作り替えていることは興味深い。同様の例として、栗谷遺跡A115がある(註1)。

註1 『栗谷遺跡-第2分冊-』 2003 八千代市遺跡調査会

A012

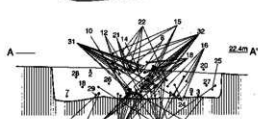
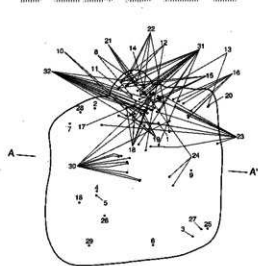
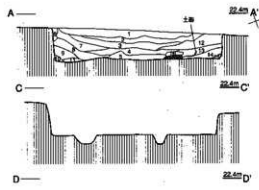
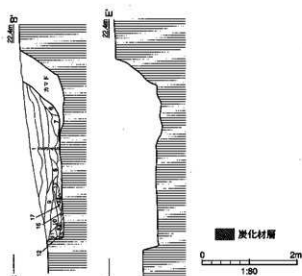
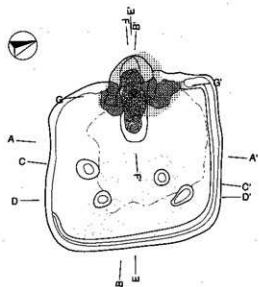
検出地区 E5-40G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A010・A011・A017等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床は、ロームの平坦な床で住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出。床面に小穴を4基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約1/2周する。竈は西壁ほぼ中央で検出され、遺存状況は良好である。火床面も燃烧部全体に広がり、煙道部についても広範囲に赤化範囲が広がっていた。竈内では、小形甕(17)が伏せた状態で検出され、支脚として転用されていたことが窺える。天井部は、白色粘土の平面、断面の検出状況から、自然崩落したものと考えられる。支脚が使用されていた状態で出土したこと、天井部・袖・火床面の検出状況から、住居廃絶時に竈は壊されなかったものと考えられる。

覆土は、色調を基本に16層に分層。覆土下層において、焼土・炭化物を広範囲に検出していることから、住居廃絶時に火を焚き、人為的な埋め戻しが行われ、その後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

遺物 床面直上及び覆土上層から多量に出土した。(23)については、A011覆土内出土の須恵器片と接合。覆土中から墨書土器2点、砥石2点出土。同様に覆土中から鉄宰も出土している。周辺での鍛冶遺構の存在を想定させる。

所見 出土遺物から、平安時代の堅穴住居跡と判断した。皿形土器が出土していることから9世紀代半ば以降か。A011の出土遺物と接合する資料や、鉄宰が共通して出土していること、住居跡埋没の状況など、2軒の住居跡に共通性が多いことは、興味深い。



1層	黒褐色土	普通	普通	黒褐色土主体
2層	暗褐色土	普通	普通	砂質粘土多 炭化物少量
3層	暗褐色土	普通	普通	砂質粘土ブロック
4層	暗褐色土	普通	普通	砂質粘土ブロック主体
5層	暗褐色土	強い	強い	砂質粘土多層含
6層	暗褐色土	強い	強い	砂質粘土多層含
7層	暗褐色土	やや強い	やや強い	砂質粘土 焼土粒多
8層	褐色土	普通	普通	暗褐色土主体 炭化物少量含
9層	褐色土	普通	普通	焼土多量含
10層	褐色土	普通	普通	焼土粒多量含
11層	褐色土	普通	普通	砂質粘土多量含
12層	褐色土	やや弱い	やや弱い	砂質粘土多 焼土粒少量含
13層	褐色土	普通	普通	焼土主体 炭化物少量含
14層	褐色土	普通	普通	焼土主体 褐色土多
15層	褐色土	普通	普通	褐色土少量
16層	褐色土	普通	普通	焼土粒多

粘性	しまり
普通	褐色土ブロックしみ状
普通	黒褐色土 ローム粒
普通	褐色土ブロック多 ローム粒少
普通	ローム粒やや多 焼土粒 炭化物少量含
普通	焼土粒 ローム粒多 炭化物やや多
普通	にぶいローム主体
普通	黒褐色土しみ状やや多 ローム粒少含
やや弱い	ローム粒多 ロームブロック
普通	にぶいローム
普通	ローム粒多 ロームブロック少
普通	ローム粒 にぶいローム主体
普通	ローム粒やや多 にぶいロームブロック少
普通	ローム粒と褐色土混合
普通	ローム粒 焼土粒少 褐色土主体
普通	ローム粒多量含
普通	焼土粒多 ローム粒少

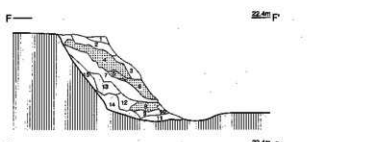
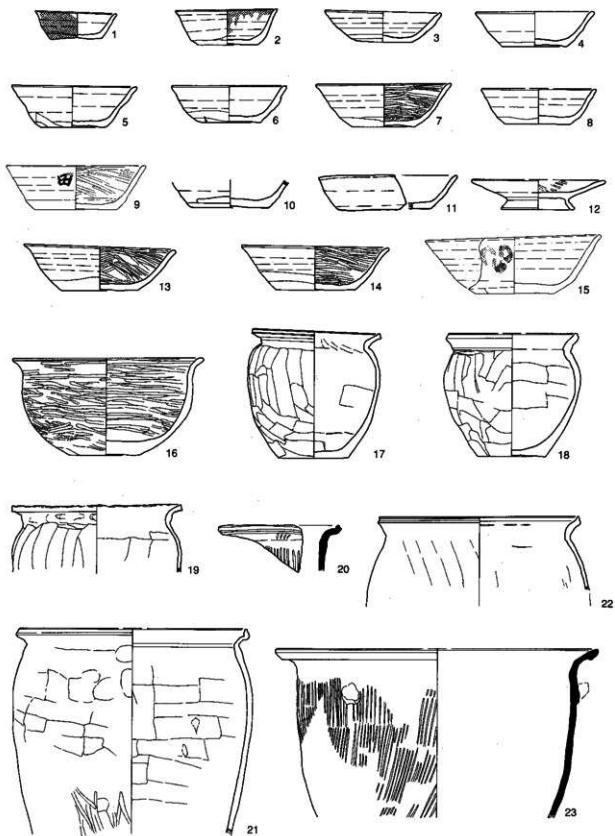


図2-4-9 A012



0 10cm
1:4

图 2-4-10 A012(2)

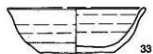
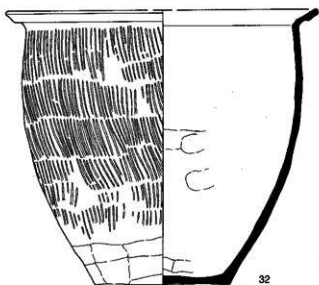
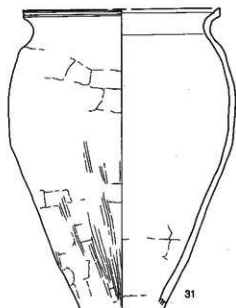
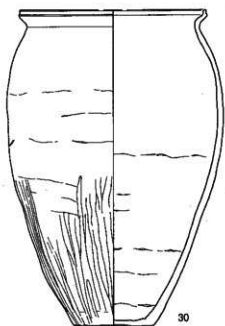
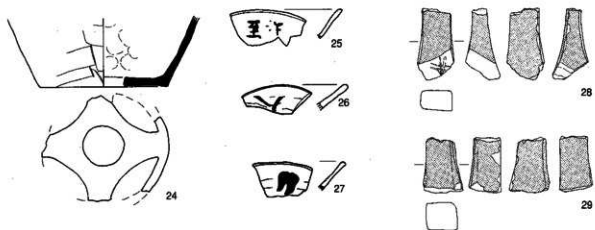


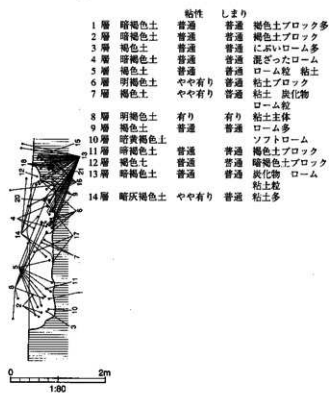
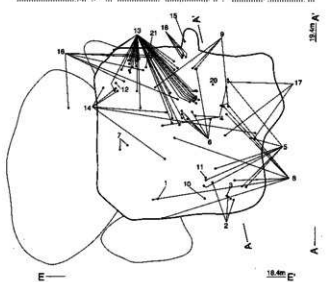
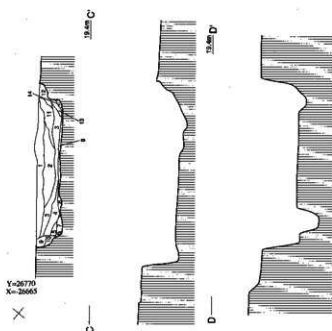
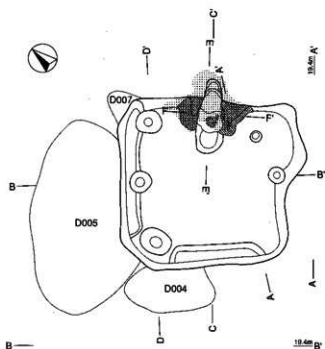
圖 2-4-11 A012(3)

表 2-4-5 A012遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	84×54×30 ロクロ成形 口縁上端やや外反 体部下端にやや丸味をもつ 底部一回転糸切りのちヘラケズリ	明褐色 良	砂粒 雲母	完形	外面タール 状付着物 灯明皿
2	土師器 杯	105×62×38 ロクロ成形 口縁上端外反 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切りのちヘラケズリ	明褐色 良	砂粒 雲母	完形	内面タール 状付着物 灯明皿
3	土師器 杯	121×59×34 ロクロ成形 歪みを持つ底部は小さく口径大きく開く 胴部下半下端一回転ヘラケズリ底部一回転糸切りのちヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	完形	外面スス付着 灯明皿
4	土師器 杯	(123)×(68)×37 ロクロ成形 口縁外反 底部やや上げ底 胴下端一底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	2/3	内外面スス付着
5	土師器 杯	129×66×45 ロクロ成形 体部中央屈曲し外傾 胴部一下端 手持ちヘラケズリ 底部中央底縁一手持ちヘラケズリ	暗褐色 良	砂粒 雲母	完形	
6	土師器 杯	121×66×40 ロクロ成形 厚手の作り 胴部一下端一回転ヘラケズリ 底部中央底縁一回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒 雲母	略完形	
7	土師器 杯	(142)×65×46 ロクロ成形 体部外傾 底部上げ底 外面 胴部下端 底部中央底縁一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒 雲母	1/2	
8	土師器 杯	(120)×69×38 ロクロ成形 体部外傾 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切りのちヘラケズリ	橙褐色 悪	砂粒	2/3	
9	土師器 杯	(144)×85×47 ロクロ成形 体部外傾胴部下端一底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 普	砂粒	2/3	体部外面 墨書「田」
10	土師器 杯	ロクロ成形 外胴部下端ヘラケズリ 底部一回転糸切りヘラケズリ 内胴部上半 丁寧なミガキを施す	橙褐色 普	赤色ス コリア 白色 微粒各 量に含 む	体部片 ～ 底部片	縦刻 底部内面
11	土師器 杯	ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部一回転糸切り後ヘラケズリ	暗褐色 普	普	体部片 ～ 底部片	
12	土師器 高台付皿	(140)×(78)×32 ロクロ成形高台部「ハ」の字状 外面 底部一回転糸切り後一回転ヘラケズリ 内面 口縁ヘラミガキ 胴部上半一ヘラミガキ	橙褐色 普	砂粒多	1/4	高台部内外面 スス付着
13	土師器 杯	154×80×50 ロクロ成形 口縁外反 体部丸みを持つ 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	橙褐色 普	砂粒	略完形	
14	土師器 杯	153×82×48 ロクロ成形 口縁外反 外面 胴部一下半 下端一回転ヘラケズリ 内面 密なヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒	4/5	体部及び底部外 面に少量のタ ール状付着物
15	土師器 杯	183×82×63 ロクロ成形 大型の杯 口縁外反 胴部一底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 普	砂粒	4/5	墨書「□」 体部外面 スス付着
16	土師器 鉢	198×75×103 ロクロ成形 口径大きく外反 体部中央丸みを持つ 外面 口縁頸部胴上半一ヘラミガキ 胴部下半一ヘラケズリ後 内面 内面全体にヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒 雲母	4/5	外面スス付着
17	土師器 小形壺	134×74×138 口径大きく外反 外面凹線状の調整 外面 口縁頸部横ナデ 胴部上半一腹ヘラケズリ 下半下端一横ナデ 底部横ナデ 内面 口縁一横ナデ 頸部一胴部ヘラナデ	橙褐色 良	砂粒多	完形	

18	土師器 小形甕	(135)×70×131 口縁受け口状 肩部が張る 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴部上半一縦ヘラケズリ 胴部～下端底部一横ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒	2/3	
19	土師器 小形甕	(178)×××71 口縁外反し上端を内側に折り返し押圧 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半一タキ目 内面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半一ヘラナデ	灰色 青	砂粒 雲母	口縁片	
20	須恵器 甕	一××× 外面 口縁～頸部横ナデ 胴上半一タキ目 内面 口縁～頸部横ナデ 胴上半一ヘラナデ	灰色 青	砂粒 雲母	口縁片	
21	土師器 甕	(237)×××(220) 口縁受け口状 外面 口縁～頸部横ナデ 胴部上半一ヘラナデ指ナデ? 内面 口縁～頸部横ナデ 上半下半一ヘラナデ	褐色 黒	粗砂粒多 雲母	口縁～ 胴部	外面スス付着
22	土師器 甕	(212)×××(16) 口縁受け口状 上端つまみ上げられる 外面は凹線状に調整 外面 口縁～頸部横ナデ 内面 口縁～頸部横ナデ 胴部上半一ヘラナデ	褐色 青	粗砂粒多 雲母	口縁片	内外面少量 スス付着
23	須恵器 甕	(340)×××(180) 突起ヶ所残存 口縁～頸部一内外面横ナデ 胴上半一タキ目 胴上半内面ナデ	暗茶褐色 青	砂粒 雲母	口縁～ 胴部片	
24	須恵器 甕	一×(135)×(75) 底部中央に凹形対照する木葉痕の孔を4個有する 外面 胴部下端一ヘラケズリ 内面 胴部下端一横ナデ 一部指頭圧痕	暗茶褐色 良	砂粒 雲母	底部片	
25	土師器 坏	ロクロ成形	褐色 青	青	口縁片	墨書「至口」 体部外面正位
26	土師器 甕	ロクロ成形 内面 ミガキ	褐色 青	青		墨書「口」 体部外面
27	土師器	一××× ロクロ成形	砂略褐色 砂褐色 青	青	口縁片	墨書「口」 体部外面 朱書「口三女」 体部外面
28	石製品 砥石	長さ76×幅38×厚さ22 重量95.6g 楕円状 4砥面下面に線条痕を有する			1/2	
29	石製品 砥石	長さ59×幅42×厚さ30 重量104.6g 楕円状 断面四角形 4砥面右側面 面取り状に使用され 角がとれる			1/2	
30	土師器 甕	(198)×(83)×335 口縁受け口状 上端つまみ上げられる 肩部が張る 外面 口縁頸部一横ナデ 胴部上半一ヘラケズリ後ナデ 内面 口縁頸部一横ナデ 胴部ヘラナデ 下半下端一ヘラケズリ後ヘラミガキ	褐色 青	粗砂粒 雲母	2/3	外面スス 少量付着
31	土師器 甕	(206)×××(317) 口縁凹線状に調整 上端つまみ上げられる 外面 口縁～頸部一横ナデ 胴上半一ヘラナデ下半～下端一ヘラケズリ 後ヘラミガキ 内面 口縁～頸部一横ナデ ヘラナデ	砂褐色 砂褐色 青	粗砂粒多	3/4	
32	須恵器 甕	(325)×140×234 口縁外反し広口 胴上半にやや膨らみを持つ 外面 口縁一横ナデ 頸部一同上下半一タキキ下端ヘラケズリ 内面 横ナデ ヘラナデ一部指頭圧痕	橙褐色 一赤褐色 良	砂粒	3/4	
33	土師器 坏	(144)×79×48 ロクロ成形 口縁外反 体部下丸みを持つ 胴部回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒多 小石	2/3	



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	灰褐色土	有り	有り	粘土
2層	暗灰褐色土	有り	有り	粘土粒多く 焼土少
3層	暗赤褐色土	なし	なし	炭化物多量
4層	暗赤褐色土	なし	なし	褐色土混入
5層	明褐色土	なし	なし	
6層	暗灰褐色土	普通	普通	粘土多い
7層	暗赤褐色土	なし	なし	粘土混入
8層	褐色土	普通	普通	粘土粒、焼土混入
9層	暗赤褐色土	なし	なし	
10層	暗褐色土	なし	なし	焼土、粘土混入



図 2-4-12 A013

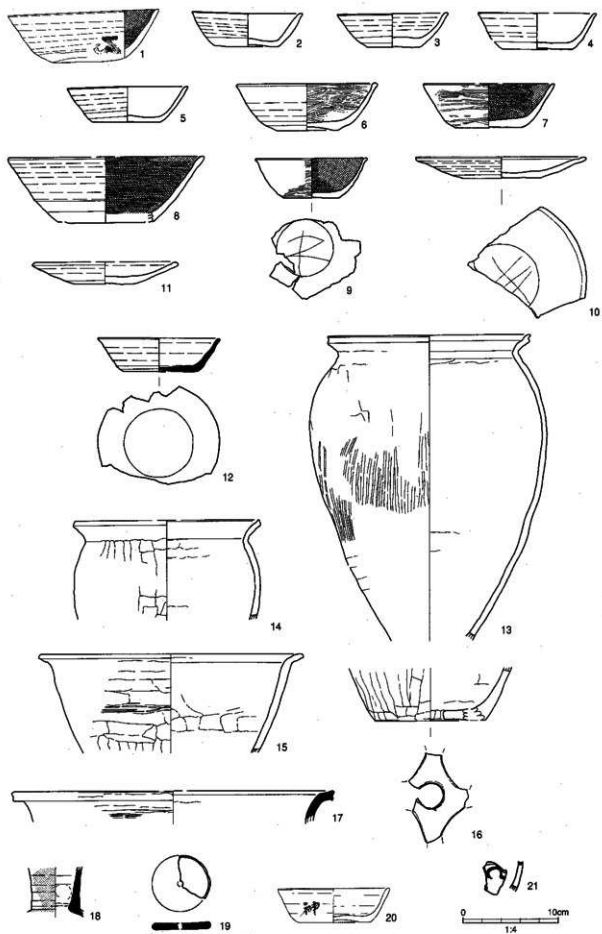


图 2-4-13 A013(2)

表 2-4-6 A013遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	158×71×55 体部外縁 下端にやや丸味をもつ ロクロ成形 外面 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒 雲母	略完形	内黒 墨書 釈文「得」 体部外面 横位
2	土師器 坏	116×66×38 口縁やや外反 体部丸みをもちつつ外縁 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 良	砂粒	略完形	
3	土師器 坏	118×55×36 底部小さく口縁部開く ロクロ成形 外面 胴部下端 底部一回転ヘラケズリ	褐色 良	砂粒 雲母	略完形	口縁 内外面 スス付着
4	土師器 坏	(122)×73×39 体部外縁 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色 普	砂粒 雲母	1/2	
5	土師器 坏	(126)×72×38 体部外縁 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐色 普	砂粒 雲母	3/4	
6	土師器 坏	(144)×(64)×50 口縁厚みをもち外反 ロクロ成形 上端に稜をもつ 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	暗褐色 普	砂粒 雲母	1/2	内外面 スス付着
7	土師器 坏	(140)×(70)×47 ロクロ成形 外面 口縁へ胴部へロクロ調整後ヘラミガキ 体部部下端一回転ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ後まばらにヘラミガキ 内面 全体に密なヘラミガキ	褐色 良	砂粒 雲母	1/2	内黒
8	土師器 坏	(206)×(100)×(70) 体部外縁 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 内面 全面ヘラミガキ	暗褐色 良	砂粒 雲母	1/3	内黒
9	土師器 坏	(118)×60×42 口縁外反 体部丸みをもち、やや外縁 ロクロ成形 外面 ヘラミガキ 胴部下端・底部一回転ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 全面密なヘラミガキ	明褐色	砂粒	1/3	内黒 縁刻 底部外面
10	土師器 皿	(180)×(80)×23 口縁内面に沈線状の凹み 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色 良	砂粒	1/4	縁刻 底部外面
11	土師器 皿	(156)×64×24 口縁面取り状 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色 良	砂粒 雲母	1/2	
12	須恵器 坏	128×74×36 底部中央 ロクロ成形 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ	灰茶褐色 普	砂粒 雲母	3/4	
13	土師器 壺	216×—×(325) 口縁部門縁状の調整 胴上半に彫らみをもつ 外面 口縁ヨコナデ頸部ナデ 胴部上下半ヘラケズリ後ミガキ状の調整 胴部下端ヘラケズリ 内面 口縁ヨコナデ 頸部胴部ヘラナデ	砂茶褐色 暗褐色 普	粗砂粒	2/3	
14	土師器 壺	(195)×—×(106) 口縁受け口状 上端立ち上がる 頸部「く」の字状 外面 口縁へ胴部へヨコナデ 胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁ヨコナデ 胴部上半ヘラナデ	暗褐色 普	砂粒	口縁へ 胴部片	
15	土師器 壺	(275)×—×(106) 口縁外反 縁に近い? 外面 口縁ヨコナデ 頸部ヘラナデ 胴上半ヘラケズリ 内面 口縁ヨコナデ 頸部・胴上半ヘラナデ	褐色 普	砂粒	口縁へ 胴部片	
16	土師器 瓶	—×(118)×(56) 底部は中央に凹形 周りに木葉形の孔を対称に4箇所配する 外面 胴下半ヘラケズリ 胴下半ヘラケズリ 内面 胴下半ヘラナデ 胴下半ヘラケズリ	褐色 普	砂粒 雲母	胴へ 底部片	
17	須恵器 壺	(340)×—×(35) 口縁外反 外面 口縁・胴部へヨコナデ 内面 口縁ヨコナデ 頸部ヘラナデ	暗灰色 普	砂粒 雲母	口縁片	

18	須恵器 長頸壺	-X-X-X- 内面 口縁指頭板 自然軸	砂青灰色 青褐色 良	粗砂粒	頸部片	
19	須恵器 坏	-X-X-X- 坏底部を紡錘車に転用	灰色 青	青		
20	土師器 坏	118×76×36 ロクロ成形 底部大きく体部やや外傾する 底部一回転糸切り後面転へラケズリ	橙褐色 良	砂粒	暗光形	墨書「神」 体部外面
21	土師器 坏	-X-X-X- ロクロ成形	褐色	青	体部片	墨書「□」 体部外面

A013

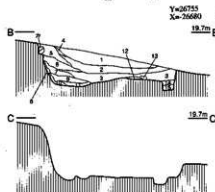
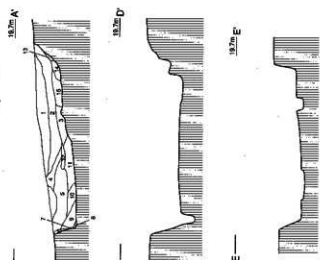
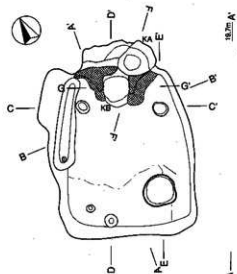
検出地区 E5-67G。台地斜面部に位置し、他の住居跡より低い場所に立地している。3基の土坑、D004・D005・D007と重複する。D007とは本住居跡の方が新しい。他の2基の土坑D004・D005とは本住居跡の方が古い。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A014・A015等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床は白色粘土と暗褐色土を均一に混ぜた土を踏み固めて貼床としている。平坦な床でやや粘性を帯びる。床面にて小穴を5基検出している。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約1/2周する。竈は東壁ほぼ中央で検出され、遺存状況は良好である。良好な火床面を検出し、両袖もしっかりと残っていた。煙道の天井部は、白色粘土の平面、断面の検出状況から、自然崩落したものと考えられる。天井部、袖、火床面の検出状況から、住居廃絶時に竈は壊されなかったものと考えられる。

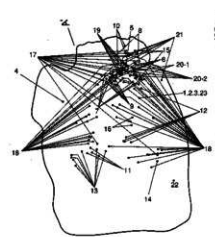
覆土は、色調を基本に14層に分層。覆土下層において、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。なお図示した焼土範囲は覆土上層からの検出で、覆土中にさらに別の土坑が存在していたようだが、詳細は確認し得なかった。

遺物 床面直上及び覆土上層から多量に出土した。内黒の土師器の出土が多い傾向であった。覆土中から墨書土器2点出土。(12)については、底部に焼成時の焼き台の痕が明瞭に残っていた。A011覆土内出土の須恵器片と接合。覆土中から墨書土器2点出土。

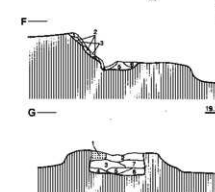
所見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。皿形土器が出土していることから9世紀以降か。竈の主軸（煙道方向）が斜面に対して平行する方向で作られているが、斜面地に立地している住居跡のあり方を考える上で興味深い。



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	黒褐色土	普通	普通	褐色土ブロックしみに混じる
2層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロック含 黒色土ブロック状に混じる
3層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロックやや多含 炭化物混
4層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロック多含 一部にロームブロック混じる
5層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロック多含 ローム粒少含
6層	褐色土	普通	普通	にぶいローム多含
7層	暗褐色土	普通	普通	ほぼ均一層
8層	暗黄褐色土	普通	普通	ロームブロック
9層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロック、ローム粒やや多く混 一部粘土粒を混
10層	褐色土	普通	普通	暗褐色土、ローム粒少含
11層	暗褐色土	普通	普通	にぶいロームブロック少含 炭化物粒一部混
12層	黒褐色土	普通	普通	炭化材含
13層	暗黄褐色土	普通	普通	ソフトローム
14層	明褐色土	普通	普通	ローム多含 褐色土少量混
15層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロックやや多含



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	黒褐色土	普通	普通	褐色土ブロックしみに混
2層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロック含 黒色土ブロック状に混
3層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロックやや多含 炭化物混
4層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロックやや多い
5層	褐色土	普通	普通	暗褐色土をしみに混
6層	褐色土	普通	普通	暗褐色土少含
7層	褐色土	普通	普通	炭化物少含
8層	暗黄褐色土	普通	普通	ソフトローム
9層	暗褐色土	普通	普通	焼土多含 一部ににぶいロームブロック
10層	暗褐色土	普通	やや有り	やや明るい暗褐色土
11層	暗褐色土	普通	なし	焼土粒、炭化物少含
12層	暗褐色土	普通	普通	焼土多含
13層	黒色土	普通	なし	炭化材主体
14層	暗褐色土	普通	やや有り	褐色土のロームブロック混
15層	暗褐色土	普通	普通	



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	褐色土	普通	普通	焼土粒やや多い
2層	明褐色土	なし	なし	火を受けたローム
3層	暗茶褐色土	なし	なし	焼土粒、焼土多含
4層	暗褐色土	なし	なし	カクラン? 焼土ブロック混
5層	明褐色土	なし	なし	ロームブロック主体
6層	暗茶褐色土	なし	なし	焼土の小ブロック 焼土粒やや多含

層	土質	粘性	しまり	説明
1層	暗灰褐色土	やや有り	やや有り	粘土多含 焼土、暗褐色土混
2層	褐色土	やや有り	やや有り	焼土粒、粘土粒多含
3層	褐色土	やや有り	やや有り	焼土ブロック多含 粘性のあるローム混
4層	明褐色土	やや有り	やや有り	粘性のあるローム多含
5層	褐色土	普通	普通	焼土粒少含 ローム多含
6層	暗褐色土	弱い	弱い	焼土粒含
7層	暗褐色土	普通	普通	やや明るい暗褐色土が均一に混

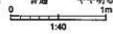


図 2-4-14 A014

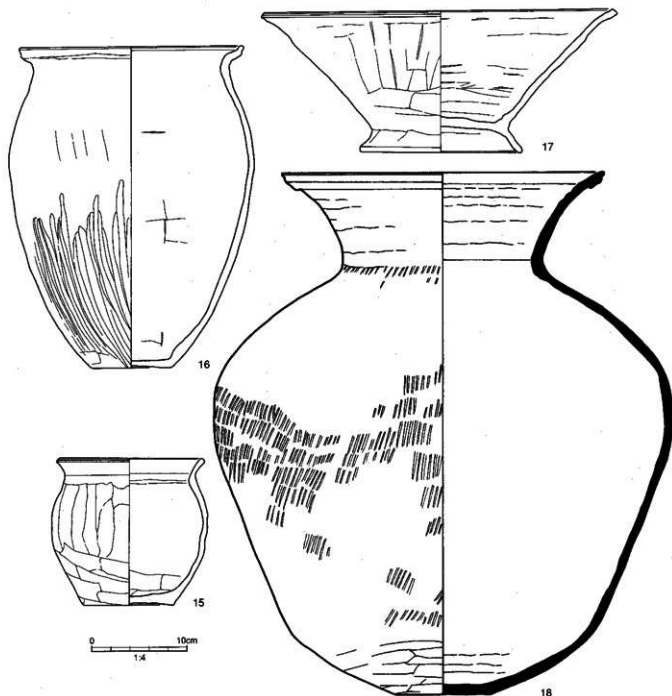
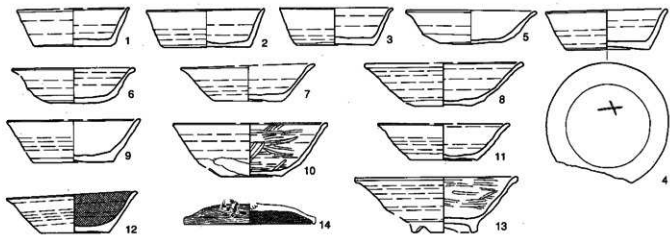


图 2-4-15 A014(2)

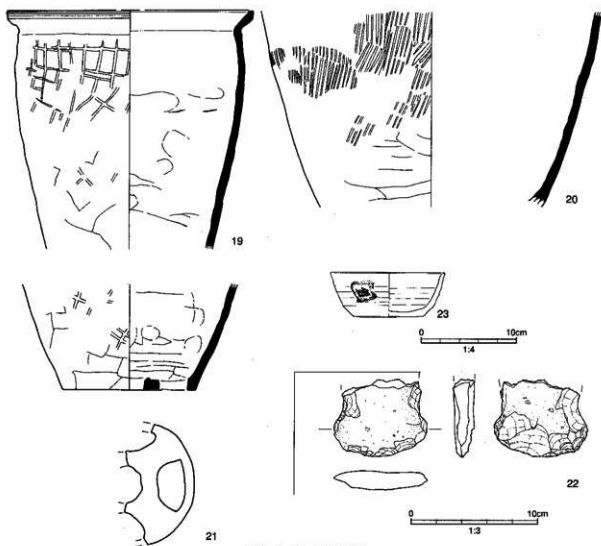


図 2-4-16 A014(3)

表 2-4-7 A014遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	120×84×40 ロクロ成形 底部大きく 体部やや外傾 底部一回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒	完形	
2	土師器 坏	126×92×41 ロクロ成形 底部大きく 体部やや外傾 口縁は外反 外面 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 良	砂粒 雲母	略完形	内外面 スス付着
3	土師器 坏	120×81×40 ロクロ成形 底部大きく 体部やや外傾 口縁外反 外面 底部一回転ヘラケズリ	明褐色 普	砂粒 雲母	略完形	
4	土師器 坏	130×90×43 ロクロ成形 底部大きく 体部やや外傾 口縁外反 外面 底部一回転糸切り	褐色 良	砂粒 雲母	略完形	内外面スス付着 底部外面剝削
5	土師器 坏	140×68×37 ロクロ成形 体部下端に稜をもち口縁大きく外反し開く 全体に歪みをもつ 外面 胴部下半～下端ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	暗褐色 普	砂粒 雲母	3/4	
6	土師器 坏	127×60×38 ロクロ成形 体部下端に稜をもち口縁大きく外反し開く 口縁上端は歪みをもつ 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐色 悪	砂粒 雲母	3/4	

7	土師器 坏	139×73×40 ロクロ成形 体部下端丸みをもつ 口縁大きく外反 外面 底部一回転糸切り	暗茶褐色 青	砂粒 雲母	2/3	
8	土師器 坏	(166)×60×46 ロクロ成形 体部下端に稜をもち体部外傾 口縁上端は厚みをもつ 外面 胴部ヘラケズリ 底部一回転糸切り後手持ちヘラケズリ	明橙褐色 青	砂粒	1/2	
9	土師器 坏	(140)×86×45 ロクロ成形 底部大きく体部外傾 外面 底部糸切り	橙褐色 青	砂粒	1/2	
10	土師器 坏	(161)×65×57 ロクロ成形 底部小さく 体部は下端に稜をもち外傾 口縁上端は厚みをもつ 外面 胴部ヘラケズリ 底部一回転糸切り 内面 まばらにヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒 雲母	1/2	
11	土師器 坏	(138)×70×39 ロクロ成形 口縁外反 体部下端で丸みをおびつつ外傾 外面 底部一回転糸切り	茶褐色 青	砂粒 雲母 荒い	1/2	
12	土師器 坏	136×71×44 ロクロ成形 口縁外反 全体に大きく重む 外面 底部一回転糸切り	茶褐色～ 黒褐色 青	砂粒	略定形	内黒
13	土師器 高台付坏	169×高台径(67)×(57) ロクロ成形 口縁大きく外反し上端は厚みをもつ 体部下端丸み 高台は三足各足間はアーチ型に削られる 内面 ヘラケズリ	暗褐色 青	砂粒 雲母	4/5	内外面 スス付着
14	土師器 蓋	蓋径(139)×かえり径(134)×器高(22) 体部中央に稜をもち頂部はやや平坦 つまみ欠 回転ヘラケズリ後ヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒 雲母	2/3	墨書 「生」 内黒
15	土師器 小型壺	151×95×157 口縁 稜をもつ 広口 頸部「く」の字状 外面 口縁・頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラケズリ 下半ナナ メヘラケズリ 内面 口縁ヨコナデ 頸部～胴部ヘラケズリ	橙褐色 黄	砂粒 雲母	略定形	
16	土師器 甕	228×(78)×342 輪積み 口縁外反し上端つまみあげられる 胴上半に膨らみをもつ 外面 口縁・頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラ ケズリ後ナデ 下半・下端ヘラミガキ 底部一本葉直と思われるが磨耗 のため不明瞭 内面 口縁ヨコナデ 胴部ヘラナデ	暗橙褐色 青	砂粒 雲母	1/2	
17	土師器 合付鉢	(365)×脚台径171×159 輪積み 口縁外反 脚部「ハ」の字状 外面 口縁ヨコナデ 頸部～胴上・下半ヘラケズリ 下端ヨコナ デ 底部ヘラケズリ 接合部ヘラナデ 脚部ヨコナデ 内面 口縁ヨコナデ 頸部～胴部ヘラナデ 接合部ヘラケズ リ 脚部ヨコナデ	橙褐色 青	砂粒	1/3	煮み有り
18	須恵器 壺	336×100×560 口縁外反 胴上半が張る 全体輪積み 外面 口縁・頸部ヨコナデ 胴部上半下半平行タタキ 下端ヘラ ケズリ 内面 胴部上半下半ヘラナデ 下端ヘラケズリ	暗赤褐色 黄	砂粒	3/4	
19	須恵器 甕	(258)××(257) 口縁外反しつつ上端立ち上がる 外面 口縁ヨコナデ 胴部上半格子目タタキ 下端ヘラケズリ 内面 口縁・頸部ヨコナデ 胴部上半下半ヘラナデ 一部に指頭痕	暗赤褐色 青	砂粒 雲母	1/4	
20	須恵器 甕	×××210 外面 胴部上半平行タタキ 下端ヘラケズリ 内面 全体磨耗著しく不明	暗橙褐色	砂粒 悪	胴部片	全体 輪積み
21	須恵器 瓶	××(140)×(112) 底部中央に円形周囲に本葉直の孔を対称に4箇所配 する 5箇の孔を有すると思われる 外面 胴部タタキ目 下端ヘラケズリ 内面 胴部下半ヘラナデ 下端一部に指頭痕 底部一底縁 底部外面に縄の痕あり	暗赤褐色 黄	砂粒 良	底～ 胴部片	
22	石器 打製石斧	残存長62×残存幅73×厚さ15 分合同形打製石斧 きわめて幅広 両面多に大きく磨面を残す 磨面には磨耗痕が顕著に認められ、破損後 砥石あるいは磨石のな再利用が行われた可能性も考えられる	橙褐色 青	砂粒 雲母	完形	
23	土師器 坏	118×76×48 体部下端に稜をもち直線的に傾く 深めの坏 底部 中央一回転糸切り後 底縁一手持ちヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒 雲母	完形	全体 ロクロ 墨書 体部外面

A014

検出地区 E5-58G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A011・A013・A014等がある。2軒の住居跡の重複で、上層の住居跡のA014a、下層の住居跡をA014bとする。新旧関係は下層のA014bの方が古い。

遺構 A014b 小型の隅丸長方形のプランで、北壁ほぼ中央に竈KBを持つ住居跡である。床は、ロームの平坦な床で硬化面を広く範囲に検出。床面にて小穴を5基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出。竈は北壁ほぼ中央で検出され、遺存状況は比較的良好であった。燃焼部における赤化範囲は明瞭には検出されなかった。煙道部については検出されなかった。竈の上部は、上層のA014aが作られた段階で壊されたと考えられる。

A014a 詳細は不明であるが、恐らく下層のA014bとほぼ同規模、同形状の住居と考えられる。下層の住居跡の竈KBの上層付近で、ロームを踏み固めた堅い床を部分的に検出。貼床と思われる。竈KAについては袖、天井等は検出されなかった。住居廃絶時に竈は壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。1・2層が上層のA014aの覆土で、3・13～15が同貼床のセクションと考えられる。検出された焼土は貼床セクション上に堆積していたものと考えられ、竈が壊されていた事と考え合わせると、住居廃絶時に火を焚き、人為的な埋め戻しが行われ、その後自然堆積による埋没が進行したと考えられる。A014bの覆土は4～12層が相当する。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上及び覆土上層にかけて多量に出土した。分布状況から、出土遺物の大部分は、上層の住居跡であるA014aに帰属すると考えられる。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

A015

検出地区 E5-59G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A011・A014等がある。D006と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

遺構 小型の隅丸長方形のプランと思われる。斜面に立地しているため、斜面南側の壁は検出することは出来なかった。検出できた壁については、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。床はソフトロームを踏み固めた床で、竈前で硬化面を検出している。周溝は一部で検出している。竈は北壁側で検出され、両袖とも検出され、遺存状況は比較的良好であった。煙道は壁に直行する状態で切り込まれていた。火床部の掘り込みは浅く、平坦な感じであった。赤化範囲は火床より北側の袖の内側に著しかった。天井部は検出されなかった。土層の体積状況等から、竈は壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に6層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土した。竈内から、土師器の皿形土器出土。

所見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。

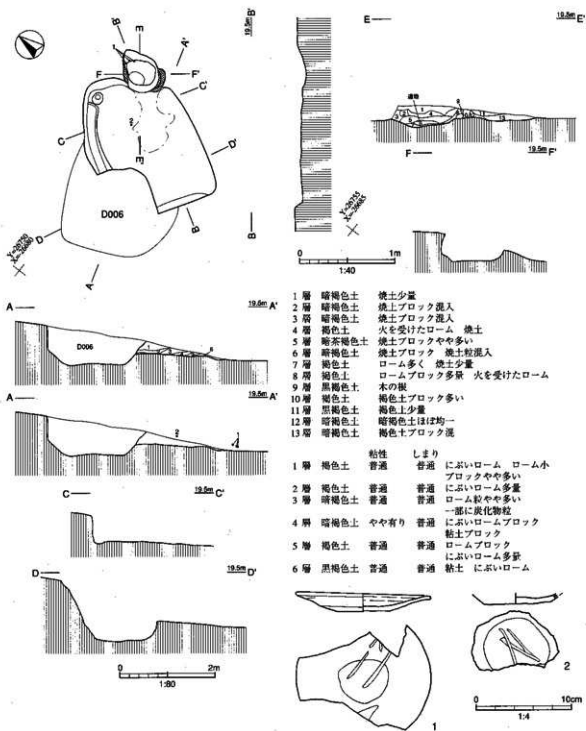


図2-4-17 A015

表2-4-8 A015遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	138×51×22 ロクロ成形 外面 胴部下端・底部-回転ヘラケズリ	明褐 青	砂粒 雲母	2/3	ヘラ書 体部-底部
2	土師器 坏	一×69×(12) ロクロ成形 外面 体部下端・底部中央-回転ヘラケズリ	明褐 良	砂粒 雲母	底部片	線刻 底部外面

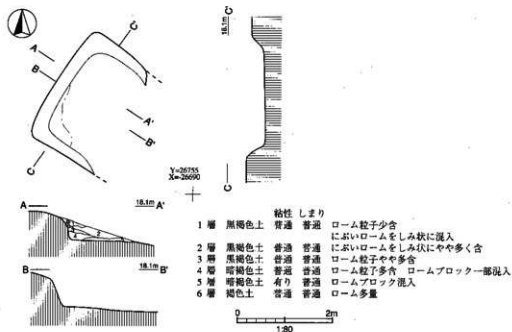


図 2-4-18 A016

A016

検出地区 E5-59G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A011・A015等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプランと思われる。斜面に立地しているため、斜面南側の壁は検出することは出来なかった。検出できた壁については、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。床はソフトロームの床で、一部を除き、やや軟弱な床であった。小穴、周溝等の付属施設は検出されなかった。竈も検出されなかった。

覆土は、色調を基本に6層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から土師器片3点、出土。

所見 燃焼施設等の住居跡としての決定要素を欠くが、出土遺物等から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。

A017

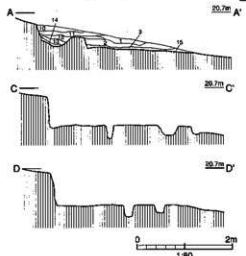
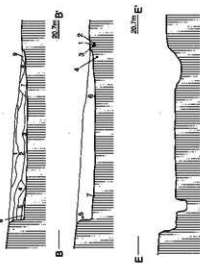
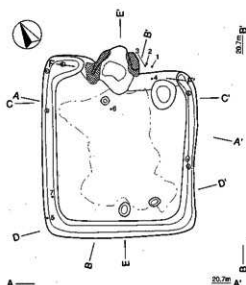
検出地区 E5-40G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A010・A011・A012・A018等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプランで、斜面に立地しているため、斜面南側の壁は僅かに検出できたに過ぎない。検出できた壁については、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。床はソフトロームを踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を広範囲に検出している。床面で小穴を4基検出した。周溝はほぼ全周している。竈は北壁側で検出され、両袖とも検出され、遺存状況は比較的良好であった。天井部は検出されなかった。土層の体積状況等から、竈は壊されたものと考えられる。

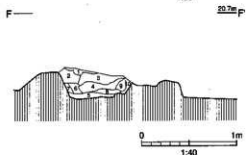
覆土は、色調を基本に15層に分層。床面に多量の粘土塊が投棄されていたことなどから人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土した。竈脇、床面直上から複数文字の墨書土器(6)が出土している。

所見 出土遺物から、平安時代の竪穴住居跡と判断した。



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	普通	しまり	ローム粒 粘土粒
2層	暗褐色土	普通		ローム粒やや多
3層	暗褐色土	普通		ローム小ブロック少量
4層	褐色土	普通		やや細かい暗褐色土
5層	暗褐色土	普通		ローム小ブロック
6層	褐色土	普通		暗褐色土ブロック
7層	褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
8層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
9層	褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
10層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
11層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
12層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
13層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
14層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒
15層	暗褐色土	普通		ローム粒 黒褐色粒



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	普通	しまり	粘土粒少
2層	褐色土	普通		粘土粒多
3層	暗褐色土	普通		ローム粒、焼土粒少
4層	暗褐色土	普通		粘土粒、焼土粒やや多
5層	暗褐色土	普通		粘土粒少
6層	暗褐色土	普通		焼土小ブロック
7層	暗褐色土	普通		ローム、ロームブロック多
8層	褐色土	普通		焼土粒少
9層	褐色土	普通		焼土少
10層	暗褐色土	普通		粘土多
11層	暗褐色土	普通		ローム粒少
12層	暗褐色土	普通		ロームブロック多
13層	褐色土	普通		ローム、粘土混入

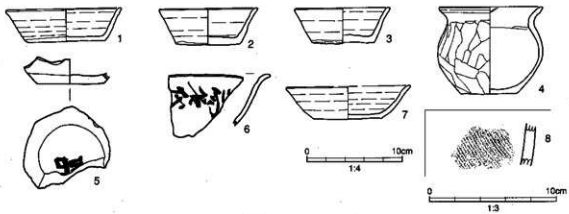


図 2-4-19 A017

表 2-4-9 A017遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	119×82×35 ロクロ成形 体部外傾 底部大きく浅い坏 体部下端・底部一回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 雲母	完形	
2	土師器 坏	105×70×39 ロクロ成形 断面台形状を呈する 底部一回転ヘラケズリ後ヘラケズリ	褐色	砂粒 雲母	完形	
3	土師器 坏	99×65×38 ロクロ成形 断面台形状を呈する 外面 底部中央一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色	砂粒 雲母	完形	
4	土師器 小型甕	108×60×94 口縁やや外反 頸部緩やかな「く」の字状 外面 口縁・頸部-ヨコナデ 胴上半-タテヘラケズリ 胴下半-底部-ヨコヘラケズリ 内面 口縁-頸部-ヨコナデ 胴部-ヘラナデ	橙褐色	砂粒 雲母	略完形	底部内面 スス付着
5	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 体部下端-ヘラ切り 底部一回転ヘラ切り 内面 体部下半-ヘラケズリ	砂明褐色 砂橙褐色	普	底部片	墨書「□」 底部外面
6	土師器 甕	—×—×— 外面 頸部-ナデ 胴部上半-縦位のヘラケズリ 内面 スス付着	橙褐色	普	口縁片	墨書「囧囧囧」 口縁外面
7	土師器 坏	(130)×(70)×35 ロクロ成形 口縁外反 体部下半に丸みを持つ 胴部下端・底部一回転ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 雲母	2/3	
8	弥生 甕	胴部中位 附加糸縄文	暗褐色	普	胴部片	

A018

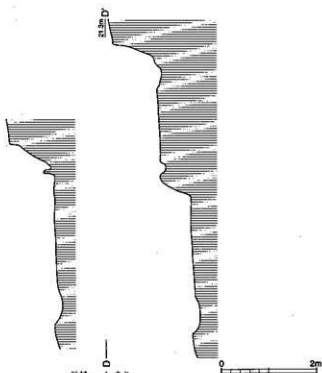
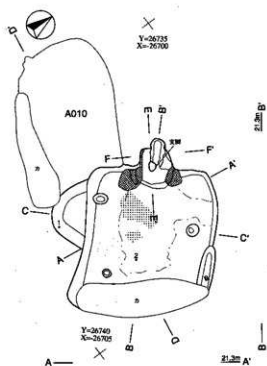
検出地区 F5-31G。台地斜面部に立地する。A010と重複するが、重複部分が僅かな為、新旧完形までは明らかにし得なかった。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A010・A017等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームを踏み固めた床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出。床面に小穴を3基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は、一部で検出した。竈は西壁側で検出され、両袖とも検出され、遺存状況は比較的良好であった。燃焼部にて支脚が出土。煙道部の状況から、同一の場所で竈の作り換えが行われた模様で、煙道の長いタイプの竈から煙道の短いタイプの竈に作り替えたようである。天井部は検出されなかった。土層の堆積、周辺での粘土の検出状況等から、竈は壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。床面に多量の粘土が検出されたこと、焼土が検出されたことなどから人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土上層から少量出土した。また、覆土中から、縄文前期（黒浜式）の土器片も少量出土した。

所見 出土遺物から、平安時代の堅穴住居跡と判断した。また、上層にて別の土坑と重複関係にあったが、新旧関係まで明らかにし得なかった。



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	黒褐色土	普通	普通	に多いローム粒少含
2層	暗褐色土	普通	普通	に多いロームと黒褐色土ブロックをほぼ同量含
3層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック多含 粘土粒少含
4層	黒褐色土	普通	普通	ロームブロック混じる
5層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒やや多含
6層	暗褐色土	普通	普通	ロームブロック少含 S層より暗い
7層	暗褐色土	普通	普通	黒褐色土ブロックやや多含 ソフトブロック少含
8層	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロックをしみ状混じる
9層	暗褐色土	普通	普通	に多いロームブロックと焼土粒混じる
10層	暗灰褐色土	有り	やや有り	粘土多含
11層	褐色土	普通	普通	に多いローム多含
12層	黒褐色土	普通	普通	ローム粒少含
13層	黒褐色土	普通	普通	ロームブロック少含
14層	暗褐色土	普通	普通	焼土粒極少混含 鈍いロームブロック少含
15層	暗黄褐色土	普通	普通	ロームブロック
1層	暗褐色土	なし	普通	黒褐色土やや多含 ロームブロック混じる
2層	暗褐色土	なし	なし	やや暗褐色土と黒褐色土を多含 ローム粒、焼土粒少し混じる
3層	暗褐色土	なし	なし	ローム粒、焼土粒やや混じる
4層	暗褐色土	なし	なし	ローム粒、焼土粒混じる
5層	暗黄褐色土	なし	なし	焼土多含
6層	明黄褐色土	なし	なし	ロームブロック
7層	褐色土	なし	なし	火を受けたローム粒、焼土多含
8層	黒褐色土	なし	普通	ローム粒、焼土粒含
9層	黒褐色土	なし	なし	ローム粒、焼土粒少含
10層	褐色土	なし	なし	火を受けたロームブロック多含
11層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒主体
12層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒含
13層	黄褐色土	普通	普通	ソフトローム主体
14層	暗褐色土	普通	普通	ローム粒やや多含



図 2-4-20 A018

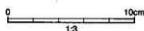


図2-4-21 A018(2)

表2-4-10 A018遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 甕	胴部-タタキ	黒色 青	青	口縁片	
2	深鉢 縄文	□唇部 やや内割ぎ気味の円頭状 乾燥があまり進んでいない時点で施文。 摺りの細かい2段LRと摺りのやや粗い2段LRの2種類の原形で 羽状施文する。	暗褐色 青	青 繊維含む	口縁片	黒派式

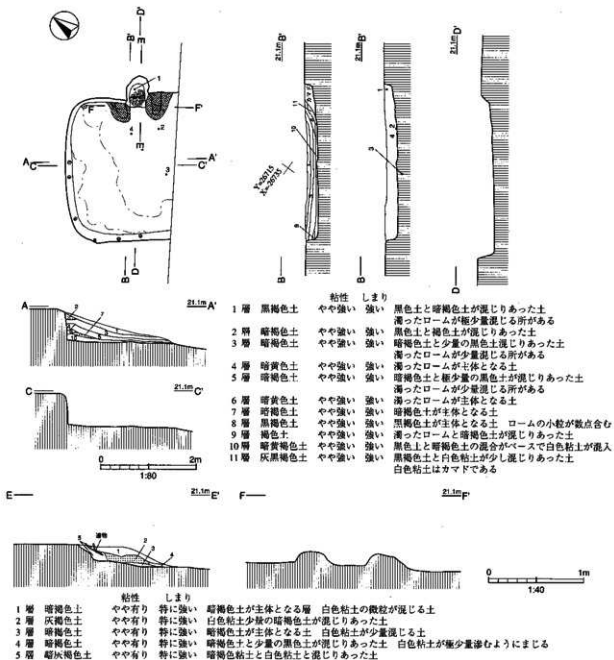


図2-4-22 A019

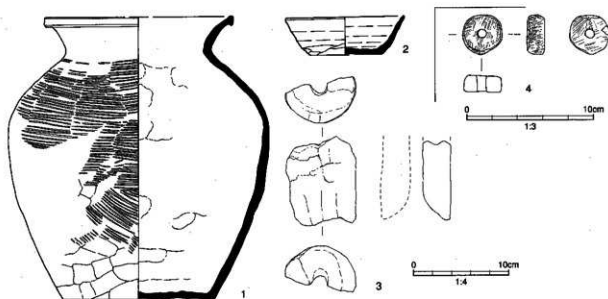


図2-4-23 A019(2)

表2-4-11 A019遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	須恵器 甕	(196)×160×(300) 輪積み 広口の甕 肩部が張る 口縁一部内外面一横ナデ 内面 口縁一部一横ナデ ナデ一部指頭圧痕ヘラナデ 外側 胴上下半タタキ 下端一ヘラケズリ	灰色 悪	粗砂粒	1/3	
2	須恵器 坏	123×75×40 口縁やや外反 胴部下端一底部一手持ちヘラケズリ	灰色 普	粗砂粒	略完形	
3	土製品 羽口	残存長(87)×残存幅(73)×残存30 孔はほぼ中心に作られる 外面はケズリナデにより平滑に仕上げられる			断片	
4	石製品 紡錘車	上部径28×下部径31×高さ14 孔径8 角張った円形 孔はほぼ中心に穿たれる 全面とも研磨される			完形	

A019

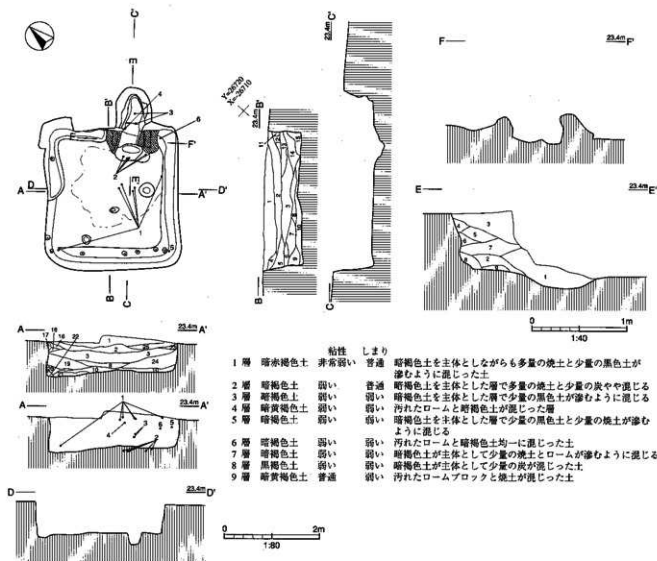
検出地区 F5-14G。台地斜面部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居としてA008等がある。

遺 構 小型の隅丸方形のプラン。住居跡南側は斜面の為、検出できなかった。床はロームを突き
抜け、白色粘土層を床面としており、住居跡壁際では一部、暗褐色土・ロームを混ぜ、貼り床として
いる部分もある。小穴等の付属施設は検出されなかった。壁は下半が粘土、上半がロームの壁では垂直
に立ち上がる。周溝は検出されなかった。竈は東壁側で検出。両袖とも検出され、遺存状況は比較的良
好であった。燃焼部にて明瞭な火床を検出している。竈土層断面から明瞭な天井部のセクションを
検出し、土層の堆積状況等から、竈天井部は自然崩落したと考えられる。

覆土は、色調を基本に11層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から須恵器片を中心に少量出土した。竈煙道部から須恵器の甕形土器の大型破片が
出土。竈祭祀に関連するものか。また、覆土中から縄文早期(条痕文系)土器の混入が見られる。

所 見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。輪の羽口が出土していることか
ら、近隣に鍛冶遺構があったことが窺える。



層	土質	粘性	しまり	説明
1層	暗赤褐色土	非常弱い	普通	暗褐色土を主体としながらも多量の焼土と少量の黒色土が滲むように混じった土
2層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土を主体とした層で多量の焼土と少量の炭や混じる
3層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土が滲むように混じる
4層	暗黄褐色土	弱い	弱い	汚れたロームと暗褐色土が混じった層
5層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量の焼土が滲むように混じる
6層	暗褐色土	弱い	弱い	汚れたロームと暗褐色土均一に混じった土
7層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土が主体として少量の焼土とロームが滲むように混じる
8層	黒褐色土	弱い	弱い	暗褐色土が主体として少量の炭が混じった土
9層	暗黄褐色土	普通	弱い	汚れたロームブロックと焼土が混じった土

層	土質	粘性	しまり	説明
1層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土を主体とした層で多量のロームと少量の黒色土が滲むように混じる
2層	黒褐色土	弱い	普通	黒色土を主体とした層で少量の暗褐色土と少量のロームが滲むように混じる
3層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と多量のロームが滲むように混じる
4層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
5層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
6層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
7層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土が主体として極少量の黒色土が滲むように混じる層で所々にロームを多く含む
8層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土が主体として極少量の黒色土が滲むように混じる層で直径3cm程度のロームブロックが混じる
9層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
10層	暗黄褐色土	普通	強い	汚れたローム主体とした層で少量の暗褐色土が滲むように混じる
11層	暗黄褐色土	強い	普通	汚れたローム主体とした層で極少量の暗褐色土が滲むように混じる
12層	暗褐色土	弱い	普通	暗褐色土の均一な層で少量のロームが滲むように混じる
13層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土が滲むように混じる
14層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
15層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土が滲むように混じる
16層	暗褐色土	弱い	弱い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
17層	暗黄褐色土	弱い	弱い	汚れたロームと暗褐色土が均一に混じった層
18層	黒褐色土	弱い	弱い	黒色土を主体とした層で少量の暗褐色土と少量のロームが滲むように混じる
19層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
20層	黒褐色土	弱い	弱い	黒色土を主体とした層で少量の暗褐色土と少量のロームが滲むように混じる
21層	暗黄褐色土	弱い	弱い	汚れたローム主体とした層で極少量の暗褐色土が所々に混じった床直層である
22層	暗黄褐色土	普通	強い	汚れたロームと暗褐色土が均一に混じった床直層である
23層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と少量のロームが滲むように混じる
24層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土を主体とした層で少量の黒色土と多量のロームが滲むように混じる
25層	暗褐色土	弱い	強い	暗褐色土を主体としながらも多量の黒色土が滲むように混じり極少量にロームが滲むように混じる

図 2-4-24 A020

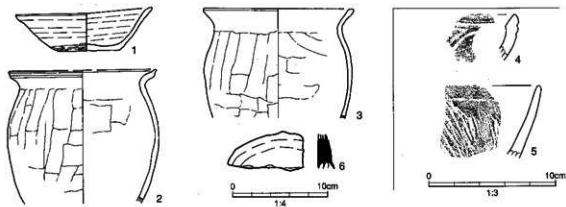


図 2-4-25 A020(2)

表 2-4-12 A020遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 環	142×63×45 ロクロ成形 底部小さく 口縁開く 胴部下端～底部～ヘラケズリ 全体～最後ヘラミガキが施される	暗褐色 良	砂粒	3/4	
2	土師器 小形甕	(154)×-(142) 口縁凹線状の調整上端をつまみ上げる 外面 口縁頭部横ナデ 胴上半～縦ヘラケズリ 下半～横ヘラケズリ 内面 横ナデ ヘラナデ	橙褐色 普	砂粒	口縁～ 胴部片	内面ス付着
3	土師器 甕	(155)×-(116) 口縁外反頭部「く」の字状 外面 口縁～頭部横ナデ 胴上半縦ヘラケズリ 下半横ヘラケズリ 内面 口縁～頭部横ナデ ヘラナデ	暗橙褐色 普	砂粒	口縁～ 胴部片	
4	縄文 深鉢	-×-×- 口縁断面三角状を呈し内面に稜を持つ 口縁～口唇部に沿って押し引き裏下に弧状三角形のモチーフを表出する	暗褐色 良	砂粒	口縁片	
5	縄文 深鉢	-×-×- 波状口縁? 口縁～口縁下に横位に惣紋一乗辻痕 以下は惣糸文回転	明褐色 普	砂粒	口縁片	花輪台式
6	須恵器 蓋	-×-×- ロクロ成形	灰白色 普	普		転用硯か?

A020

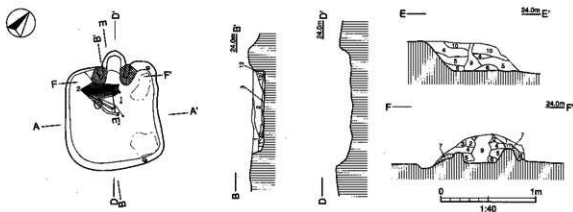
検出地区 F5-11G。台地先端部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居としてA008等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプランと思われるが、床はロームの床で、住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出した。床面から小穴3基を検出した。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周ほど検出され、竈下には周溝は廻っていない。竈は東壁側で検出され、煙道部の長いタイプの竈であった。両袖とも検出され、遺存状況は比較的良好であった。燃焼部に明瞭な火床は検出されなかった。天井部は平面、断面とも明確には検出されなかった。以上の状況から竈は住居跡廃絶時に壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に25層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土した。縄文中期の土器の細片の混入が比較的多かった。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。縄文土器の混入が多いことは、本住居跡が縄文時代の遺物包含層区域に位置すること、自然堆積による埋没による為と思われる。



0 1.80 2m

30000
A=30710

層	土質	粘性	しまり	説明
1層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム、褐色土やや多
2層	暗褐色土	普通	普通	にぶいローム、ロームブロック少量
3層	明褐色土	やや硬い	やや強い	ローム、ローム粒多
4層	褐色土	普通	普通	ローム、ローム粒多
5層	明褐色土	やや有り	普通	ローム、ローム粒主体
6層	暗褐色土	普通	普通	黒褐色土
7層	褐色土	普通	普通	褐色土主体
8層	褐色土	普通	普通	ローム、ローム粒多
1層	黒褐色土	弱い	普通	暗褐色土少、ローム極少
2層	暗褐色土	弱い	普通	黒色土多
3層	暗灰褐色土	普通	弱い	暗褐色土と粘土が混在
4層	暗赤褐色土	弱い	弱い	多量の焼土と粘土が混在
5層	暗赤褐色土	弱い	普通	焼土と粘土が混在
6層	暗褐色土	弱い	普通	焼土少 黒色土少
7層	暗灰褐色土	普通	普通	粘土多 黒色土少
8層	暗褐色土	弱い	普通	黒色土少
9層	暗黄褐色土	弱い	普通	汚れたロームと暗褐色土が混在
10層	暗褐色土	弱い	普通	黒色土少 ローム極少 少量の焼土混在

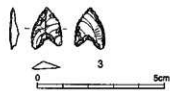
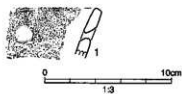
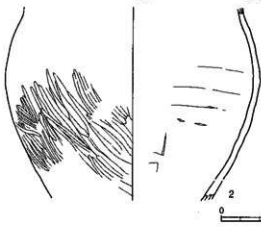


図 2-4-26 A021

表 2-4-13 A021遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 或形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 補修孔が穿たれる 内面は研磨される	明褐色 青		口縁片	早期?
2	土師器 壺	-X-X-(207) 外面 胴部上半-ナデ 下半-下端-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 胴部上半-ヘラナデ一部に輪積み痕	砂粒褐色 色暗褐色 青	砂粒 雲母	胴部片	
3	縄文 石皿	16.5×12×3 無蓋凹基式 表から側縁かくすように調整剥離を行わないで形を仕上げる 表面からは剥離は極少ない。 ノッチ部は表裏から丁寧な剥離を行っている。				黒曜石

A021

検出地区 F5-1G。台地先端部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A009等がある。
遺構 小型の隅丸方形のプランと思われるが、床はロームの床で、全体的にはやや軟弱であった。床面から小穴1基を検出した。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されなかった。竈は北壁側で検出され、遺存状況は比較的良好であった。両袖とも残り焼部にて明瞭な火床は検出されなかった。天井部も平面、断面とも明確には検出されなかった。以上の状況から竈は住居跡廃絶時に壊されたものと考えられる。

覆土は、色調を基本に8層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土した。覆土上層からの出土が多いこと縄文土器の細片の混入が比較的多かった。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。縄文土器の混入が多いことは、A020同様本住居跡が縄文時代の遺物包含層区域に位置すること、自然堆積による埋没によるものと思われる。

A022

検出地区 E5-8G。台地平坦部に立地する。他の奈良・平安時代の堅穴住居から若干離れて立地しているが、近隣の奈良・平安時代の堅穴住居として、A009が挙げられる。

遺構 小型の隅丸長方形のプランで、住居跡北隅に竈を持つ。床はロームの平坦な床で、床面に小穴を3基検出している。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。竈は北隅に寄っているが煙道部は壁に直行していた。攪乱を受けていた為、片袖はほとんど残っていなかった。焼部には明瞭な火床及び赤化範囲は検出されなかったものの、煙道部は明瞭に赤化していた。

覆土は、色調を基本に15層に分層。概ね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上及び覆土上層から少量に出土している。(1)・(2)は灯明皿としての使用が考えられ、(2)・(3)は床面直上で重なって出土した。

所見 出土遺物から、奈良時代の堅穴住居跡と判断した。住居跡隅に竈を持つ長方形の住居跡で、同様の堅穴住居跡として、A010・A022等がある。或いは有機的な関連があるかもしれない。

A023

検出地区 E5-85G。台地斜面部に位置する。他の奈良・平安時代の堅穴住居から若干離れて立地し、他の住居跡より低い部分に立地する。近隣の奈良・平安時代の堅穴住居として、A013等が挙げられる。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの平坦な床で、やや軟弱な床である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝、竈、その他、付属施設は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に26層に分層。概ね自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 床面直上～覆土上層に於て少量出土している。覆土上層からの出土が多く、床面直上からの出土は少ない傾向にあった。覆土中から墨書土器、鉄滓出土。

所見 竈が検出されない為、確証を欠くが遺構の形態、規模、覆土、出土遺物等から、奈良・平安時代の堅穴住居跡と判断した。遺構の立地、形態、規模覆土の状況などが、A016と類似する。

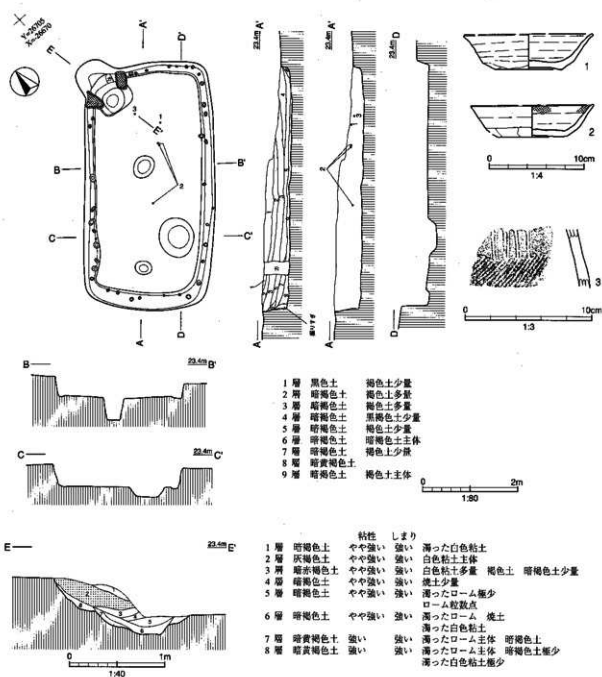


図 2-4-27 A022

表 2-4-14 A022遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	136×70×38 ロタロ成形 口縁外反 体部下端底部ヘラケズリ	暗褐色 青	砂粒	2/3	
2	土師器 坏	(128)×70×34 ロタロ成形 体部外傾 体部下端底部ヘラケズリ	橙褐色 青	砂粒	1/2	口縁内面 ケール状付着物
3	弥生 麦	-×-×- 胴部 4本歯の櫛状工具による縦区画 胴部 附加縄文				胴部～ 胴部片

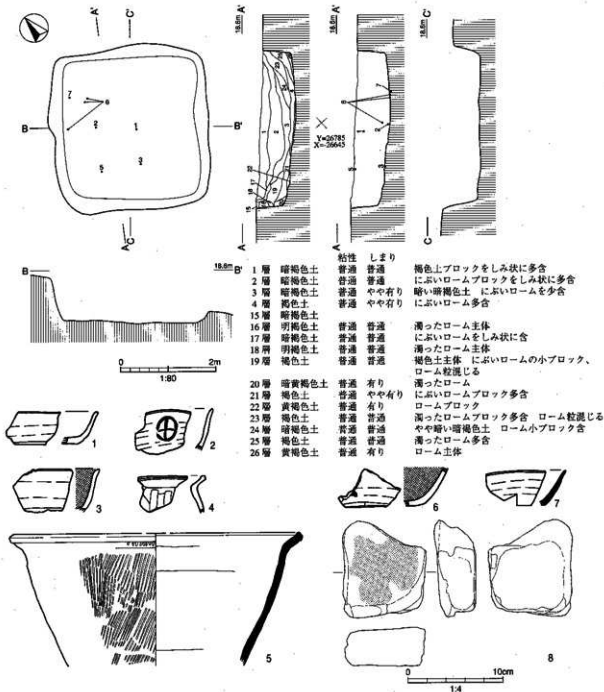


図 2-4-28 A023

表 2-4-15 A023遺物観察表

(単位mm)

No	種別	法量	口径×底径×器高	色調	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	-X-X- ロクロ成形	底部一回転糸切りの後、周辺ヘラケズリ 体部下層ヘラケズリ	褐色 普	普	口縁~ 底部片	
2	土師器 杯	-X-X- ロクロ成形		橙褐色 普	普	口縁片	墨書「□」記号 体部外面
3	土師器 杯	-X-X- ロクロ成形	体部内面一丁寧なミガキを施す。	◎褐色 ◎黒色	普	口縁片	内黒

4	土師器 小型壺	一×一×一 胴部～腹位のヘラケズリ	赤褐色 青	青	口縁片	
5	須恵器 埴	(300)×一×(142) 口縁外反し縁をもつ 上端内面 外面 口縁タキヨコナデ 胴部～胴上半 タタキ 内面 ヨコナデ	暗灰色 良	粗砂粒 雲母	口縁片 ～削	
6	土師器 坏	一×一×一 口ロ口成形 外面 体部下端～ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキ	砂明褐色 砂黒色	青	底部片	墨書「口」 体部外面 内黒
7	須恵器 坏	一×一×一 口ロ口成形	灰色 青	青	口縁片	
8	石器 砥石	104×88×41 523.7g 砥面を残す 砥面は他面も使用されたものと思われるが現存不明				

表 2-4-16 奈良・平安整穴住居跡第 1 群一覽表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	熱線施設・位置 周溝・備考
A008	F5-12G	隅丸方形 3.4×3.16×0.54 N-27°-E 床面直上～覆土上層にかけて 多量に出土	床面 ロームを踏み固めた床で中央部で硬 化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に12層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 北壁ほぼ中央に位置 する煙道の長いタイプ 周溝 3/4 周する 周溝幅 0.2m 主柱穴 不明
A009	E5-10G	隅丸長方形 4.0×2.1×0.4 N-47°-E 床面直上～覆土上層にかけて少量出土	床面 ロームの平坦な床で全体的にはやや 軟弱な床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に15層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 北隅に位置する 周溝 3/4 周する 周溝幅 0.1m 主柱穴 不明
A010	F5-31G	隅丸長方形 一×一×0.56 N-82°-W 床面直上～覆土上層にかけて少量出土 墨書土器3点出土	床面 ロームの平坦な床で住居跡整部で硬 化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻 しの後自然堆積による埋没	竈 南西隅に位置する 周溝 3/4 周する 周溝幅 0.8m 主柱穴 不明
A011	E5-50G	隅丸方形 3.46×2.64×0.56 N-11°-E 床面直上及び覆土上層から比較的多量 に出土 墨書土器鉄滓	床面 ロームの平坦な床で住居跡中央部で 硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に30層に分層 人為的な埋め戻 しの後自然堆積による埋没	竈 2基検出 周溝 コーナー部2ヶ所 で検出 周溝幅 0.26m 主柱穴 不明
A012	E5-40G	隅丸方形 3.60×3.60×0.64 N-69°-W 床面直上及び覆土上層から比較的多量 に出土 A011出土遺物と接合	床面 ロームの平坦な床で住居跡中央部で 硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に16層に分層人為的な埋め戻 しの後 自然堆積による埋没	竈 西壁ほぼ中央に位置 する 周溝 約1/2周する 周溝幅 0.16m 主柱穴 不明
A013	E5-67G	隅丸方形 3.5×3.48×0.50 N-53°-E 床面直上及び覆土上層から多量に出土	床面 白色粘土と暗褐色土の混合土で張り 床としている 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に14層に分層 概ね自然堆積に よる埋没が想定される	竈 東壁でほぼ中央に位 置する 周溝 約1/2周する 周溝幅 0.3m 主柱穴 不明
A014	E5-58G	隅丸長方形 3.80×3.21×0.58 N-29°-E 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	床面 ロームの平坦な床で硬化面を広範囲 に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る 色調を基本に12層に分層 新旧住居跡とも 人為的な埋め戻しが想定される	竈 北壁中央で2基検出 周溝 一部で検出 周溝幅 0.36m 主柱穴 不明

A015	E5-59G	隅丸長方形? 2.96×0.3×0.46 N-50°-E	床面 ソフトローンを踏み固めた床で磁器で硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 北壁側に位置する 周溝 一部で検出 周溝幅 0.22m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層から多量に出土	色調を基本に14層に分層概ね自然堆積による埋没が想定される	
A016	E5-59G	隅丸長方形 -×-×- —	床面 ロームの床で一部を除きやや軟弱な床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		覆土中から土師器片3点出土	色調を基本に6層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A017	E5-40G	隅丸方形 3.40×3.31×0.32 N-31°-E	床面 ロームを踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 北壁ほぼ中央に位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.2m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土した 複数文字の墨書土器出土	色調を基本に15層に分層 概ね人為的な埋め戻しが想定される	
A018	F5-31G	隅丸方形 -×2.16×0.5 N-54°-W	床面 ロームを踏み固めた床で住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 西壁ほぼ中央に位置する竈の作り替えを行う 周溝 一部で検出 主柱穴 不明
		覆土上層から少量出土 覆土中から縄文土器も少量出土	色調を基本に15層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	
A019	F5-14G	隅丸方形 3.06×-×0.54 N-54°-E	床面 白色粘土を床としている 一部ロームの混合土で床を貼っている 壁 下半は粘土の、上半はロームの壁	竈 東壁側に位置する 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		覆土中から須恵器片を中心に少量出土	色調を基本に11層に分層自然堆積による埋没が想定される	
A020	F5-11G	隅丸長方形 3.0×2.7×0.76 N-48°-E	床面 ロームの床で住居跡中央部で硬化面を広範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 東壁側に位置し煙道の長いタイプ 周溝 3/4 周 周溝幅 0.3m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて比較的に多量出土 縄文少量	色調を基本に25層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A021	F5-1G	隅丸方形 2.2×1.96×0.3 N-35°-W	床面 ロームの床で全体的にやや軟弱 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	竈 北壁ほぼ中央に位置する 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて比較的多量に出土 覆土上層での出土量多し	色調を基本に13ヶ所に分層 概ね自然堆積による 埋没が想定される	
A022	E5-8G	隅丸方形 7.48×2.28×0.56 N-3°-E	床面 ロームの平坦な床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 北側に位置する 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 0.12m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土 覆土上層からの出土量が多い	色調を基本9層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	
A023	E5-85G	隅丸方形 3.50×3.88×0.72 N-3°-E	床面 ロームのやや軟弱な床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る	竈 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		床面～覆土上層にかけて少量出土 墨書土器 鉄滓出土	色調を基本26層に分層 概ね自然堆積による埋没が想定される	

2 土坑及びその他の遺構

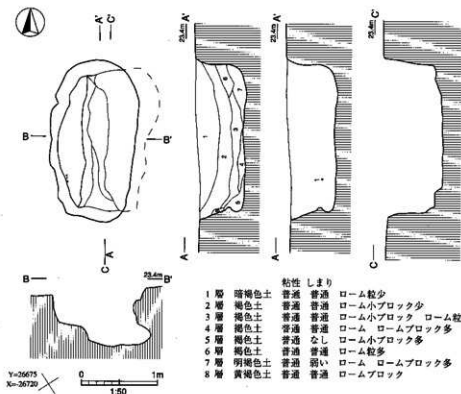


図2-4-29 D002

D002

検出地区 F4-72G 台地先端部に位置する。他の奈良・平安時代の遺構から離れ孤立して立地する。
 遺構 隅丸長方形の土坑で、一部オーバーハングしている。底面はROMの底部で、一段テラス状の平地を持つ。双方とも平坦な堅い底面である。壁もROMの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に8層に分層され、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中から土器小破片が2点（内1点は弥生土器）出土。

所見 遺構の規模、形状、覆土の観察から、奈良・平安時代の土坑墓と考えられる。類例として役山東遺跡、D002・D003、等が挙げられる（註1）。

註1 『栗谷遺跡-第3分冊-』 2004 八千代市遺跡調査会

D003

検出地区 F5-12G。台地先端部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A020等がある。A008と重複関係に有り、本土坑の方が新しい。

遺構 A008の覆土上層で構築されている。遺構下部は全体的に粘土を貼り、上部は、白色粘土を馬蹄形状に廻らしている。上部の粘土は熱を受け赤化している。また、遺構周囲から多量の焼土を検出している。

遺物 粘土の途切れた部分から籾の羽口が出土した。

所見 遺構の検出状況及び遺物出土状況から、奈良～平安時代の鍛冶遺構と考えられる。本遺構に伴う上屋等の存在は明らかにしえなかった。精錬炉のような本格的なものではなく、所謂、小鍛冶遺構と判断した。

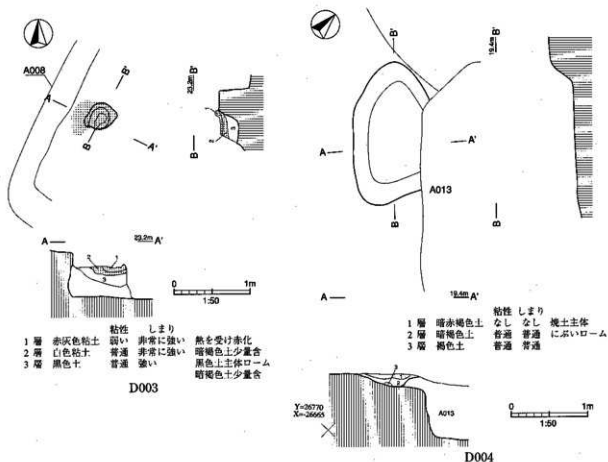


図 2-4-30 D003・D004

D004

検出地区 E5-67G。台地斜面部に位置している。A013と重複関係にあるが、本土坑の方が新しい。

遺構 楕円形のプランで、底部はほぼ平坦、壁はなだらかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。覆土最上層からは明瞭な焼土を検出している。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 詳細は決めかねる部分もあるが、遺構の形状、覆土の観察等から、奈良・平安時代の小鍛冶遺構或いは土師器の焼成坑と思われる。

D005

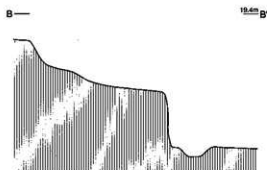
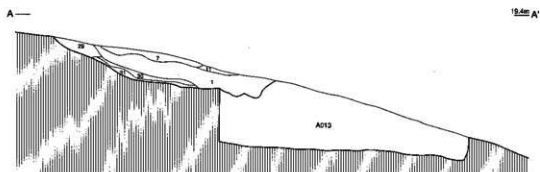
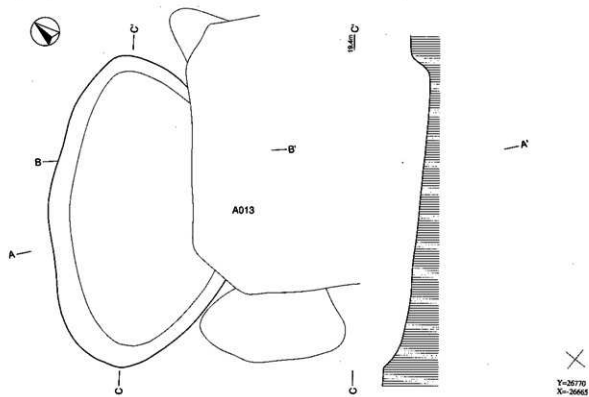
検出地区 E5-67G。台地斜面部に位置している。A013と重複関係にあるが、本土坑の方が新しい。

遺構 楕円形のプランで、底部はほぼ平坦、壁はなだらかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に7層に分層。ロームブロックの混入が多く、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土。輪の羽口が2点出土。

所見 詳細は決めかねる部分もあるが、遺構の形状、覆土の観察、出土遺物等から、奈良・平安時代の鍛冶関連遺構と思われる。



層	土質	粘性	しまり	説明
1	黒褐色土	普通	普通	褐色土ブロック少量しみ状に混じる
7	褐色土	普通	普通	
11	黄褐色土	普通	普通	ロームブロック混じる
24	明褐色土	普通	普通	濁ったローム主体 ロームブロック少含
29	暗褐色土	普通	普通	褐色土ブロックがしみ状に混じる
30	暗褐色土	普通	普通	褐色土がしみ状に多含
31	褐色土	普通	普通	にぶいローム多含

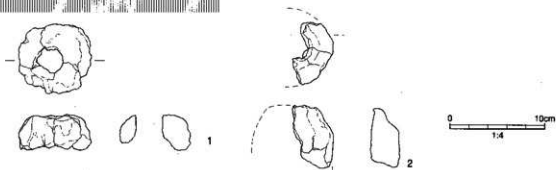


図 2-4-31 D005

表 2-4-17 D005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 轆羽口	長軸(37)×短軸(76)× 断面台形状を呈する 上端は黒色ガラス質		砂 一部スサ 入り?	断片	
2	土製品 (輪の) 羽口	長軸(67)×短軸(65)× 上端はすばまる		砂粒多 スサ入り	断片	

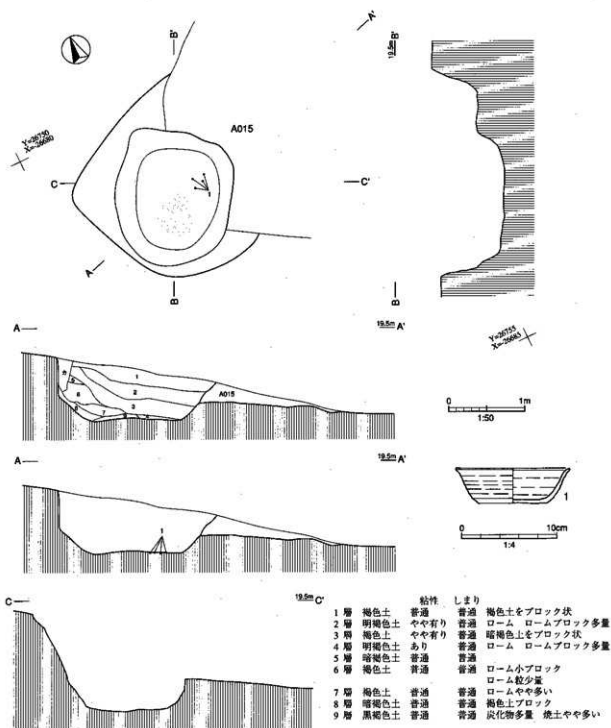


図 2-4-32 D006

表 2-4-18 D006遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(118)×(70)×37 口縁外反 体部下丸みを持つ 胴部下端一回転ヘラケズリ 底部中央一回転糸切りのち回転ヘラケズリ		暗褐色 青	砂粒 雲母	1/2	

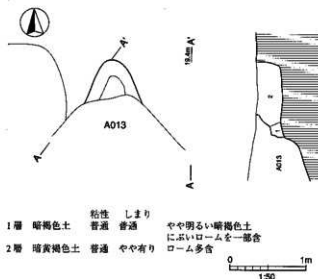


図 2-4-33 D007

D006

検出地区 E5-59G。台地斜面部に位置している。A015と重複関係にあるが、本土坑の方が新しい。

遺構 隅丸長方形のプランで、底部はほぼ平坦、壁は斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。底面直上にて焼土を検出し、ロームブロックの混入が多く、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土。底面直上から、土師器の坏が出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。用途の詳細は決めかねる部分もあるが、焼土が検出されていることから土師器の焼成坑、或いは周辺で検出されているような鍛冶関連遺構ではないと思われる。

D007

検出地区 E5-67G。台地斜面部に位置している。A013と重複関係にあるが、本土坑の方が古い。

遺構 不整形のプランで、底部はほぼ平坦、壁はなだらかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に2層に分層。

遺物 遺物は出土していない。

所見 覆土の観察等から、重複関係にあるA013の覆土と同質であることからA013とはほぼ同時期の土坑と判断した。用途等の詳細は不明である。

D008

検出地区 E5-48G。台地先端部に位置している。周辺の遺構としてD009・D010がある。

遺構 不整形円形のプランで、底部はほぼ平坦であるが中央部に向かい若干凹んでいる。斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。全体的に炭化物を含むが焼土は検出されていない。

遺物 遺物は出土していない。

所見 時期、用途の断定はできないが、周辺に小鍛冶関連の遺構の存在が想定できることから、奈良・平安時代の炭焼窯の可能性があると判断した。

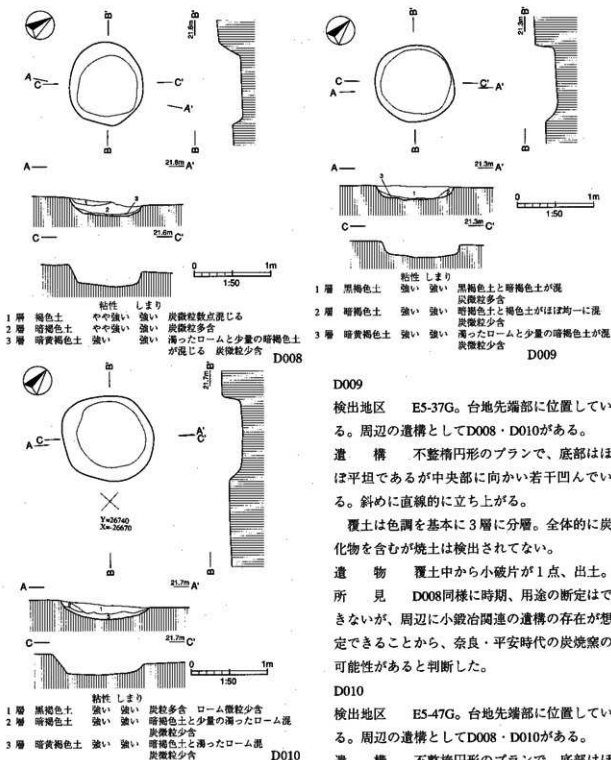


図 2-4-34 D008・D009・D010

覆土は色調を基本に3層に分層。全体的に炭化物を含むが焼土は検出されていない。

遺物 遺物は出土していない。

所見 D008～D010は隣接し、遺構の形態、規模、覆土の状況が極めて近似していることから同時期の同じ用途であると思われる。D008・D009同様に時期、用途の断定はできないが、周辺に小鍛冶関連の遺構の存在が想定できることから、奈良・平安時代の炭焼窯の可能性があると判断した。

(2) 第2群の遺構と遺物

第2群は、調査区中央の斜面地に展開する一群で、竪穴住居跡23軒、掘立柱建物跡5棟、土坑4基、時期的には、奈良～平安時代が主体になると思われる。

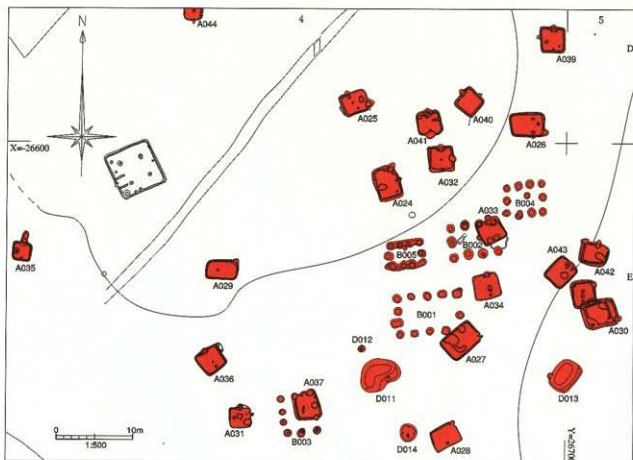


図2-4-35 奈良・平安時代第2群遺構配置図

1 竪穴住居跡

A024

検出地区 E4-71G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A025・A026・A027・A032等がある。2軒の住居跡の重複で、新しい住居跡をA024a、古い住居跡をA024bとする。

A024a

遺構 隅丸方形のプラン。床はロームと暗褐色土の混合土を踏み固めた貼床でほぼ平坦である。硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出されたが、A024bとの帰属関係が明らかにし得なかった。竈は北東隅で検出され、両袖とも検出され、遺存状況は良好であった。燃焼部はやや窪んでいた。両袖の内側が若干焼けていたが、それ以外に明瞭な赤化範囲は検出できなかった。天井部は断面で明瞭に確認され、以上の状況から竈は自然崩落したものと考えられる。

覆土は、色調を基本に12層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

A024b

遺構 隅丸長方形のプランと思われる。床はロームを踏み固めた堅く平坦な床で壁際で硬化面を検出している。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝はほぼ全周する。竈は検出されなかった。

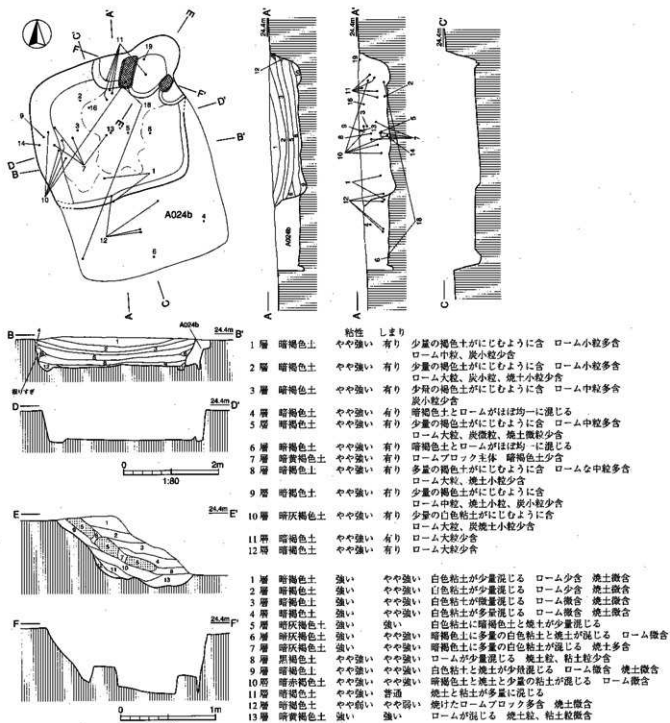
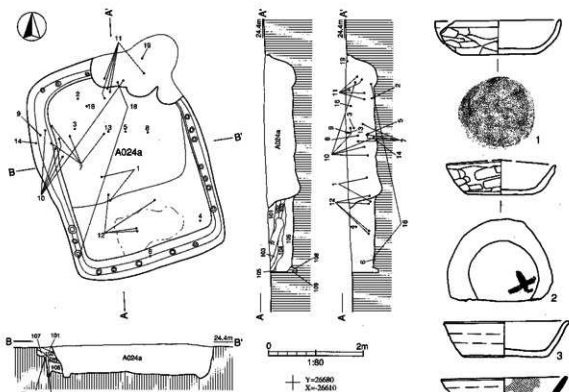


図 2-4-36 A024a

覆土は色調を基本に9層に分層され、覆土に焼土を含み、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土した。A024aからの出土が多かった。墨書土器3点出土。鞆の羽口、鉄製品等が出土している。図示はしなかったが、覆土中から灰粘陶器の細片も出土している。

所見 出土遺物から奈良～平安時代の住居跡の重複と判断した。セクションで得た所見と、遺物の接合状況で得た所見が相反する等、尚、検討の余地の残る住居跡である。



- | | | | | |
|------|-------|------|----|--|
| | 粘性 | しまり | | |
| 101層 | 暗灰褐色土 | やや強い | 有り | 少量の褐色土が滲むように含
白色粘土小粒少含 |
| 102層 | 暗灰褐色土 | やや強い | 有り | 少量の褐色土が滲むように含
白色粘土小粒少含 |
| 103層 | 暗褐色土 | やや強い | 有り | 少量の褐色土が滲むように含
ローム中粒少含 |
| 104層 | 暗灰褐色土 | やや強い | 有り | 少量の褐色土が滲むように含
ローム大粒少含 |
| 105層 | 褐色土 | やや強い | 有り | 少量の褐色土が滲むように含
褐色土とロームがほぼ均一に混じる |
| 106層 | 暗褐色土 | やや強い | 有り | 濁ったロームが滲むように含
焼土、炭大粒散点含
ローム中粒、流土、炭小粒少含 |
| 107層 | 暗褐色土 | やや強い | 有り | ローム小粒少含 |
| 108層 | 暗黄色土 | 強い | 強い | ローム主体 |
| 109層 | 暗褐色土 | | | 暗褐色土主体 |

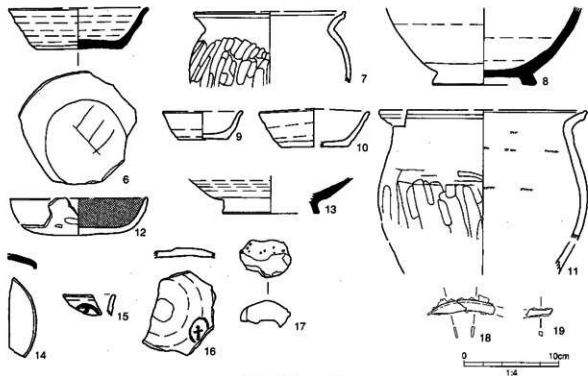


図 2-4-37 A024b

表 2-4-19 A024遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	132×78×36 体部から境に稜を持ち口径は直立する 外面 口径ヘラケズリ後ヨコナテ胴部ヘラケズリ後丁寧なミガキ底部全体木葉裏 内面 ミガキ	④褐色 ⑤橙褐色 普	普	1/3	
2	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 口径下端に若干の稜を持つ 外面 口径ナテ上半横位のヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り 内面 丁寧なミガキを施す	暗褐色 普	普	1/4	墨書 底部外面
3	土師器 坏	135×88×38 ロクロ成形 外面 底部全体静止ヘラ切り	橙褐色 普	普	2/3	
4	須恵器 坏	135×85×35 ロクロ成形 外面 下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	灰色 普	白色砂粒 少含む	完形	タール付着 体部内面
5	須恵器 坏	(130)×80×40 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り	灰白色 普	普	1/3	
6	須恵器 坏	(145)×90×43 ロクロ成形 外面 底部全体静止ヘラ切り	灰色 普	白色 砂粒少 普	1/4	線刻 釈文「□」 底部外面
7	土師器 甕	(160)×—×(75) ロクロ成形 外面 口径頸部ナテ 胴部上半細かな斜位のヘラケズリ	暗褐色 普	普	口縁片	
8	須恵器 高台付甕	—×(55)×81 ロクロ成形 外面 胴部下半ヘラケズリ	④赤褐色 ⑤灰白色 普	普	底部片	底部内面に 自然軸あり
9	土師器 坏	(84)×(52)×30 ロクロ成形 外面 底部全体回転系切り	褐色 普	普	口縁片 底部片	灯明皿
10	土師器 坏	(115)×(74)×— ロクロ成形 外面 下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り	黒褐色 普	普	口縁片 底部片	
11	土師器 甕	220×—×— ロクロ成形口径口径をつまみ上げる(常総型) 外面 口径頸部ナテ 胴部中位細かな縦位のヘラケズリ	褐色 普	普	口縁片 胴部片	
12	土師器 坏	(442)×60×39 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り	黒褐色 普	普	口縁片 底部片	内黒
13	須恵器 高台付坏	—×—×(102) ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	灰色 良	緻密	底部片	
14	須恵器 甕	—×—×— ロクロ成形	灰色 良	緻密		内面白然軸
15	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	橙褐色 普	普	口縁片	墨書「□」 体部外面
16	土師器 甕	—×—×—	④褐色 ⑤黒褐色 普	普		墨書「㊦」 内黒
17	土製品 羽口	—×—×—	④灰褐色 ⑤橙褐色	普	断片	

18	鉄器 刀子	67×11.5×2 —×11.5×3 重量6.8g			
19	鉄器	27×5×3.5 重量2.5g			

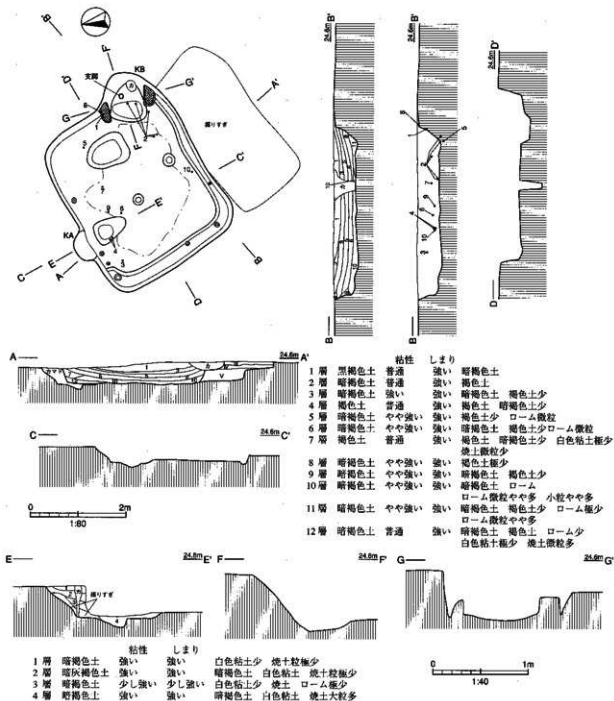


図 2-4-38 A025

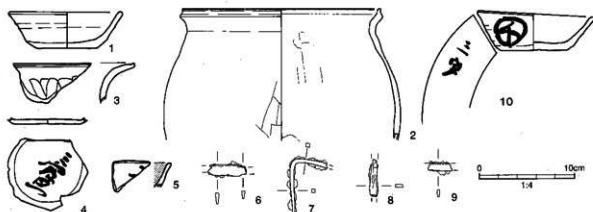


図 2-4-39 A025(2)

表 2-4-20 A025遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	121×64×38 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 底縁ヘラケズリ	褐色 青	青	2/3	
2	土師器 甕	(209)×-(141) 口縁上端はつまみ上げられ外反 外面は凹線状の調整 外面 □線頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラケズリ 器面の磨耗著しい 内面 □線頸部ヨコナデ 胴部上半ヘラナデ	橙褐色 黒	粗砂粒多 雲母	口縁片	外面に少量の コゲ状付着物
3	土師器 甕	-×-×- ロクロ成形 外面 □線ナデ 頸部～胴部縦位のヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色 青	青	口縁片	
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転ヘラケズリ	褐色 青	青	底部片	墨書「三宝」 底部外面
5	土師器 坏	-×72×- ロクロ成形	橙褐色 黒色 青	青	口縁片	墨書「口」 体部外面 内黒
6	鉄器 刀子	41×11×4 -×8×3.5 重量5.1g				
7	鉄器 鎌または 釘	59×4×4 -×3.5×4 重量8.3g				
8	鉄器 鉄鎌	39×8×3 重量3.6g				
9	鉄器 刀子	26×7.5×3 重量1.6g				
10	土師器 坏	124×70×39 ロクロ成形 底部静止ヘラ切り	橙褐色 青	青	完形	墨書「千」 「三寶」 体部外面 正位 横位

A025

検出地区 D4-80G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の竪穴住居として、A024・A026・A027・A041等がある。

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床は、住居跡壁際に関してはロームと暗褐色土の混合土による床で、住居跡中央はロームの床で良く踏み固められている。小穴を3基検出している。P1・P2は

柱穴の可能性があるが、P3については用途不明である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は1/2周する。竈は2基検出され、KAからKBへの作り替えが行われている。KAは北壁やや西側に検出され、両袖とも撤去され、燃焼部の掘り込みと煙道の跡が検出されたのみである。KBは東隅に検出され、コーナー竈である。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。燃焼部、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。燃焼部の掘り込みの中で、支脚が立ったままの状態で出土した。竈の羽口状の貫通する孔があり、羽口の再利用かもしれない。

覆土は、色調を基本に12層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。鉄製品、墨書土器の出土が目立つ。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。隅丸長方形でコーナーに竈を持つタイプの住居跡出、向境遺跡に類例を多く持つ。鉄製品の出土量の多さ、竈の羽口の可能性がある支脚が出土していること、竈前の用途不明の小穴など、小鍛冶関連の遺構である可能性もある。また、墨書土器として、三宝?の文字が見受けられることなど、仏教関連の影響を多く受けていると考えられる。

A026

検出地区 D4-100G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A024・A025・A027・A040等がある。

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床は、ロームと少量の暗褐色土の混合土による床で、住居跡南側壁際については比較的広範囲に硬化面を検出している。付属施設は小穴を3基検出している。P1、P2の2本柱の柱穴の可能性が。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は南東隅に検出されたが、煙道は壁に対してほぼ直行して切り込まれていた。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。燃焼部、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。天井部は断面にて明瞭に確認できた。竈は自然崩落したものと考えられる。

覆土は、色調を基本に13層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて比較的多量に出土した。覆土中層からの出土が多い傾向にある。墨書土器、灯明皿等の出土が目目される。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。

A027

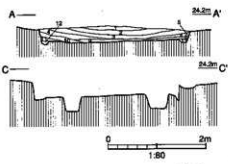
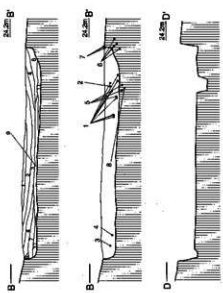
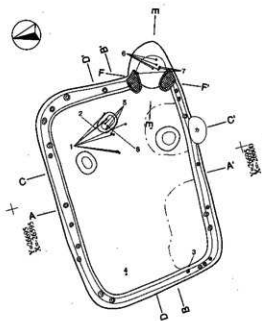
検出地区 E4-83G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A028・A034等がある。B001と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床は、基本的にはロームの床で、一部に硬化面を検出している。竈周辺については、黒褐色土とロームの混合土による床であった。全体的に良く踏み固められた床であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は3/4周する。竈は、東隅に検出され、コーナー竈である。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側に赤化している他、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。

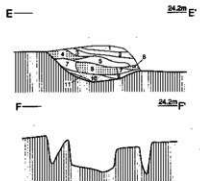
覆土は、色調を基本に9層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。検出された焼土は覆土上層からの検出である。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。赤色塗採の墨書土器(1)・(2)、竈の羽口片等の出土が目目される。

所見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。隅丸長方形でコーナーに竈を持つタイプの住居跡で、「寺」の墨書土器、羽口片が出土するなどの状況が、仏教関連の影響と小鍛冶関連遺構の影響を想定でき、住居の平面形態と合わせ、A025と共通する要素が多い。



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量 黒色土
2層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量
3層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量
4層	暗褐色土	やや強い	有り	褐色土少量
5層	暗黄褐色土	やや強い	有り	ローム主体 暗褐色土少量ほぼ均一
6層	暗褐色土	やや強い	有り	
7層	黒褐色土	やや強い	有り	
8層	黒褐色土	やや強い	有り	褐色土少量
9層	暗褐色土	やや強い	有り	
10層	暗褐色土	やや強い	有り	黒色土少量
11層	暗褐色土	やや強い	有り	ローム少量
12層				
13層	暗褐色土			褐色土少量



層	土質	粘性	しまり	特徴
1層	暗褐色土	やや強い	強い	褐色土少
2層	暗褐色土	やや強い	強い	褐色土 濡った白色粘土極少量
3層	暗灰褐色土	やや強い	強い	濡った白色粘土少量
4層	暗灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濡った白色粘土ほぼ均一
5層	暗灰赤褐色土	やや強い	強い	濡った白色粘土 焼土 暗褐色土少量
6層	暗灰褐色土	やや強い	強い	暗褐色土 濡った白色粘土ほぼ均一
7層	暗褐色土	やや強い	強い	濡った白色粘土 焼土極少量
8層	赤灰土	やや強い	強い	焼土
9層	暗褐色土	強い	強い	濡ったローム少量
10層	暗赤黄褐色土	やや強い	強い	焼土濡ったローム
11層	暗黄色土	強い	強い	濡ったローム主体

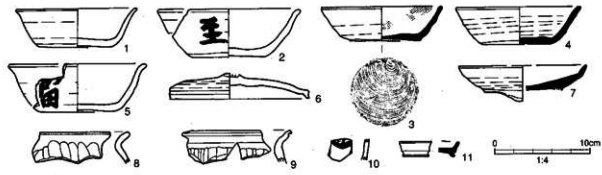


図 2-4-40 A026

表 2-4-21 A026遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	128×77×41 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐 普	普	略完形	
2	土師器 坏	150×77×51 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐 普	普	1/4	墨書「至」 体部外面正位
3	須恵器 坏	128×73×37 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り	青灰 良	緻密	略完形	
4	須恵器 坏	131×71×40 体部下端-ヘラケズリ 底部-静止ヘラ切り	灰 普	白色砂粒 多	完形	
5	土師器 坏	(146)×(80)×51 体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り	灰 普	普	1/4	墨書「至」 体部外面
6	土師器 蓋	(147)×-×(27)	褐 普	普	1/2	
7	須恵器 高台付皿	(130)×-×(39)	灰 普	砂粒	口縁片	
8	土師器 甕	-×-×- 頸部~胴上半-縦位のヘラケズリ	橙褐 普	普	口縁片	
9	土師器 甕	-×-×- 口縁~頸部-ナア 胴上半-縦位の細かいヘラケズリ	褐 普	普	口縁片	
10	土師器 坏	-×-×-	褐 普	普	体部片	墨書「口」 体部外面
11	須恵器	-×-×-	青灰 良	緻密		

A028

検出地区 E4-85G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A027・A030等がある。

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床はロームの床で、住居跡隅に硬化面を検出している。小穴1基を検出している。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。周溝は北壁で一部検出した。竈は、東隅に検出され、コーナー竈である。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が赤化している他、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。

覆土は、色調を基本に9層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて比較的多量に出土した。床面直上からの出土が多い傾向にある。赤色塗採の土師器の坏形土器(1)が出土している。また、覆土中であるが、有舌尖頭器が出土している。(2)、籾の羽口片等の出土が目される。

所見 出土遺物から、奈良~平安時代の堅穴住居跡と判断した。隅丸長方形でコーナーに竈を持つタイプの住居跡で竈の状況、覆土の堆積状況、住居の平面形態と合わせ、A026と共通する要素が多い。

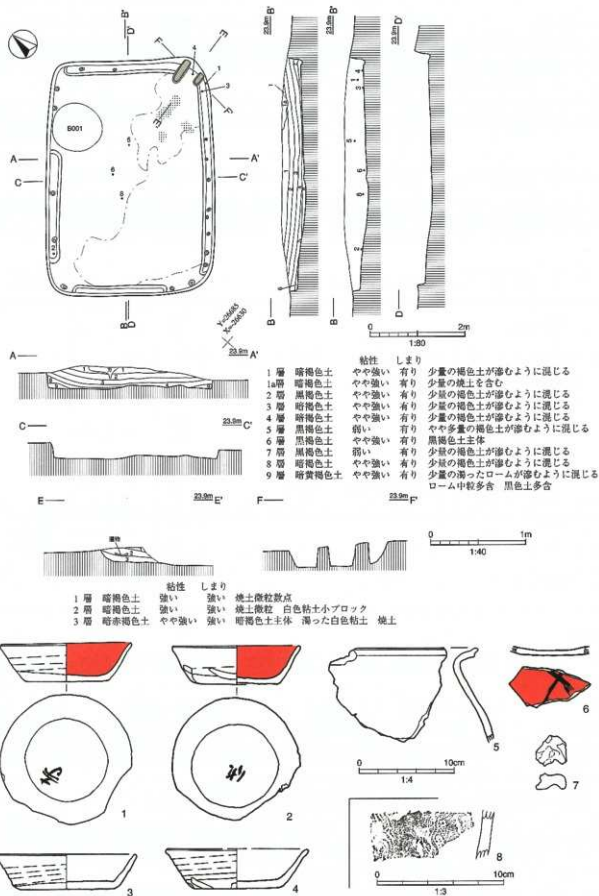


図2-4-41 A027

表 2-4-22 A027遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	136×87×40 ロクロ成形 胴部下端→ヘラケズリ 底部静止ヘラ切り	赤褐色 普	普	略完形	墨書体部外面 「寺」赤彩
2	土師器 坏	132×92×41 ロクロ成形 胴部下端→ヘラケズリ 底部→静止ヘラ切りのも底縁ヘラケズリ	赤褐色 普	普	2/3	墨書底部外面 「位」赤彩
3	土師器 坏	145×98×37 ロクロ成形 胴部下端→ヘラケズリ 底部→静止ヘラ切り 口縁内面にタール付着 灯明皿として使用	褐色 普	普	略完形	
4	土師器 坏	(146)×90×42 ロクロ成形 胴部下端→ヘラケズリ 底部全体→静止ヘラ切り	体部褐色 底部灰褐 普	白色砂粒 少量含む	1/3	
5	土師器 甕	-×-×- ロクロ成形	褐色 普	粗砂粒 少量含む	口縁片	常総型?
6	土師器 坏	-×-×- 底部内面→ミガキ	砂赤褐色 砂褐色 普		底部片	墨書 底部外面「×」 赤彩底部外面
7	土製品 輪	最大径→32 鉄分の浸透著しく器面の劣化も激しい	黒	粗	破片	
8	縄文 深鉢	-×-×-			胴部片	

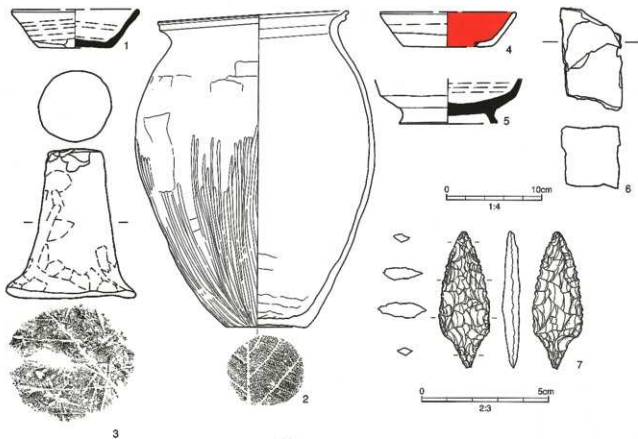


図 2-4-42 A028

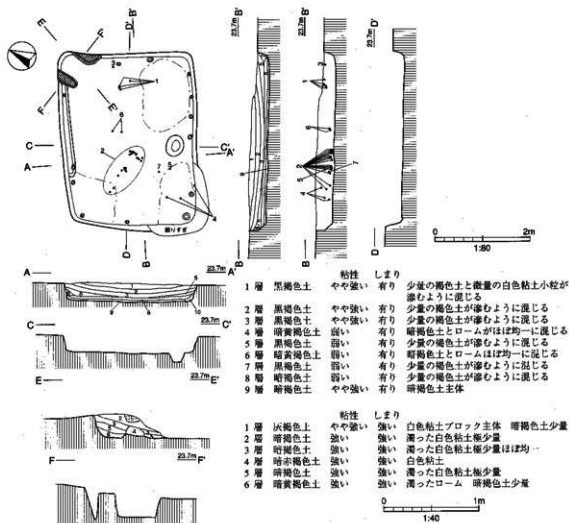


図 2-4-43 A028(2)

表 2-4-23 A028遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 坏	130×74×41 ロクロ成形 外面 底部全体静止ヘラ切り	灰白色 昔	昔		
2	土師器 甕	198×83×335 口縁外反し上端はつまみ上げられる 外面円錐状の調整網上半に膨らみを持つ 外面 口縁頸部コナダ胴部上半ヘラナダ? 下半ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 底部木炭痕 内面 口縁頸部コナダ胴部上半下半ヘラナダ 下端ヘラケズリ	微褐色 昔	粗砂粒多	略方形	
3	土製品 支脚	上部径57×下部径136×最大長158 重量1410g 手づくね	灰褐色 形	粗		
4	土師器 坏	140×94×37 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り	赤褐色 昔	昔	口縁片 ~ 底部片	赤彩
5	須恵器 高台付壺	口径—×口部径102×器高(残存)(47) ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ	青灰色 灰色 昔	昔	底部片	
6	石製品	長径94×短径61×器厚65 重量510g	赤褐色			熱を受け変化した分も多く吸着
7	石製品 有刃 尖頭器	54×20×6 表・裏面とも細かな押圧調整を行っており、その形状は横断面にいたるまで、極めてよく整っている				

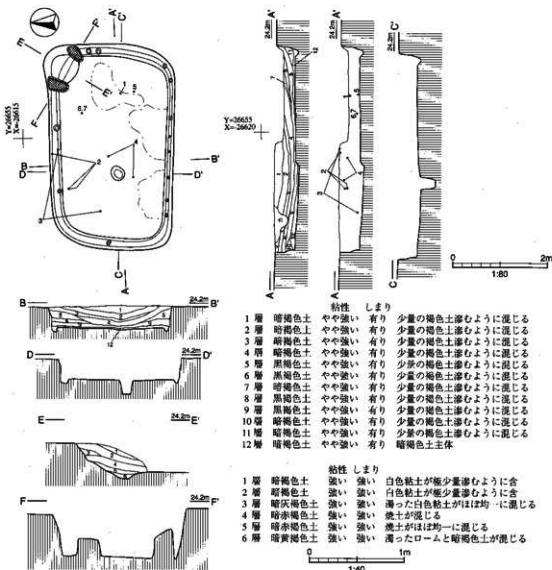


図 2-4-44 A029

A029

検出地区 E4-52G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A024・A036等がある。

遺 構 小型の隅丸長方形のプラン。床はロームの床で、一部に硬化面を検出している。小穴を1基検出し、柱穴と思われる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は、北東隅に検出され、コーナー竈である。両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が赤化している他、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。

覆土は、色調を基本に12層に分層。検出された焼土は覆土中層から上層にかけて検出された。住居跡は2度にわたり、埋没している。住居が埋没した後、新たに掘りくぼめられ、火を焚き、再び埋没したと考えられる。2回とも概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。覆土堆積状況から、(4)は2度目の埋没時に混入した可能性が高い。

所 見 出土遺物から、奈良～平安時代の堅穴住居跡と判断した。隅丸長方形でコーナーに竈を持つタイプの住居跡で、「寺」の墨書土器、羽口片が出土するなどの状況が、仏教関連の影響と小鍛冶関連遺構の影響を想定でき、住居の平面形態と合わせ、A025・A027と共通する要素が多い。

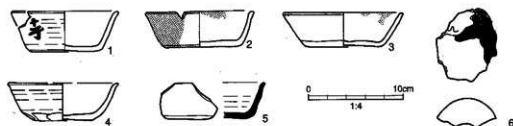


図 2-4-45 A029(2)

表 2-4-24 A029遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	112×76×43 ロクロ成形 底部全体一静止ヘラ切り 底縁ヘラミガキ	赤褐色 普	普	2/3	墨書体部外面 「寺」 内面「？」
2	土師器 坏	114×83×47 ロクロ成形 体部内外面にスス付着 底部一静止ヘラ切り未調整 灯明皿として使用	橙褐色 普	普	4/5	
3	土師器 坏	127×82×36 ロクロ成形 体部内面にスス付着 底部一静止ヘラ切り 灯明皿として使用	橙褐色 普	普	略完形	
4	土師器 坏	(116)×60×40 ロクロ成形 体部下端一ヘラケズリ 底部全体一回転ヘラケズリ	褐色 普	普	2/3	
5	須恵器 坏	—×—×38 ロクロ成形 外面の体部下端はヘラケズリ 底部切り離しは回転ヘラケズリ	灰褐色 良	緻密	口縁～ 底部片	
6	土製品 剥片	(76)×(63)×(30) 外面はスラグ票が付着している	灰褐色 橙褐色 悪	粗	破片	
7	石器 剥片	50×28×7 5.2g コアから縦長剥片として剥取り肉縁先端を使用面とする			先端部 欠損	写真掲載のみ

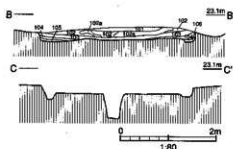
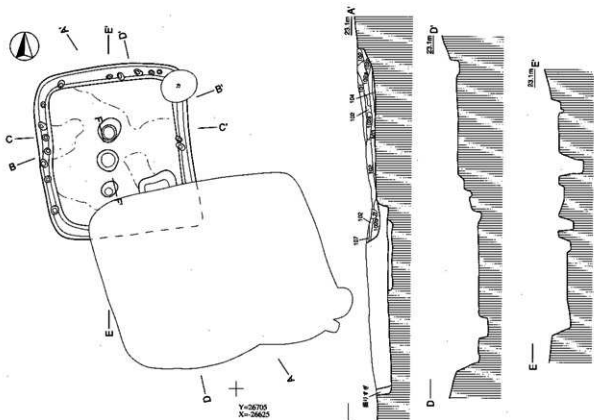
A030

検出地区 E5-3G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の堅穴住居として、A042・A043等がある。3軒の住居跡の重複。A030cが一番古く、順にA030b・A030aと新しくなる。また、遺物実測図に付してあるアルファベットは、それぞれ帰属するであろう住居跡のものと同じである。

A030a

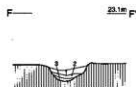
遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、広範囲に硬化面を検出している。小穴を3基検出した。P1、P2については柱穴と考えられる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周すると思われる。竈は検出されなかった。重複部分に位置していたものと思われる。住居跡に灰跡を検出、覆土の観察等から鍛冶炉と考えられる。

覆土は、色調を基本に10層に分層。焼土を含む覆土が多く確認され、人為的な埋め戻しが想定される。
遺物 床面直上から覆土上層にかけて土師器を中心に多量に出土。高台付皿形土器が出土する時期である。墨書土器は、図示したもの他に判読不能の細片も数点出土している。「寺」の墨書土器、磁鉄と思われる鉢形土器が出土し、更に椀形鉄鉢、鉄製品が出土も注目される。



- | | | | | | | |
|-------|--------|------|----|-----------------------|---------|----------|
| 101層 | 暗褐色土 | やや強い | 強い | 暗褐色土 | 褐色土 | 焼土少 |
| 102層 | 暗赤褐色土 | やや強い | 強い | 暗褐色土 | 焼土多 | 焼土粒多 |
| 102a層 | 暗赤色土 | やや強い | 強い | 焼土主体 | 暗褐色土少 | 焼土ブロック散在 |
| 102b層 | 暗赤灰褐色土 | やや強い | 強い | 暗赤褐色土と白色粘土が火熱により赤色焼土化 | 暗褐色土少 | |
| 103層 | 暗褐色土 | やや強い | 強い | 暗褐色土少 | 濡ったローム | 焼土少 |
| 104層 | 暗黄褐色土 | やや強い | 強い | 暗褐色土 | 濡ったローム | |
| 105層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い | ローム主体 | 暗褐色土少 | |
| 106層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い | 濡ったローム | 暗褐色土層少 | |
| 107層 | 暗褐色土 | やや強い | 強い | 暗褐色土主体 | 褐色土少 | |
| 201層 | 黒褐色土 | 強い | 強い | 黒褐色土 | 濡ったローム少 | |

- | | | | | | | |
|------|-----|-----------------------|---------|----------|--|--|
| 粘性 | しまり | | | | | |
| やや強い | 強い | 暗褐色土 | 褐色土 | 焼土少 | | |
| やや強い | 強い | 暗褐色土 | 焼土多 | 焼土粒多 | | |
| やや強い | 強い | 焼土主体 | 暗褐色土少 | 焼土ブロック散在 | | |
| やや強い | 強い | 暗赤褐色土と白色粘土が火熱により赤色焼土化 | 暗褐色土少 | | | |
| やや強い | 強い | 暗褐色土少 | 濡ったローム | 焼土少 | | |
| やや強い | 強い | 暗褐色土 | 濡ったローム | | | |
| 強い | 強い | ローム主体 | 暗褐色土少 | | | |
| 強い | 強い | 濡ったローム | 暗褐色土層少 | | | |
| やや強い | 強い | 暗褐色土主体 | 褐色土少 | | | |
| 強い | 強い | 黒褐色土 | 濡ったローム少 | | | |



- | | | | | | | | |
|----|-------|------|----|--------|------|-------------|----------|
| 1層 | 暗褐色土 | 少し強い | 強い | 暗褐色土主体 | ローム | 焼土粒少 | コークス状の粒少 |
| 2層 | 黒褐色土 | 弱い | 弱い | 暗褐色土主体 | ローム少 | コークス状のブロック多 | 焼土粒少 |
| 3層 | 暗黄褐色土 | 弱い | 弱い | 暗褐色土 | ローム | 焼土粒散 | |

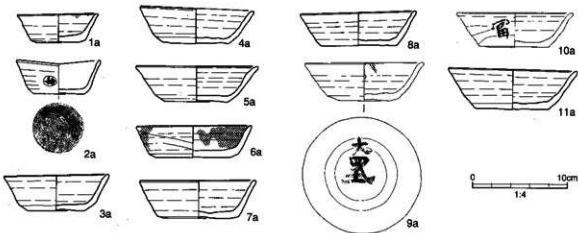


図 2-4-46 A030a

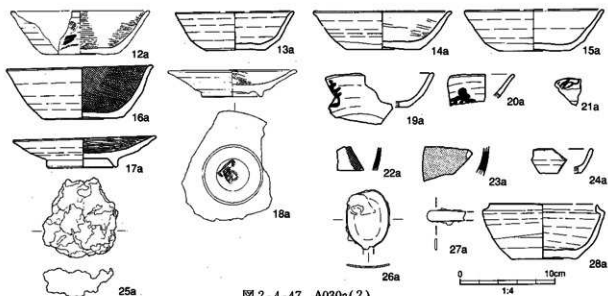


図 2-4-47 A030a(2)

A030b

遺構 小型の隅丸長方形のプラン。床は壁際はロームの床で、住居跡中央は、黒褐色土主体の貼床であった。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周すると思われる。竈は南東隅に位置するが、煙道は壁に対して直行していた。両袖とも残り、遺存状況は比較的良好であった。両袖とも内側がよく焼けていたが、その他の部分で明瞭な赤化範囲は検出されなかった。燃烧部は若干凹んでいた。天井部は断面にて一部検出された。

覆土は、色調を基本に13層に分層。覆土中層から竈を壊した時点で散乱したと思われる粘土を多く検出している。住居廃絶時に竈を壊し、人為的な埋め戻しをしたと考えられる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて須恵器の坏、蓋を中心に多量に出土。ロクロ土師器出現以前の様相か。墨書土器とともに輪の羽口、鉄製品が出土していることは注目される。

A030c

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームと少量の暗褐色との混合土の床であった。小穴は検出されなかったが、住居跡南北隅でそれぞれ、若干低くなっていた。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は南東隅に位置し、煙道は壁に対して斜行していた。b住居構築の際に大部分が破壊され、痕跡的に遺存する。袖は片袖のみ残り、袖の内側がよく焼け、燃烧部においても明瞭な火床が検出された。燃烧部は若干凹んでいた。天井部は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に1層のみ検出。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。注目すべきは、竈内から、三彩陶器と思われる獸脚が出土している。

所見 3軒とも奈良～平安時代にかけての住居跡の重複である。注目すべきはc住居の獸脚の出土であるが、3軒とも共通する項目として、仏教的色彩が濃い遺物と鍛冶工房を連想させる遺物が出土していることである。これまで、向境遺跡第2群の壑穴住居跡の記載の中で、再三繰り返してきたが、本住居跡群も例外ではなく、隅丸長方形のコーナー竈を指向しており、向境遺跡の奈良・平安時代の集落の中でも中心的な住居跡となる可能性がある。時期的な検討をすれば、繰り返しになるが、獸脚を出土したc住居跡が奈良時代後半、次のb住居がロクロ土師器出現以前の須恵器の坏、蓋を中心に出土する時期で、奈良～平安時代、更にc住居跡が土師器の高台付皿が出土する時期で平安時代に相当するとと思われる。

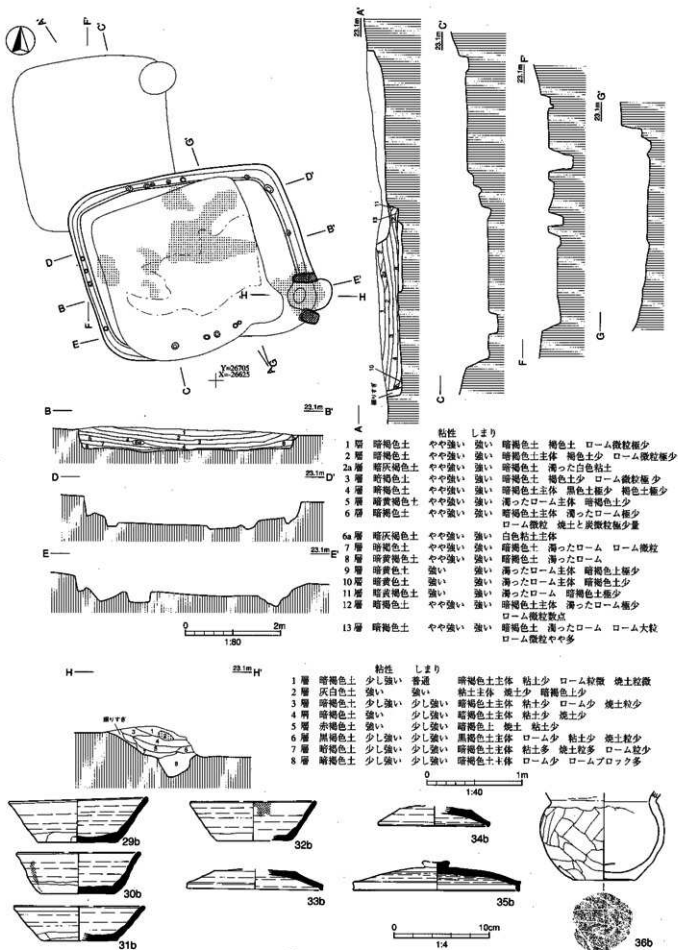


図2-4-48 A030b

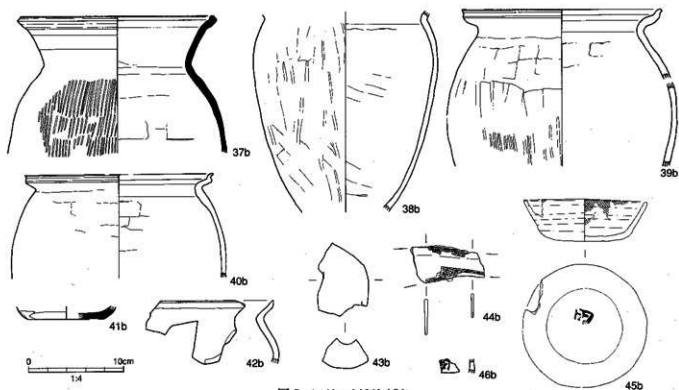


図2-4-49 A030b(2)

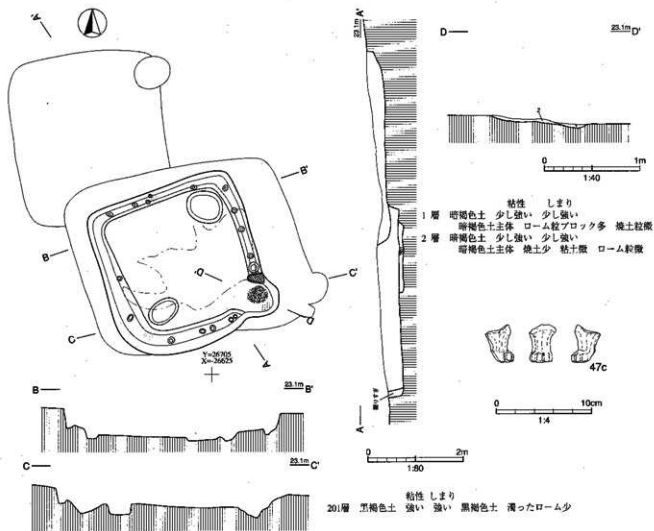


図2-4-50 A030c

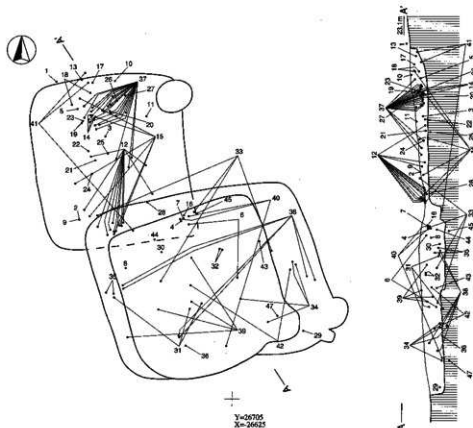


図 2-4-51 A030 遺物出土状況図

表 2-4-25 A030遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	84×57×31 ロクロ成形 逆台形状 口縁上端 やや外反 底部ヘラケズリ	明橙褐色 菅	砂粒雲母	2/3	口縁内面 タール状付着物
2	土師器 坏	底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ			完形	墨書「 <u>田</u> 」 体部外面横位
3	土師器 坏	109×60×39 ロクロ成形 体部下半くびれる 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 菅	砂粒雲母	3/4	
4	土師器 坏	119×69×40 ロクロ成形 逆台形状 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗橙褐色 菅	砂粒雲母	完形	
5	土師器 坏	(127)×66×38 ロクロ成形 逆台形状 口縁外反 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 菅	砂粒雲母	2/3	
6	土師器 坏	120×78×34 ロクロ成形 逆台形状 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	明橙褐色 良	砂粒雲母	3/4	
7	土師器 坏	121×84×41 ロクロ成形 逆台形状 底部回転ヘラケズリ	橙褐色 悪	砂粒雲母	完形	
8	土師器 坏	122×81×37 ロクロ成形 器形やや歪む 底部へら切り? 後端らにヘラケズリ	橙褐色 菅	砂粒多	2/3	
9	土師器 坏	122×54×42 ロクロ成形 口縁やや外反 底部中央回転糸切り後 底縁回転ヘラケズリ	褐色 良	砂粒雲母	略完形	口縁内面に少量の タール状付着物 墨書「 <u>大</u> 」 底部外面

10	土師器 坏	120×72×37 ロクロ成形 口縁外反 底部中央回転糸切り後 底縁回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒雲母	略定形	墨書「冨」 体部外面
11	土師器 坏	134×77×44 ロクロ成形 歪みを持つ体部外傾し口縁でやや内湾気味 体部下端底部回転ヘラケズリ	茶褐色 良	砂粒	2/3	
12	土師器 坏	(145)×80×46 ロクロ成形 体部外傾 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	橙褐色 普	砂粒雲母	1/2	墨書 体部外面
13	土師器 坏	(124)×62×41 ロクロ成形 体部外傾上半に括れを持つ 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	暗橙褐色 普	砂粒雲母	1/2	
14	土師器 坏	(143)×78×41 ロクロ成形 口縁外反 器内深く底部大い 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 全体ヘラミガキ	橙褐色 やや悪	砂粒雲母	2/3	器面やや磨耗
15	土師器 坏	(145)×77×44 ロクロ成形 体部外傾 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ	明橙褐色 悪	砂粒雲母	1/2	器面磨耗
16	土師器 坏	152×86×56 ロクロ成形 体部丸みを持ちやや直線的に立ち上がり口縁でやや外反 外面 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 曹なヘラミガキ	砂粒褐～ 赤色 ◎褐色 良	砂粒雲母	略定形	器面の剥離多 内黒
17	土師器 高台付皿	149×75×33 ロクロ成形 高台部やや直線的 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り後底縁回転ヘラケズリ 内面 曹なヘラミガキ	橙褐色 良	砂粒雲母	略定形	体部内面 やや器面剥離
18	土師器 高台付皿	(133)×64×28 ロクロ成形 口縁外反 高台中央がやや膨らむ高台内中央突出 外面 体部下端回転ヘラケズリ 底部中央回転糸切り 内面 曹なヘラミガキ	明橙褐色 良	砂粒雲母	1/3	墨書「冨」 底部外面
19	土師器 坏	外面 体部下端ヘラケズリ -X-X- ロクロ成形	褐色 良	砂粒微	口縁片	墨書「寺」 体部外面
20	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 内面 丁寧なミガキ	暗橙褐色 普	普	口縁片	墨書「口」 体部外面
21	土製品 紡錘車	-X-X-				墨書「口」
22	陶器	-X-X-	中灰色 青	緻密	胴部片	
23	二彩陶器	-X-X- ロクロ成形	◎緑色 ◎乳白色 普	緻密		
24	土師器 坏 灯明皿	-X-X- ロクロ成形 外面 底部一層糸切り 内面 口唇～内面にかけて一部スス付着	淡褐色 普	普	口縁片 ～ 底部片	
25	鉄製品 椀形鉄鉢	82×73×31 重量199.5g 少量の木炭及び木炭灰を持つ 鉄錆砂鉄付着				
26	鉄器	63×45×15 重量16.5g				
27	鉄器	40.5×12×2 重量4.7g				
28	土師器 鉢	113×67×60 ロクロ成形 口縁短く立ち上がり上端でやや外反 肩部が張る 体部下端底部回転ヘラケズリ	橙褐色 良	砂粒雲母	略定形	

29	須恵器 坏	145×84×48 ロクロ成形 体部外傾 口縁外反 体部下端一底部ヘラケズリ	灰褐色 差	疎砂粒 雲母	4/5	
30	須恵器 坏	(129)×(78)×44 ロクロ成形 体部丸みを持つ	灰褐色 差	砂粒雲母	1/2	外面体部～底部 にかけて タール状付着物
31	須恵器 坏	(137)×(80)×37 ロクロ成形 体部外傾 体部下端一底部ヘラケズリ	灰色 差	粗砂粒	1/3	
32	須恵器 坏	(132)×(78)×42 ロクロ成形 体部下端一底部ヘラケズリ	灰褐色 差	粗砂粒多	1/4	口縁内面に 少量の タール状付着物
33	須恵器 蓋	(144)×(138) ロクロ成形 体部上半は平坦 口縁外面凹線状 体部上半 回転ヘラケズリ	暗灰色 差	粗砂粒 小石	1/3	
34	須恵器 蓋	119×113 ロクロ成形 口縁内傾 体部上半 回転ヘラケズリ	灰色 良	砂粒	4/5	
35	須恵器 蓋	177×168 つまみ径(28)ロクロ成形 口縁内傾し端部でやや外反 体部はなだらかつまみは扁平で中央部が窪む 体部上半 回転ヘラケズリ	暗灰色 良	砂粒 小石	2/3	
36	土師器 小形壺	—×65×96 広口 胴中央が膨らむ 外面 口縁頸部ヨコナテ 胴部ヘラケズリ 底縁木葉痕 内面 口縁頸部ヨコナテ 胴部ヘラケズリ	砂褐色 砂褐色 良	砂粒	4/5	内外面スス付着
37	須恵器 壺	204×—×(147) 頸部「L」の字状口縁は外面に稜をもち上端内側に屈曲し立ち上がる 断面三角形状 外面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半タタキ目 内面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半ヘラケズリ及びナテ	黒褐色～ 茶褐色 良	砂粒		口縁～ 胴部片
38	土師器 壺	—×—×(215) 胴上半がやや膨らむ 外面 頸部ヨコナテ 胴部上半～下半ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 頸部ヨコナテ 胴部上半～下半ヘラケズリ	暗褐色 差	砂粒多	1/3	
39	土師器 壺	206×—×(168) 口縁外反 外面凹線状に調整 外面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半ヘラケズリ下半ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半ヘラケズリ	褐色 差	砂粒雲母		口縁～ 胴部片
40	土師器 壺	(197)×—×(110) 口縁外反し上端つまみ上げられる 外面凹線状に調整 外面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半ヘラケズリ 内面 口縁頸部ヨコナテ 胴部上半ヘラケズリ	暗褐色 差	粗砂粒		口縁片
41	須恵器 坏	—×—×— 胴部下端一ヘラケズリ 体部外面の一部タール付着 底部一回転糸切りヘラケズリ	砂灰色 砂暗赤灰 差	緻密		
42	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外面 口縁～胴部上半ナテ	淡褐色 差	差		口縁片
43	土製品 繻羽口	—×—×—	褐色 差	粗		
44	鉄器 鏝	78×37.5×3.5 —×35.5×2.5 重量30.5g				
45	土師器 坏	128×80×45 ロクロ成形 体部下半ややくびれる 底部ヘラケズリ 口縁内外面にタール状付着物	褐色 差	砂粒	略完形	墨書「田」 底部外面
46	土師器 坏	—×—×—	赤褐色			墨書「田」 体部外面
47	陶器 獸脚	残存長(40)短足の獸脚 ヘラによる削り刻みなどで整えられる 釉薬は剥落したものと思われる				断片

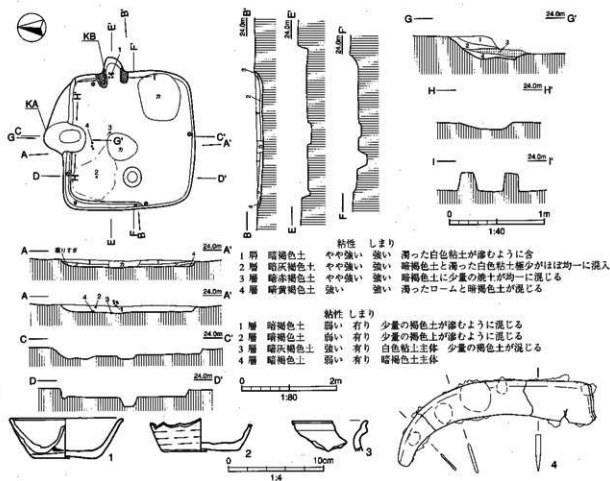


図 2-4-52 A031

表 2-4-26 A031遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(120)×67×43 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体回転糸切り後底縁ヘラケズリ	淡褐色 青	青	2/3	遺跡「□」 体部外面
2	土師器 坏	—×(78)×(35) ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体静止ヘラ切り後底縁ヘラケズリ	暗褐色 青	青	1/3	
3	土師器 壺	—×—×(32) ロクロ成形 常総型	褐色 青	白色砂粒 少量 青		口縁片
4	鉄器 鏢	207×23×2				

A031

検出地区 E4-52G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A036・A037・B005等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、一部に硬化面を検出している。小穴を1基検出し、若干斜めに掘削されていることから出入り施設と思われる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は北西隅で一部検出された。竈は、2基検出され、KAからKBへの作り替えが行われている。KAは北壁中央で検出されたが、袖、天井部等は検出されていない。燃焼部は浅く掘り込まれていた

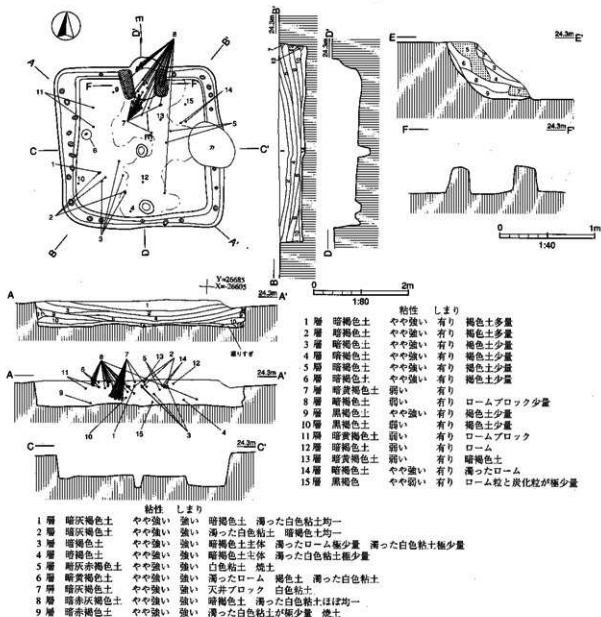


図 2-4-53 A032

が、火床は検出されなかった。KBは東壁中央で検出され両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が赤化している他、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。天井部は断面で確認された。KBは自然崩落したと考えられる。

覆土は、色調を基本に4層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土した。墨書土器、鉄製品の出土が目される。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。

A032

検出地区 E4-81G。台地平坦部に立地する。周辺の奈良・平安時代の遺構として、A024・A041・B002等がある。

遺構 小型の隅丸方形のプラン。床はロームの床で、硬化面を広範囲に検出している。小穴を2基検出し、P1は柱穴、P2は出入口施設と思われる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周する。竈は、北壁中央で検出され、両袖とも残り遺存状況は比較的良好であった。袖の内側が赤化している他、煙道等で明瞭な赤化範囲を検出するには至らなかった。天井部は断面で確認された。カ

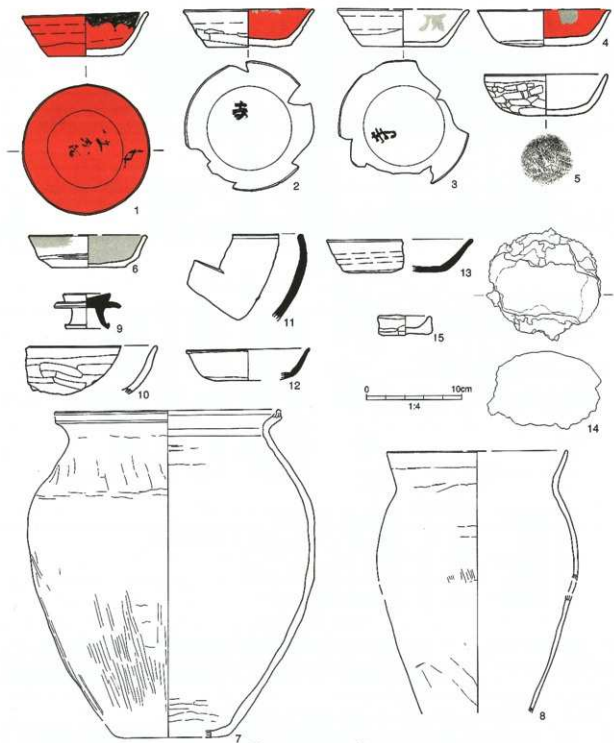


図2-4-54 A032(2)

マドは自然崩落したと考えられる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。床面直上に少量の焼土、炭化物を検出し、覆土中層からも焼土範囲を検出している。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土した。「寺」の墨書土器、托、磁鉢等の仏教関連の遺物が出土し、灯明皿として使用されているものが多い。また、碗形鉄鉢の出土が目される。

所見 出土遺物から、奈良時代の竪穴住居跡と判断した。他の住居跡と同じく、この住居もまた、仏教と製鉄関連の遺物が多い。

表 2-4-27 A032遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	全体 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体ヘラ切り	赤褐色 良	良	完形	赤彩墨書 底部外面 体部外面
2	土師器 坏	全体 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ底部糸切りのちヘラケズリ 内面 タール付着	赤褐色 良	良	略完形	墨書 底部外面 「寺?」
3	土師器 坏	全体 ロクロ成形 体部内外面タール付着 外面 胴部下端ヘラケズリ 底部全体ヘラケズリ	赤褐色 良	良	2/3	墨書赤彩 釈文「寺」 底部内面
4	土師器 坏	(138)×(96)×38 全体ロクロ成形 底部全体ヘラケズリ 体部内面タール付着灯明皿として使用	赤褐色 良	良	1/3	赤彩内外面
5	土師器 坏	126×56×43 ロクロ成形 外面 口縁-口唇を僅かに折り返す 胴部全体横位のヘラケズリ 底部中央木葉痕 底縁ヘラケズリ 内面 丁寧なヘラミガキ	黒褐色 普	普	2/3	刻書「口」 底部外面
6	土師器 坏	(122)×78×34 全体 ロクロ成形 外面 体部下端ヘラミガキ 底部全体ヘラミガキ 一部スス付着 内面 丁寧なミガキ	赤褐色 黒色 普	普	1/3	内黒
7	土師器 甕	(236)×(115)×(347) 口縁外反し上端はつまみ上げられる 外面凹線状の調整 胴上半強る 外面 口縁頸部ヨコナデ 胴上半ヘラナデ 下半下端ヘラケズリ後ヘラ ミガキ 底部木葉痕 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部上半下ヘラナデ 下端ヘラケズリ	橙褐色 普	粗砂粒 雲母	略完形	
8	土師器 甕	(188)×—×(278) 口縁は頸部よりゆるやかに外傾立ち上がる 胴上半に膨らみを持つ 外面 口縁頸部ヨコナデ輪積痕1段 胴部器面剥離磨耗のため遺存状態 不良 ヘラケズリ後ヘラミガキか? 内面 口縁頸部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	橙褐色 普	砂粒雲母	2/3	
9	須恵器 托	45×37×70 全体ロクロ成形 口縁体部最上段を一段積み上げ口縁を成形 外面 口縁ナデ 胴部上半横位のヘラケズリ	灰白色 良	緻密	略完形	仏具
10	土師器 坏	全体 ロクロ成形 外面 横位のヘラケズリ	褐色 普	普	口縁片	
11	須恵器 鉢	全体 ロクロ成形 口縁内湾する	灰色 良	緻密	口縁片	
12	須恵器 坏	(128)×—×33 全体ロクロ成形 外面 体部下端ヘラケズリ 底部回転糸切り	青灰色 普	緻密	口縁- 体部	内外面一部 タール付着
13	須恵器 坏	全体 ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ タール一部付着 底部全体回転糸切り 内面 タール一部付着	青灰色 普	普	口縁- 底部	
14	鉄器 鉄滓	119×118×8.4 重量1189.4g				
15	土師器 ミニチュ ア土器	口縁一部スス付着灯明皿として使用する	淡褐色 普	普	略完形	